

私立グリモワール魔法
学園～狩人は夜明けを
求めて～

リユーラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界に霧の魔物が現れて300年。人類はその生存圏を減らしながらも戦い続けていた。

ある日、一人の少年が魔法使いに覚醒した。

しかし、少年は他の魔法使いと違いほとんどの魔法が扱えない。無力と言っても過言ではないだろう。代わりに無尽蔵と言える魔力を持ち、それを他の魔法使いに渡すことが出来るという力を備えていた。

渡 明斗（わたり あきと）。彼は私立グリモワール魔法学園でいかなる成長を遂げるのか…

しかし、我ら狩人の血縁。夜において獣を狩り、夜明けを迎える者なり…

目次

はじめまして魔法学園 | 1

明くる日 | 11

とても疲れる日 | 21

夏海ちゃんの突撃取材！特派員は見た！ | 31

フラグの建てすぎは体に良くない | 42

怜、推して参る | 53

幕間：備え | 65

訓練に明けくれて | 70

もも、出勤します！ | 79

平凡ってなんだっけ | 92

ランデブー with 熟しすぎた少女 | 101

野薔薇姫と書いてパーフェクトと読む | 113

113

お姉さんといっしょ | 151

天に愛されし軍神 | 164

第7次侵攻（前編） | 186

第7次侵攻（後編） | 204

狩人の業 | 222

エミリア、クエストを放り出す | 231

愚者の檻 | 250

鐘の音は遠く | 270

テストメント・グリモワール | 298

はじめまして魔法学園

これは、夢？でもたぶん良い夢なんかじゃない。

その夢には…

子供を守り儂くも散った少女がいた…

最後まで間違いを正すことも、和解も出来ず後悔の中で死ぬ姉妹がいた…

最期まで勝ち目のない戦いを続けた戦士がいた…

絶望に折れる人もいた…

それでも戦い続ける人もいた…

これは悪夢で、目を覚ませば記憶からも消えてしまう。でも何故か他人事のように

思えない…

声が聞こえた

「それはそうだろう。これは君に関係あることなのだから。」

声の主はよく見えない。でも一方的に告げてくる。

「この運命を変えたいかね？名前も知らぬ他人のために君はそこまで出来るかい？」

変えられるなら、と願った。だって滅びる最期まで隣人を想い、未来に祈った人々が

いるんだから。

「誰よりも獣に近い君がそれを言うか。面白い。ならばそれを行う権利をやるう。血によつて人を超えられるのならまた、血によつて人に留めることもできよう。」

直後、身体が沸騰するように熱くなる。それでも意識は消えない。頭に声が響く。

「君は狩人となる。魔物を狩り、霧を払い、人間の世に夜明けをもたらしてみな。権利はあげたんだ。義務を果たしてみせろ。」

∴

∴

∴

やけに嚴重な車両に運ばれ学校？の正門にたどり着いた。

これ学校だよな？てか日本だよな？造りが西洋的な佇まいだし。え？敷地面積どんだけあるの？

混乱してる俺の前に兎のぬいぐるみみたいなのがいた。

「よ〜！お前が今日から入る転校生だな！」

再びの混乱。さすが魔法学園ぬいぐるみが話しかけてくるとは…

話を聞いてたらここの教員で兎ノ助さんというそう。なんでそんな姿なのかはよ

くわからんが深く踏み込むのはやめておこう。どうやら学園の説明もしてくれるみたいだし。

「学園に入学する生徒には全員に話していることだ。俺たちの未来を脅かす【霧の魔物】…その恐ろしさは言うまでもない。これまで人類は、生存圏を脅かされ、後退を余儀なくされてきた。仕方ないよな。いつ現れるかも、どうすれば駆逐できるかもわからないんだ。ただ、黙ってやられるわけにはいかないから、抵抗はしてきたがな。」

…で、魔物に立ち向かったのは軍、傭兵。それ以外にも色々いたが…やっぱ主役は魔法使いだ。君は魔法使いに覚醒した。だから学園に転校してきた…わかっているな？

これから君は魔法の腕を磨き、クラスメートたちと絆を深めていく。そして人々を守るために【霧の魔物】と戦うことになる。」

そこで兎ノ助さんは一区切りし、少し溜めたあとこう言ってくる。

「例えばの話だが、君は1年後、生きていないかもしれない。」

「人間なんてそんなものでしょ。明日の朝朝食を喉に詰まらせて死ぬかもしれないんだし。言ったらキリがない。」

「まあ、それはそうなんだが…続けるぞ。学生は学園が全力で守るが、魔物は人間の都合なんか無視だからな。魔物との戦いでは、いつ誰が死んでもおかしくないんだ。けど、魔法使いは戦わなきゃならない。これは運命みたいなもんだ。魔物に対しては、魔

法が一番の武器だからな。だから、俺はこうアドバイスをしよう。学園生活を楽しめ、そして信頼できる仲間を作れ。それが結果的に、君の生存率を高めることになる。」

アドバイスのあとシリウスは終わったのか比較的ライトな態度で学園についての説明をしてくれる。

「分からないことは、これから来る案内人の智花に聞いてくれ。最後に…これは男子にだけ言っているんだが、男の魔法使いには一つ大きな利点がある…」

ん？これだけ溜めるってことはそんなに大切なことが…そんなに大切なら先に言ってくれれば…

「男女比が2：8つてところだ」

…

…

…

いや、大切かもしれないけど…さ。

少し唾然としていたら近くから足音が聞こえる。そちらに顔を向けると茶髪の女の子がこちらに向かってくる。しかし、その様子は少しおかしい。

「はあ…はあ…。兎ノ助さーん！」

「ん！おつ…智花！案内係なのに遅れるなよな！」

息を切らしながら女の子が駆け寄って来た。

「す、すみません。クエストが発令されちゃって…」

「えっ！マジで？」

おい。俺を置いてけぼりにしないでくれ…。それにしてもクエスト？なにそれ？

「はい。今から魔物退治に行かないと行けないんですが…」

ああ、なるほど。読めたぞ。魔法使いに覚醒したやつは将来確実に霧の魔物と戦う最前線にでる。学園生の内からその戦闘に慣らしておこうって感じか。

と、なるこの子は今からクエストだし案内役は別の人とかどう…

「ふーん。じゃあこの転校生も一緒に連れて行けよ」

？今なんつったこの兎。

「ええ？」

智花、と呼ばれていた女の子も困惑している。まあ、普通そうだろうな。

「ええ！そんな。危険ですよ。まだ魔法の使い方も知らないのに」

良いぞ！もつと言ってやれ。

「まあまあ。そんなに強い魔物じゃないんだろ」

「は、はあ。えーと、大丈夫ですか」

俺がだいいじよばないんですが…

声も上げられず呆然としていたら兎ノ助さんがこちらを向いた。

「さあ！君の魔法使いとしての人生はここから始まる！頑張れよ！」

お前の人生終わらせたらうかクソ兎、と思いましたが口には出さない。

女の子もまだ少し困惑しつつこちらを向きながら

「そ、それじゃあ行きましようか。あ、そうそう…」

それでもその顔に笑顔を浮かべる。

「私立グリモワール魔法学園へようこそ。よろしくお願ひしますね！」

「あ、ああ。よろしく。そういえば自己紹介がまだだったな。渡 明斗だ。」

「私は南 智花です。え、えっと。本来は学園の案内係だったんですがちよつと順番が変わっちゃって…。すみません。いきなりクエストになっちゃいました。クエストは普通の授業とは違うので行きながら教えますね。」

そのあとは智花にクエストの手順を教わりながらデバイスの使い方や制服の機能などを教えてもらった。ま、デバイスは手元になかったけど。まあ、すぐ水色の髪をした

科学者風の少女が届けてくれたし無問題だな！

そしてなんと魔法学園の制服は戦闘服としての特性もあるらしく。戦闘時に本人の戦闘スタイルに適した形を取るらしい。その形状は本人のイメージに依るらしいが俺の場合はまだそのイメージが固まっていないためかうまく変化しなかった。せいぜい靴が長い丈のブーツに変化したのと黒に近い灰色の外套が出たくらいだ。

ちなみに智花さんはいかにも、な。魔法少女衣装だ。元気なイメージのある智花にピンの衣装はとても映える。こちらにクエストがどういふものなのかを説明しつつ音頭を取る。

「さ、出発しましょう。今回の討伐対象はミノタウロスです。」

学園から出て、魔物が居るとされる場所まで移動する。道中は智花が緊張を和らげようと話しかけてくれたので助かった。

「そういえばお聞きしなかったんですが。どんな魔法が得意なんですか？」

「うん？俺は魔法使いに覚醒して日が浅いしまだ魔法を使ったことがないからな。正直まったくわからん。」

「え？それじゃあ私と一緒にですね」

「!?いや、それはやばくないか？」

「実は私も簡単な魔法なら出来るんですが…上級魔法ともなると…えへへ」

いや、まあ。簡単な魔法使えるなら心配はないか。

そんなこんなで色んなことを話ながら進んでいた。途中で空から上級魔法が降ってきたりもしたけど気にしては行けない。危うく転校初日で上手に焼けました！事案になりかけたけど気にはいけない。

「あ、そうだ。」

「どうしました？明斗さん？」

「俺の体質なんだけど。なんか普通の人より魔力が多いらしくて。なんか凄さがよくわからんけどその魔力を他の魔法使いにも渡せるらしいぞ。」

「え!?そんな体質の人は初めて聞きました」

やっぱりそうなんだな。とかのんきに考えてたけどこの後すぐに自分の体質がどれだけすごいかわかった。

ミノタウロスの戦闘?常に最大火力を出せる智花の前にあっさり霧散したよ。簡単なものとはいえ常に威力が最大なのだから余裕ですよ。

つまり俺は外付けの動く魔力タンクというわけだ。

そこ!誰だGN電池とかいったやつ

後々調べたところ今の技術では魔力を貯蓄するということは出来ずまた、他人への魔力の譲渡も不可能らしい。ちよつと以上にこの体質は厄介事を招きそうだな。

クエストが終わったあとはその日の授業は免除らしい。普通はクエストで魔力を消費して非常に疲れるためそれを癒すための措置らしいが俺という魔力タンクから常に魔力補充されていたため俺も智花も疲れていない。

智花が歓談部に手配して歓迎会をしてくれるらしい。学園の案内は後日になるだろうし好意に甘えさせてもらおう。

夜。用意された寮へと入り実家から送られた荷物を整理する。そこに幾つか見慣れないものを発見する。武器、なのだろう。アンティーク銃、はまだ分かる。これは？長い柄の鉞だろうが刃の反対にギザギザのまるで鋸のような刃の付いている。持ち手を見ると刃を畳むことでノコギリ部で攻撃出来るようだ。

こんなもの実家にあっただろうか？思い出せない。

しかし、魔法としての特性が付いていない以上は霧の魔物との戦闘には向かない。どうにかならないだろうか。

武器の入っていた木箱の底に一枚のメモのようなものと本を一冊見つける。前半部分掠れて読めないがそこにはこう書かれていた

…の世…から…を求めよ。狩りを全うするために

「なんだ？何を伝えたいんだ？くそっ！」

本のほうは？こちらに何か書いてあるのか？

そう思い本をめくる。

そこには武器を強化するための血晶石というものを作るための魔法や先程のアンテイク銃の弾丸である水銀弾というものを作るための魔法が事細かに綴ってあるだけだった。すべてに目を通したがメモに関するものは何もなかった。本の最後のページには写真のようなものがある。教会だろうか？どこかは分からないが一人の人物が足を組椅子に座っている。その来ている服は不思議と俺が今日出した戦闘服によく似ていた。灰色のコートに胸元には紅いブローチ。丈の長いブーツ。

まるで貴族のようなそれなのに。よく見ると実戦で使うことを前提にしているような衣装。それを纏う人物は貴族というより、そう……狩人だ。

明くる日

転校2日目。

あのあとですか。すぐ寝ましたよ。いや、だってあの本、魔導書だろうけど、読めはするけど俺の魔法の知識ZEROだから術式分かってても理論分かんないし。魔法学園だって決まった場所以外での魔法の使用は禁止されている。バレればただではすまないのだからあれには今のところ手出しはしない。

武器も丁寧に保管している。あの銃も水銀弾ないと使えないみたいだし。強いていうならイメージが固まったおかげで戦闘服はそれっぽくなった。

転校初日に挨拶が出来なかったためクラスに入るのはこれが初めてだ。

クラスは主に3つに別れていてそれぞれリリイ、ローズ、サンフラワーだ。

ちなみに俺はサンフラワーに組み込まれるらしい。クラス見たけど昨日の歓迎会で見た顔がちらほら。智花はリリイだから別クラスか。

代わりに歓迎会の途中で絡んで来た報道部の岸田 夏海がいた。これは面倒になるな。転校生だ！取材させろ！って言われるんだらうなまた。

夏海をあしらいつつ午前中の授業を終えると教室に智花と、昨日の歓迎会に参加して

いた神風がいた。

昼飯は学食で済ませるつもりだったが智花がわざわざお弁当を作ってきたというので御馳走になることに：クラスからの視線が痛い。

「どうぶつ」

と智花がお弁当を広げる。

夏海はにまにましている。そして何故か神風は目から謝意を感じる。謝れるようなことはされた覚えがないが：

いや、広げられたお弁当を見て神風が何故複雑な心境をしているのかがわかった。そして夏海、てめーのにまにまの意味もな！

なんだ？どうやったたら料理がこんな冒険的な代物になるんだ？もしかしなくても胃壊れるだろ。

しかし、だ。智花の顔には全くの悪気がない。100%善意だ。ここでやつぱりいらないとか言えない。俺にはそんな事言えない。なるほどさっきのクラスからの視線もあれだな。こいつ正気か!?みたいな感じだったんだな。先に言ってくれ：

もう引けない。止まることは出来ない。

箸を手に取り、いざ。

「い、いただきます…」

そこから先は地獄だった。お弁当を口に入れる度にだんだんと破壊されていく味覚。何を入れたらこんなむせそうになるんだ、と聞きたくなる刺激臭にやられていく嗅覚。劇物が侵入し痙攣し逆流しそうになる胃を気合いだけで抑え顔色も変えずに目の前の料理を押し込む。

その様子に夏海でさえ申し訳なさそうな顔をし、カメラのシャッターを切ることも忘れ。神風はある意味俺より辛そうだった。

最後の一口を飲み込め俺の耳へと校内放送が聞こえる。

『転校生の渡 明斗。至急生徒会室へ！繰り返す。転校生の渡 明斗。至急生徒会室へ！』

「なんか呼ばれたから言ってくるわ」

と告げラツキーとばかりに急ぎ足で教室を抜け、そのままトイレへ直行する。クラスの間々は静かに勇者を称えるように俺の通り道を開けてくれた。

トイレの前で金髪の子女生徒とすれ違う。その時にハンカチを落としたのに気づき呼び止めようとするも吐き気で失敗した。顔は覚えてるし後で渡すか、とハンカチを回収してトイレへ駆け込む。

胃がスッキリした俺はその辺にいた生徒に生徒会室の場所を聞き、生徒会室へと向かう。

「なんだこれ」

生徒会室の前には多数の生徒たちが群がっていた。

俺の覚えでは放送で生徒会室へ呼ばれたのは俺だけのはず。

ガラツ！と勢いよく生徒会室のドアが開けられる。

中からは他の生徒と違う制服を身につけた長い金髪の女性が現れる。ちなみにさっきのトイレですれ違った娘ではない。

「お前たち！サインとか写真とか！あたしはアイドルじゃないんだぞっ！」

小言をこぼしつつ生徒会室に群がっていた生徒を追い返していく。そんな中動かない俺を見つけたのだろう。

「ん？見かけない顔だな。お前が噂の転校生か。」

何？俺って噂になってるの？悪評とかじゃないよね？ま、まさか今日呼ばれたのって……

「よく来た。武田虎千代という。この学園の生徒会長だ。よろしくな。」

良かったあ！なんも悪いことしてないけど早速死んだかと思っただけそんなことはなかった。

「……校内放送で呼び出して悪かったな。だが、転校生には一つ義務があつてな。アタシ

と面談しなければならぬのだ。といっても、アタシが決めたんだがな」

やべー。まだわかんねーぞこれ。

「校内放送の件はお気になさらず。むしろ助かりましたし…。それで面談とは何を話すんですか？」

「そんなに難しいことは尋ねん。プライバシーにも踏み込まん。安心してくれ。さあ、部屋に入って待っていてくれ。」

そういうと会長は残りの生徒たちを追い払い部屋に入ってきた。

こちらに向かいながら質問を投げかけてくる。

「まだ転校してから日が経っていないが…どうだ？」

もうすでに2回死にかけてるとか言えないよなあ…

しかし、こちらの心情など知らない会長は続ける。

「お前の体質は上の方でも話題になっただけ。そういう理由でなくとも男子の転校生は噂になる。女子が多いからな、ここは。」

2：8という神環境。だがしかしそれは同時に悪い噂立とうものならこの学園の居場所はなくなるといふことに他ならない。女子は怖いからな。

「まあ、そういうわけだ。お前は色んな人間に注目されているんだ。そのせいで不便な事があれば言ってみろ。なんとかしよう。」

世界で唯一の無尽蔵の魔力とその魔力を他人に渡せる能力。確かに色んな人間に注目されるだろうな。もちろん悪意を持って近づく者もいるだろう。それは会長も懸念しているであろうことだ。

「報道部などに追われたらいつでも生徒会室へ逃げ込め。いつでも保護してやろう。転校生はだいたい遊佐の遊び道具になるからな……」

「こちらに逃げ込め！……なんか変な幻聴ががが」

「その、遊佐ってどなたですか？」

いや、まあ、報道部の関係者なのは確かだろうけど。

「報道部の部長だ。気を付けろよ。弱みを握られると大変だ。」

「……キモに命じときます。」

夏海のところの部長とか絶対厄介だぞ。

一息つき会長が続ける。

「あとは交友関係についてだ。まあ、言ったとおり女子が多いからな。クエストで組むのも女子が多くなるだろう。それで親しくなるのは構わないが……魔法はメンタルに大きく影響を受ける。アタシは風紀委員ほど厳しくはしない。だが、不実な真似だけはやめろよ。それで何人もここにいられなくなっている。周りが女ばかり、というのは、いざというときに敵ばかりになるということだ。アタシも自業自得までは面倒みきれん

のでな。節度ある態度で臨んでくれ。」

っべー。マジでやっべー。もう無理。俺の胃のライフはもう0よ。物理的にも精神的にも…

会長はこちらにお構いなしに手を差し出しながら続ける。

「それが出来ればいい学園だ。歓迎しよう。転校生。」

「ええ、よろしく願います。会長殿」

俺もなんとかその手を握り返す事ができた。

そんなこんなで会長との面談も終わり教室に帰ろうとしたがハンカチの存在を思いだし少し他の教室も回る。

「うーん、見つからねえな」

とか言ったら見つけた。渡すために話しかけようとするが俺の声を予礼が遮る。その間に目標の人物は教室へと戻ってしまった。俺も午後の準備しないとな、体育だし。

いる教室は分かったし放課後で良いだろう。

HRも終わり。ハンターランクじゃねーよ。ホームルームだよ。ハンカチを持ち主に届けるために教室を出る。後ろを追いかけてきた夏海を撒き目的の教室の前にたどり着く。金髪の女子生徒を探し声をかける。

「どなたですか？私は急いでいるので。」

とつつきにくい雰囲気だな…

「これ、トイレの前で落としてから」

「あ、私のハンカチ。」

よーし。持ち主にも返したし帰るか。帰れねえよ。これからようやく学園の案内だよ。

「ありがとうございます。それと…ごめんなさい」

吹いた。どう見ても相手すんなオーラバリバリですもん。感謝こそあれ、いきなり謝るとは

「な、なんで笑うんですか。私、変なこと言いましたか？理由を教えてください。…あなたは、私がお礼の一つも言えない人間に見えますか。」

そつちじゃねーけど面白いからこのまま見守ろう。

「感謝を伝える礼儀くらい、さすがにわきまえています。もしかしてあなたは…私が子供のように意固地になっていると…？」

そこまでは言っていない意地っ張りには見えるがな

「まあ、小さいしな」

思ってもないことが口から出る。どうしてこうなった。昼間に会長から釘刺された

ばかりだぞ俺

「そうですか。私が子供…子供に見えると…そういうわけですね。」

やべー。2日目で居場所なくなる

「まあ、今回は許しましょう。お気に入りのハンカチも戻ってきたことですし」

助かったー！もうダメだと思った。なんとかなった。

「でも、次はありませんから」

「アツハイ」

すでに死にそうになってるけど放課後は始まったばかり。智花たちと校門前に集まり学園の案内してもらおう。最初に立ち寄ったのは購買。入学生ということでジュースを奢ってくれるらしい。ジュースを飲みながら神凧と俺の能力について話し合っていた。

魔力タンク話は聞いてる俺が辛いので購買部でバイトをしている桃世もも、通称ももちちゃんと適当にお話しつつ暇を潰す。つーかこの購買部すごいな。品揃えがシヨツピングモール超えてるんだけど。なんで有名人のサインまで売ってるの？もはや購買部じゃなくね？

話してるうちにももちちゃんの俺の呼び方が何故か「先輩」になっていた。なんかそういう雰囲気があるらしい。

そのあとも色んなところを案内されつつ訓練所や保健室、図書館などを回る。

ちなみに図書館行ったらさっきのハンカチ返した金髪の女の子もいた。図書委員の萌木が「冬樹さん」と言っていたので冬樹というのだろう。

ついでに図書室でさっそく魔法学の基礎書籍を借りておいた。ぶつちやけ通常授業は問題ないし当面は魔法学に掛かりきりだな。寮にある魔導書の存在もあるしな。

学園の案内も終わり智花にお礼を言い寮へと帰る。途中で冬樹によく似た女の子を発見しその一行を見ていたら物凄い殺気を感じた。ここにいたら殺られると思いさつさと帰路に着く。

「なんか2日目なのにすげー死にかけてるな、俺」

とても疲れる日

夏海が取材させろ。と催促しまくるのでやむなしに了解した。

昼食は学食でこの間のようなことはもう嫌だ。テーブルの下に荷物置こうとしたらメモ帳のようなものを見つけた。

表紙に「遊佐」という名前が書いてあった。寝ぼけた頭で誰だっけ？ってなったけどすぐに思い出した。報道部の部長さんだ。見なかったことにしようかな…

夏海の実材のついでに渡せばいいか。出来れば関わりたくないけどね。

報道部の部室に着く。部屋の中には難しい顔をした黒髪の女性がいる。たぶんこれのことだろうな。ため息をつき覚悟を決め部屋に入る。

「失礼します」

「ん？誰かな君は。申し訳ないのだけど今は取り込…」

「遊佐さんですよ。どうぞ」

向こうの言葉を遮り手帳を渡す。

「…それは僕の手帳じゃないか。どこにあったんだい？」

「学食のテーブルの下で見つけました。」

「学食のテーブルの下…：そうか、昼食を取っているときに忘れたのか…：君は確か転校生だったね。いや、ありがとう。うっかりしていたよ。ちなみに中は見ていないよね。ちよつと見られたらまずいものがね…：乙女の秘密だ。迂闊に知ると命がなくなるものもある。」

「俺はまだ死にたくないのぞ」

「良い心掛けだ。興味を持つことはいいことだが、知らなければいいこともある…：少し陳腐かな？」

少し話して分かった。この人が言ったらシャレにならん。

「特にこの手帳にはね僕の汗と努力の結晶が詰まっているんだ。肌身離さず持ち歩いてるんだけど、忘れたのは初めてだよ。それを今噂の転校生が拾ってくれた。なんだか特別のようなことに思えるね。」

「それはドーモ」

「ああ、すまない。自己紹介がまだだったね。僕は遊佐 鳴子。報道部の部長だ。仲良くしてくれ。取材なんか快く引く受けてくれると嬉しい」

「渡 明斗。夏海の同級生だ。よろしく。」

ひとまず握手を交わしそろそろ退却しようしたが

「とにかく、この手帳は命のように大事なものなんだ。拾ってくれたお礼をしたい。今

から予定はあるかい？この近くに喫茶店がある。ご馳走するよ。」

有無を言わさぬ笑顔で強制連行されました。美人の笑顔に逆らえないこれが男だ。

「遠慮なく食べてくれ。君はそれだけのことをしてくれただ。：君は夏海と同じクラスだったね。彼女とはぜひ仲良くしてやってくれ。僕みたいな偏屈よりも。僕はといえば隙あらば人の秘密を盗み出そうとする悪人だからね。君も油断すれば丸裸だ。例えば：こんな風にこのこついでくると：」

今すぐ回れ右して帰りたい。

「なんてね。さすがに初対面でそこまでしないから安心してくれよ。」

初対面じゃなかったらやるのかよ

おっかなびつくりしながら食事を続けていたら遊佐さんは少し真剣な顔で話を続けてきた。

「それでこれは、今までの話とは全く関係ないんだけど、君のことをききたい。」

嫌なのが顔にまで出たんだろう少し笑いながらもさらに続ける。

「ふふ、そんなに構えないでくれ。記事にするつもりはない。ノートに書くつもりもないよ。変なことはきかない。魔力を与えるという力に目覚めた日のことを知りたいんだ。それだけだよ。深い理由はない。」

その目はとても真摯でだからこそ少しなら話してもいいかな、っておもった。

「といつても何もありませんよ。魔力量が尋常じゃないです。他の魔法使いに魔力を渡せるなんてすごい。覚醒した日にそう言われましたけど当時の俺にはそれがどれだけすごいかなんて分かりませんでしたし」

面面向かって魔力タンクじゃんスゲー、って言われて俺スゲーってなるやつおらんやろ「なるほど。ありがとう。じゃあ最後にひとつだけ。僕は深い理由なしに質問なんてしない。嘘をついて悪かったね。」

「んな!」

俺が反応するより前に遊佐 鳴子はレシートを手にスムーズに会計を済ませせつせと店を出ていった。

「…はあ。なんか疲れた」

…

…

…

昼休みに智花に呼ばれ研究棟へ行き魔力量を量られた。穴戸さん曰く「通常の魔力量の数百倍」という型に無理矢理はめるしかないまでの膨大な魔力量らしい。

そのあととは一緒に来ていた神風につれられ風紀委員のいる訓練所へと連れてこられた。

また金髪か。金髪のツインテールの女の子の元へと召喚された俺。間延びした特徴的な喋り方で風紀委員長の水無月 風子は告げる。

「…穴戸 結希でもわからないってそーとーですよ。」

「え？そんなにすごい人なんですか？」

「彼女は国連の研究所で勤めてましてね。はい、飛び級で。日本の研究所に移った後、魔法使いに覚醒して学園に来たんです。とつてもオーバースペックで、わからないことなんかない…とと思ってましたがそういうったこともあるんですねー。」

「じゃあ俺がここに呼ばれた理由は俺の能力を把握したいからでよろしいか？」

「そうです。アンタさんに前と同じことしてもらおうと思って。上限がわからないのは仕方ない。ですがもう一つの「魔力譲渡」。こっちはウチらが体験できますからね。とゆるいわけでアンタさん方にも来てもらいました。」

そう言いつつ目配せをする。その視線の先には水色の髪の少女といかにも忍者、という格好をしている黄緑の髪の少女がいる。

「これから順番に試してみましょ。ウチは最後でけっこーです。…じゃあ氷川からいきましょーかね。」

風子にそういわれると水色の髪の子が反応した。なるほど彼女が氷川、ね。

「わ、私が最初ですか!？」

「ええ。転校生さん。風紀委員の氷川 紗紀です。どうぞ遠慮なく魔力をあげちゃってください。」

なんか言い方！言い方!!

「あ、はい。じゃあやりますよ?」

魔力を氷川さんに送る。氷川さんは普通に魔法を放ったつもりだろうが放つ瞬間に驚愕していたところから威力が底上げされているのは言うまでもないだろう。

「な、なな、なんですかこれ。魔法の威力が段違いに…!」

底上げどころか段違だったわ。

「はい、次。神風。」

「…はい。」

神風が前に出つつ風子に返事を返す。

「…なるほど。全力で魔法を撃つてもまだ充実している。転校生の魔力を補充しているからですね。」

神風は冷静に分析している。

「はい、次は冬樹。冬樹イヴ」

ナンカキイタコトアルナマエダナー

風子の視線を追った先にはこの間ハンカチを返した少女が。ヤッベーマジデヤッベ。あの時彼女の機嫌が良くて助かった。風紀委員って知ってれば口なんか滑らせません。て。

「…不要です。よくわかりました。彼の力も、問題点も。ですから、これで失礼します。勉強があるので。」

内心冷や汗出してたら辞退してた。

あと忍者の格好した服部さんも辞退。じゃあ残るは…

「では、最後はウチですね。よろしくお願いします。」

さすが委員長だ。威力が違うぜ。

え？今？今は公開処刑されてるよ。

「で、おまけで転校生さん自身に魔法を使ってもらってみたんですが…」

委員長やめてくれ！

「どれだけ工夫しても魔法が使えないと。」

「いやー、これだけ魔力あっても、使えないのはもったいないっすねえ。」

「氷川さんと服部さん止め刺すのやめて。死体蹴りして楽しい？」

「これらの結果からわかることは一つ。アンタさんの役割です。訓練で魔法が扱えるよーになるかもしれませんが、それでも魔力は無尽蔵です。アンタさんの【魔力譲渡】を

求めて色んな人が組みたがるはず。いえ、学園生ならいーんですよ。パーティー組んで、クエストに出る。」

「それ以上は不要ですよ。懸念事項は分かっているつもりですよ。俺の力を悪用しようとするやつは必ず現れるでしょうから。」

「わかつてるんならいいです。アンタさんの外出は穴戸結希及び風紀委員に監視されます。出来るだけ目立たないように注意しますが、ご了承ください。」

「ああ。まあ別に監視が目立ったところで俺も構わないけど」

たぶんどっちも監視の目があれば気づくし。

生徒会や報道部につつけられてるけどこれで風紀委員もだな。転校したてとはいえさすがに昼休みなさすぎたろ。午後の授業は：魔法の模擬戦闘だったか？準備しよ。

HRが終わり今日の授業も滞りなく終わった。智花が部活動を案内してくれるそうだがその前にこの間借りた魔法基礎の書籍を返却しに図書館へ。

萌木は「もう読み終わったんですか？」と驚いていた。ついでにまた魔法関連の本と霧の魔物との戦争についての歴史を調べるためにその辺りの関係書籍も借りた。図書館には冬樹イヴ。彼女も真っ直ぐここに来たんだろう。机に参考書などを開いて勉強している。集中してるし話しかけない方がいいだろう。

図書館を出て智花と一緒に部活動巡りへ。

ここからダイジエスト

天文部：中二病の風槍 ミナ率いる変人集団。双美 心はなんか常に謝ってるし、立華 卯衣は常に眠そうだし。服部さんいるし。がんばれ良心枠の南条 恋。なんかミナになつかれたのでたまに来ると約束しといた。

料理部：里中 花梨が部長。料理部の割りに食い専が半分占めてるんだけど。智花が料理したいと言いつ出したのをみんなで止めた まる

精鋭部隊：いや、部活じゃねーけど。守谷 月詠にめっちゃ絡まれた。隊長が赤毛眼帯のエレンさん。

アイドル：だから部活じゃない。モデルの鳴海 純とアイドルの皇 絢香という二人の魔法使い兼業アイドルがいる。なんか仲良くなった。

歓談部：海老名 あやせさんが中心の部活。あと留学生多い。

茶道部：冷泉 葵、白藤 香ノ葉、越水ソフィアの3人がいる。

散歩部：仲月 さら、瑠璃川 秋穂、冬樹ノエルという一見とっても和やかなメンバーがいる部活で実際和やかな。何がヤバイって保護者組。実質部員のシスコン拗ねさせた瑠璃川 春乃とヤンキー朝比奈という凶悪さよ。正規メンバーにはなつかれたけど外野から背中刺されそうでそれどころじゃねーよ。

報道部：無言のスルー

「部活も大体回り終わったか？」

「そうですね。これでほとんど回り終わったんじゃないですかね。」

良い時間になったので智花と別れ寮へと向かう。

自分の部屋に入り図書館で借りてきた魔法関連の書籍を開く。

「さて、やりますか。」

俺は体質的に魔法を使うことがほとんど出来ない。今はせいぜいライターの火を起こせるようになった程度だ。恐らくは伸び代はほとんどないだろう。

しかし、「魔力譲渡」の能力がある。試していないからまだ分からないが「人」に渡せるのであれば「物」に魔力を送ることも可能なはず。ならば魔力が流れた時点で自動的に魔法が発動するようにあらかじめ物に魔術プロセスの刻印を刻む。

そのために必要なのは魔法を発動させるための基礎と魔導具を作るための知識だ。

1日2日で出来るものでもない。気長にやるとしよう。

夏海ちゃんの突撃取材!特派員は見た!

兎ノ助、あのね【恒例インタビュー】

夏海「夏海ちゃんの突撃インタビュー!今回は不思議生物【兎ノ助】だよ!」

兎ノ助「何回目だよ!お前入学してからずっとやってるだろそれ!」

夏海「仕方ないのよね。説明されてても、新入生は【兎ノ助】にビビるから。ちゃんと紹介しておかないと新種の魔物だって焼かれちゃうよ?」

兎ノ助「や、やめろよ。なんで焼くの限定なんだよ。妙に怖いぞ。てかそれなら、別に何回もインタビューしなくていいじゃねーか。お前もう俺のこと知ってるからそれで書けばいいじゃん」

夏海「いやほら、情報つてのは日々、更新されるでしょう?」

兎ノ助「俺の体は特に更新されてねーよ。あいかわらず機械にキグルミだ」

夏海「ビームとか出るようになった?」

兎ノ助「それ毎回聞くよな。出す必要ねえからつかねーよ」

夏海「えー、最近転校してきた中で兎ノ助の好みの子は何人でしょう」

兎ノ助「ばか!全員だよ全員。俺のストライクゾーンは広いんだぜ」

夏海「それって公言すると失礼だから注意してね。書くけど…全員つてことは男子も？」

兎ノ助「ばっか！俺の評判貶めるようなことゆるな！俺が全員つたら女の子全員だよ！」

夏海「ま、いいや。書きちゃお。他、そろそろ中が見たいって意見が…」

兎ノ助「…そうだな。中が見られるのは真に俺の愛を受けてくれた子だけだな。」

夏海「えー、兎ノ助の自身は永遠の謎、と」

兎ノ助「おい。」 終わり。

…

…

…

朝一でマイクが入り報道部へ呼ばれた俺。そこには遊佐さんとももちゃんが

「君が来てくれるなんて嬉しいね。マイク？何のことだい？今日は夏海に呼ばれて来たって聞いたけど…。夏海も勧誘熱心だね。なんにしろ、ちよつと待っててくれ。」

そういうと遊佐さんはももちゃんに向き直る。

「先に…桃世君。いつもネタの提供、感謝するよ。」

「いえいえ、こつちも商品の宣伝になるんで…あ！先輩！」

ももちゃん今俺に気づいたんか。すまんがもう2分くらい前にはいたぞい。

「購買部の桃世です!またお会いしましたね!」

「おう」

テキトーに返事返してたら遊佐さんが不思議そうな顔をしながらももちゃんに聞く。

「先輩?在学年数は君の方が長いだろ?」

「ええ、そうなんですけど…:なんとなく先輩っぽい感じで。」

可愛いかよ

そんな会話してたらデバイスが振動と共に鳴り始める。遊佐さんももちゃんのも反応してることとはクエストだな。

「…あ。クエストが発令されましたね。」

ももちゃんが呟くようにそう言うのと部室のドアを勢いよく開けて夏海が入ってくる。

「スクープスクープ!大スクープよ!ま、街に魔物が出た、って」

「え!?!」

俺とももちゃんが同じ反応を返す。これぞ一心同体。遊佐さんは冷静そのものだ。

「…夏海。スクープを大声で叫ぶのは報道部員だけのときにしてくれ。」

あ、そこなんだ。

「桃世君と渡君だったからいいが、すっぱ抜かれるぞ。」

あ、すつば抜くというのは出し抜くという意味でokです。今言うことでもないがな
「あ、す、すみません…」

謝る夏海。しかし部長の追撃は止まらない。

「それに魔物の発生は15分前で、確認が取れたのが3分前。みんなのデバイスにクエスト発令が届いたのが今だ。遅いよ。」

いや、最初から知ってたのかよ。盗聴の類いか…

「ぶ、部長知ってたんですか!?じゃあ早く取材…受注しなきゃ…」

「今回は君だけで行ってくるんだ。魔物の取材は任せた。そろそろ僕も卒業だ。実力を見せてもらおう。」

見せてみな、ニンゲンの可能性ってやつをよお…

あ、なんでもないです。そういうえげももちゃんさつきどつかいったままだわ。

「ぶ、部長。わかりましたっ！行ってきますー！」

嵐かよもう出ていったけど準備とか大丈夫か？

「渡君には気づかなかったみたいだ。許してやってくれ。慌てん坊でね…そうだ。ちよつと届け物をしてくれないか？確かカメラのメモリーがいつぱいだったはず。メモリーカードと、バッテリー。で、よければついでに、手伝ってやってくれないか。僕は君に期待しているんだ…頼むよ。マイクはつけてないからさ」

届け物。メモリーカード、バッテリー、魔力タンク。ケー。言つてて悲しいなー

…

「大変! バイト先が…あ、あたしもクエスト請けなくちゃ…!」

「魔物の発生場所はビジネス街だから、ファミレスは大丈夫だよ。君のバイト先は全部心配ない。行きたいというなら止めはしないけど…おススメはしないな。」

「ど、どうしてですか?」

「ヌルヌル気持ち悪いからだよ。魔物はゲル化しているからね。スライム。」

「ス、スライムですか? なんで夏海先輩をそこに…?」

「夏海はスコープのためならどんな危険地域にも出かけると言っている。だから魔物に慣れる必要があるんだ。いつもは僕と一緒に行っていただけ…そろそろ独り立ちしなきゃね。その点今回の魔物はうってつけだ。気持ち悪いだけで、脅威度は低い…もちろん一般人はひとたまりもないけどね。」

「は、はあ。」

「そういうわけで、今回の夏海の訓練には丁度いい相手なのさ。」

「…その魔物って、発生したばかりですよね? ゲル化した魔物も初めて…なんでそんなに詳しいんですか? 危険があんまりないとか…」

「そりゃあ僕がジャーナリストだからだよ。だから…安心して待っているといい。さ

て、僕も行くか。」

「え？い、行くんですか？」

「夏海の実力を見るって言っただろ？行かないや見られないじゃないか。」

…

…

…

そんなこんなで街まで着いたよ。

スライムキモツ！ナニコレ〜？

「やつほー明斗！けっこう元気そうじゃない。学園生活は順調？」

「いやいや、同じクラスだから。」

「そのうち報道部で取材させてくれない？噂の転校生特集やりたいんだ〜」

「こんなところでする話題じゃねーよ。」

「ああ、そうね。先にクエストップ付けてから、ね。被害状況。ニュースで見てるから知ってるかもだけど」

「現地見れば一目瞭然だろ」

そのあとも雑談しながら魔物のいる場所へと向かう。

「うーん…結構大きく支配地域を増やしてわね…ちよつとまずいかも。」

「支配地域を増やすと魔物が強くなる認識で合ってるか?」

「まあ、いろいろな例外はあるけど支配地域の広さイコール強さかな。魔物って時間が経つほど強くなるから、それにつれて支配域も広がるの。普通はさ、街中で実体化した魔物ってすぐ見つかるから対応も早いのよ。だからこんな風に…スライムが街に溢れるってことはないんだけど」

「下水か」

「でしようね。女の子対スライムなんて嫌な予感しかしないけど…あたしは女の子である前に真実の探求者だから!なんにもかも激写しつくしてやるわ!ふふふ、覚悟してなさい…あたしに見つかつたとき、あんたの姿は哀れ全世界に大公開よ…」

「いや、あんな気持ち悪いの好んで見るやつのが知れないけど…夏海がやる気出してくれる分には良いかな。夏海がやられると俺も詰むし」

「あ、噂をすれば影よ。あそこ、ちよつと山みたいなのがデカさのスライム。行くわよ明斗!突撃取材開始!」

「ああ!応援しとくわ!」

俺外付け魔力タンクだしね。仕方ないね。さすがにあのデカさは相手出来ん。小さいのなら倒せるかな?経験値貯めたところでレベルアップ出来ないけど…

今回は一応俺も装備は整えてある。ノコギリ鉋を持ち小型のスライムに斬りかかる。

スライムに刃を押し当てると刃はちよつと固めの液体を通つたような手応えで刃の全体に粘液のような物が付着した。斬りかかったスライムはそのまま何事もなかったかのように動き回っている。

「…殴つた方が早そうだな」

結果：武器が汚れた。以上。泣きそう

殴つたらその分の体積が減つていき連続で殴ることなどでなんとか消滅まで追い込めた。

夏海はというと特盛スライム相手に頑張つてるみたいだ。特盛スライムとの距離が離れたところで魔力補給のために一旦こつちにやつてくる。うわー

「うっわ。べとべと。なにかやるたびに破裂するのやめてほしいわ…」

スライム着いた女の子とかエロくね？つて思うじゃん。普通にキモいしあとで洗うの大変そうだな。くらいにしかならん。

「全身べとべとだな。カメラ大丈夫か？」

「カメラは…だいじよぶだいじよぶ。死守してるから濡れてないよ！」

こいつホントにカメラと持ち手だけ死守してやがる!?驚愕の顔で見てたら何故か夏海が呆れたような顔をしてきた

「…そこはぎ。もつと安心した顔を見せるところじゃないの？スライムと戦いながら写真取るの大変なんだからね。」

それしなきゃもつと早く終わってるんじゃないかね? って言おうと思っただけ彼女は報道部。彼女たちなりの矜持があるのだ。口出しするのは無粋だろう。

「スクープのためなら例え火の中、スライムの中…いやさすがにスライムのなかは…は、入るわよ、行ってやろうじゃないの! 報道部ゴシツプネタ班副班長の實力、見せてやるわ!」

「お、おう」

また特盛スライムの元に行った夏海を眺めながら再び小さいスライムと対峙する。攻撃する際に固さが増すか。ならそれに合わせればカウンターでノコギリ鉋の攻撃も決まるか? 思いついたらやつてみる。最悪痛手を負つても夏海が補給しに帰ってくるまでもてばいいのだ。幸いスライムの足は遅いから逃げのは容易い。

敢えて待ちの姿勢でノコギリ鉋を構えスライムが攻撃してくるのを待つ。ノコギリ鉋もノコギリ鉋ですでに汚れて帰ったら洗浄は確定しているからもういくら汚れようと構わない。スライムが跳ねてきたのを確認し、右手のノコギリ鉋を振るう。上手くいったようだ。スライムは空中で真つ二つになり地面に落ちる。

「ああ、そうなるのか」

小さくなった2つのスライムが襲いかかってきた。

「マジで殴った方が早いな…」

この後めちやくちや殴りまくった。

そんなことしてたら夏海ちゃんが補給しに帰ってきました。

「…改めてみるとひどい状況ね、これ」

「え？なに俺の戦闘の批判？」

「違うわよ。街よ、街。」

アツハイ

「力を持たない人たちは魔物に手も足もでない。…政府を批判する訳じゃないんだけどさあ…。もうちょっとマジメに対処してくれてもいいんじゃない？」

「本気で言ってる訳じゃないだろ。色んな思惑があるとはいえ現政府はよくやってるよ。」

「…でもあたしの最終目標はそれなんだよ。揚げ足取ったり、不平不満を言うだけの報道じゃ、世界は変わらない。真実を追求して解決案を提案する。あたしはそんな記者になりたいの。」

「ま、良いんじゃない？応援するよ」

「そーだよね明斗も協力してくれるよねー！これが終わったら独占密着取材よろしく！そうと決まればちやちやつと終わらせちやおう！」

おい、勝手に決めんな

そんなこんなでスライム対峙も終わった。

「それじゃ一休みしたら帰ろっか。急いで急いで。」

?なんで急かさされてるんだ?

「なんで急がなきゃいけないのさ。どうせ帰ったらやることないんだしもう少しゆっくりしても良いだろ。」

「決まってるじゃない独占密着取材!今夜は帰らせてあげないからね!」

「ふざけんなー!」

フラグの建てすぎは体に良くない

「おはよー。眠そうだね明斗。どうしたの？」

教室に入るなり夏海が俺に声をかけてくる。

「ん。ああ、夏海か。おはよ。ちと寝不足なだけだ気にすんな。」

我ながらなんつーテンションしてるんだか。魔導具を作るための知識詰め込んでたら朝になってました。超NEMUI

「いや、あんたホントに大丈夫？」

「んー、なんとか。授業中に寝ることはない、と思う。」

∴

∴

∴

なんとかHRまでを眠らずに過ごせました。何度か落ちかけたけどな。寮に帰って寝よ。

「じゃ、俺帰って寝るわ。」

「はいはい、気を付けなさいよ。」

「へーい」

夏海にそう告げ廊下にする。やばい眠すぎて歩いてても意識落ちそう。ああ、頭がふわふわするんじやく。

「わわわっ。い、急がないと…。部長に怒られちゃうよ。つ!?ちよつとそこのお兄さん!避けて避けて避けてーっ。ぶつつかるー!!」

あ、これまじいやーっ?でも体動か…

(鳩尾に入る女の子の肘)(自分の体から出たありえない音)(コーナーで差をつける)(回りから聞こえる悲鳴)(一瞬で吹き飛ぶ眠気)(直後に来た激痛)(黙祷)(チーン)

「あいつ、たたたた…もう、ぶつかると言ったのに。だ、大丈夫?変な音したけど…って!うわっ!泡吹いて目回してるっ!?ちよ、ちよつと、しっかり!ねえ、起きて。死んだりしてないよね?えっ、これって大惨事なんじやく…なんか…人も増えてるし…。あつ!部活の時間!あわわ…もう!誰か助けてーっ!」

…
…
…

「…失礼しました。はあ、まさか保健室にお世話になるなんて…お兄さん、体だいじょう

ぶっ。」

一緒に保健室を出たブラウンの髪の子：冬樹ノエルが調子を聞いてくる。

「おう。もう大丈夫だぞ。」

「そつか。それなら良かった。いやー、気絶したときはさすがのあたしでも驚いたよー、あはは…」

大丈夫だ。それに関しては俺も驚いてる。まさかダウンするとは…

「風紀委員にしょっぴかれたくなかったらもうやんなよー」

「うぐっ、わかってるよー…廊下では走らないように気をつける。」

「ん。よろしい」

そう言いながら頭を軽く叩いてやる。今回はノエルだけでなく寝不足で注意散漫だった俺にも過失はある。被害者とはいえ責める気はない。

「それじゃあ、あたしは部活に行くね。…行っても怒られるだけだけど」

「それについては擁護出来んな。がんばれよ」

そう言って別れるがノエルは思い出したように振り返り声をかけてくる。

「あ、お兄さん！あたし校庭にいるからさ。もし、なにかあったら呼んでね。」

「ほいほい。じゃあの」

ノエルと別れ再び帰路に着こうとするがさっきの騒動で鳩尾辺り痛くて眠気飛んだ。

「ん、図書館でなんか借りてくか。まだ借りれる枠あるし」

あと気になることあるし、図書館行けば居るだろ。たぶん…

図書館に入った俺は目当ての人物を探す…までもなく発見したので目立たない程度の声音で話しかける。

「冬樹、お前つて妹いる？」

「いたとして…あなたになんの関係があるの？」

そりゃそーだ。

「いやなに、さつき冬樹とよく似た子に鳩尾タツクル喰らつて気絶してな。散歩部でノエル、つて呼ばれてた子なんだけど…」

「…」

これは当たりっぽいな。ま、あんだけ似てれば当然か。ただ反応からしてなんかあるっぽいぞこれは。面倒そうだし首は突っ込まねえぞ絶対。…たぶん。

お、この魔法学の本面白そう。

…

…

ふう。知識としては入るから良いけど覚えたところで魔法ほぼ使えないんだよな。

悲しみ。

なんだかんだで良い時間だし帰ろ。ついでだし冬樹に一言かけてから帰るか。絶対迷惑顔するな…やめとこ。

図書館を後にして校庭に出る。

「あれ、さっきのお兄さんじゃん。いやっほーいつ！みんなのサポ役。ノエルちゃんだよー！」

「サポ役とは…」

「…うん。サポ役？サポーターだよ。サッカーとかの医療用品じゃないよ？お手伝いとして、みんなから重宝されてるんだから！」

色んな部活はしごしてるんかな。やるなこの娘。

「へへん、すごいでしょ。」

「まあ、やるんじゃない？」

「そだ、お兄さんも帰り？あたしもついさつき、陸上部の助っ人が終わったんだー。もう助っ人なのに怒られるし、こき使われるしでくたくただよ〜。」

ノエルは一人であれこれしやべりつつ思いついたように言い放つ。

「そうだ。お兄さん、帰り付き合ってよ！疲れたときには甘いもの、っていうし。街にね、美味しいクレープ屋さんがあるんだー♪ついでに教えてあげるよ。」

拒否権なんてないしそんなつもりもねえ。

…

クレープ屋についてそれぞれ注文を頼み会計を済ませる。横の少女の目が期待に道溢れていたののでそれに答えて奢らせてもらった。クエストのおかげで金には困っていないので無問題。

「いやいや、申し訳ないね。そんな奢らせるつもりはなかったんですよ。」

「嘘つくな。会計の時めっちゃ期待の目で見てきただろーが。」

「はむはむっ、うーん、美味しい♪」

無視だど！ま、いいや。そんなに気にしてないし。実際美味しいし。情報料というところで納得しよう。

さて、聞くこと聞くか…。

「で？いきなり誘ってきた裏は？本当にクレープ食べたかっただけでもないだろ？」

「あはは…。バレてたか。実はお兄さんに相談したいことがあるんです。」

「少しは面識あったとはいえほぼ初対面の俺に？」

ノエルは先程までのお調子者の雰囲気は鳴りを潜め。真摯に語りかけてくる。

「あたしは、今の現状をどうしても変えたい…：わがままなのはわかっています。…お願いします。あたしに、協力してくれませんか？」

数秒の間無言でにらみ合う。

………はあ。フラグ回収乙。俺。ようこそ面倒事。歓迎しよう。盛大にな!

「わかった。協力するよ。」

途端、ノエルの顔に笑顔が咲く。悪くない。まあ、可愛い女の子の笑顔のために頑張ろうか。

…

…

…

あのとノエルと別れて暇潰しにゲーセンに入ったらモデルの鳴海 純が格ゲーやってた。いきなり対戦吹っ掛けられて10戦やるも勝てたのは1回だけ。

またやろう、と言われて別れた。

結局なんで勝負させられたんだ?すでに自分の体質と冬樹姉妹のせいで俺のキャパシテイは0だよ。面倒事増えなくてくれよ!

次の日の昼休みに適当に歩いてたらまたま皇 絢香さんの素の声聞いちゃって監視とか言われて張り付かれたのも追記しておく。

休日に近くの神社に立ち寄ったら神風がいた。巫女服とか眼福だわ。浄化される。ついでに最近憑いた憑き物も落としてくれ。

それはそうと夏海。落ち着くんだ。記事にしようとしなくてくれ頼むから。

：

：

：

明斗の勉強タイム

クエスト

学園が受理し、授業の一環として行う魔物の討伐のこと。

基本魔物は軍隊が倒すが、街中に出現し、軍隊の到着に時間がかかる時に学園に討伐依頼が来る。

また、受注されるクエストは生徒の力量に合うものとなっており、生徒の強さよりも強いものが割り当てられることはない。

最低2人以上での受注が必要。魔物を倒せると自信が持てる人数が推奨。

霧の魔物

約300年前に突如出現し人々に襲い掛かる怪物。体が霧でできているので、生物であつて生物ではない。ある場所の霧が一定以上の濃度になると実態を持ち、人を襲う。姿・形は様々。

時間が経つに連れて支配地域が大きくなり強くなるとされる。

タイコンデロガ

100年ほど前に出現した霧の魔物。ただし個体名ではなく霧の魔物の階級であり、一定以上の強さを超えるとこれに分類される。

例えば一定の強さを超えたスライムはタイコンデロガ級のスライム、という風になる。

これが出現するときは大きな霧の塊が現れる。一般的な強さの魔物とは段違いに強く出現した当初は制度開始直後とはいえアメリカの軍に匹敵するほどの勢力であった魔法使い集団であるヒーローが全滅しかけたほどである。

名前は最初に出現したアメリカの地名である「Ticonderoga」が由来となっている。

ムサシ

霧の魔物が現れた当初に一度だけ出現が確認されている超大型の霧の魔物。

江戸城ほどの大きさらしい。

名前の由来は冬至の日本が武蔵国と呼ばれていたためと思われる。

出現情報が一度しかないため詳細不明。

魔法について

魔法は術者の魔素を命令式によって変換することで発動する。命令式さえ見つければ理論上魔法でどんな事でも可能となる。実際は、発動のための魔素が膨大であり、命令式自体が見つから無かつたりするため、実現しない。

また同じ魔法でも個人によって命令式は全く同じにはならないため、得手不得手が存在する。

つまり俺が魔法が使えないのは命令式が他人とは全く違うため？↑現段階では判別不能なため保留。

荷物に混じっていた魔導書について

血晶石

魔導具「血晶石の工房道具」を用いることで武器に魔法の特性を付与する。発動の際は武器に魔力を流し込まなければならぬ。物理的な強化だけでなく炎や雷を宿すことも可能。

製作には制作する者の血液が必要。効果と魔法強化の効率に製作者の血質の高さによる。

水銀弾

水銀に製作者の血液を混ぜ弾丸としたもの。通常の弾丸では魔物に対する効果が小さいため狩人が持つ銃器はこれを用いる。

製作に使用する魔導具の刻印などは準備済み。今後休憩時間など空いた時間を使い製作するものとする。

追記 生徒会や風紀委員にしよつぴかれないように魔法使用可能場所で行うものとする。

怜、推して参る

朝、か。ベッドから降り身支度を手早くこなし学園へ向かう準備をする。今日からはノコギリ鉋とアンテイク銃：獣狩りの散弾銃も持っていく。

学園生はクエストがいつでも受注可能なように武器が必要な者は申請することでその武器を携帯出来るようになる。水銀弾を作れるようになったことで使用可能になった散弾銃をホルスターに格納し腰につける。ノコギリ鉋も折り畳んだ状態で刃の部分に覆いをかけ大きめの鞆に入れて持っていく。

ま、一応散弾銃は通常弾薬も使用できるんだけど年代が年代のためグリモアの購買部といえども確保に時間がかかるらしい。しかも確保したところで水銀弾ほどの効果はないらしい。とはいっても製作に自身の血液が必要であり大量生産に向いていない水銀弾の弾薬節約をするためにも通常弾薬の確保は必要だ。

散弾銃だし至近距離からの攻撃ならそれなりに効くだろう。たぶんノコギリ鉋で斬る方が威力高いだろうけど…それ言ったら俺が戦うより同行者に戦ってもらった方が効率的だからな…。

朝ごはんは昨日購買部で買ったパンをバターを塗りトーストしたもので済ませた。

料理は簡単なものなら出来るが朝は眠くてやる気もおきない。でも自分で作れば智花のお弁当断る理由になるよな…。いや、自分で作るの大変だろう系ムーブがある以上下手なことはしない方がいい。いまだにこの間食べたお弁当はトラウマだ。しかし明確な回避手段がないため神頼みするほかないのも事実だ。

はあ、また神風のとこの神社にお邪魔しようかな。

そんなこと考えながら登校してたら智花と会ったので一緒に登校する。ついでにこの間の街でのクエストについて聞いておくのも良いかもしれない。

「…街であんなに魔物が暴れまわるなんて、ほとんどないことなんです。魔物は発生直後はとても弱く、街には人の目がたくさんあります。なので魔物は街など人がいるところでは成長しにくいんですね。歴史上では何度かあったことなので、運が悪かったんですね…」

「なるほど」

智花と話していたらデバイスに着信が来た。智花も同様のようだ。つまりはクエスト、か。

「あ、クエストが発生しましたね…魔物が発生すること自体は珍しくありません。たいていは山や森の中、洞窟や…特級危険区域と呼ばれる場所なんですが」

「なんだその聞くからにやばそうなの…って神風」

「あ、怜ちゃん、こんにちは…」

「二人とも、すまない。急いでいるんだ。」

神風はそう言うのと俺たちをあとにした。

「…？ 怜ちゃんがあんなに慌てるなんて…！ く、クエストの現場、神風神社です。怜ちゃんの実家なんですよ！ ま、待って、怜ちゃん！ わたしも…」

「智花…神風もう行ったから…。追いかけるぞ」

…

…

「神風はクエストですか。まあ、家が襲撃されているなら仕方ありませんねえ。」

「委員長、なぜ隠せていたのですか？」

風紀委員としての活動をしていた氷川は一人の少女…水無月 風子へと質問を投げかける。

「神風に会っちゃったら、風紀委員のよしみでついていかなきゃいけねーでしょ。」

「……？」

理解が及ばないのだろう。氷川は首を傾げる。

「いや、ウチとしても手伝ってやりたいのはやまやまですがね…これから調べなきゃならんねーことがあるんで。」

「調べる、とは？」

「街から離れてるとはいえ神風神社は人が大勢訪れます。通常ありえない場所でクエストが発生しました。2連続ですよ。その原因が「わかっているかどうか」を、とりあえず宍戸 結希に尋ねます。」

「はあ、しかしクエストは風紀委員の管轄ではないのでは…」

「いいですか。ウチは「ありえない場所で魔物が発生した」と言いました。学園内で魔物が発生した場合、まず対処するのはウチらなんです」

「……あ……」

「今までなら「そんなのありえない」ですがね。備えましょーよ。」

…

…

クエストの準備を終えて神風神社のある森へと入る。今回は神風はもちろん、智花や俺の他にも学園生が参加し総勢6人となっている。

討ち漏らしを出さないために3つの班に分かれて行動している。この中で一番強いのは神風のため俺は神風と組んで行動にあたっている。それにしてもすごい。さつき

から一人で木の幹にムンクの「叫び」のような顔を持つ魔物を一刀で斬り伏せている。魔法だけではない本人の剣の腕も相当なものだろう。

「…随分倒したが、魔力は大丈夫か？」

「特に問題はないぞ」

今回の相手は人面樹という魔物らしい。神風曰く他の木に力を与えて分身し、人を襲うそうだ。

さて、そろそろ魔力タンクだけでなく自分でも動こうか。ノコギリ鉋と獣狩りの散弾銃を構え人面樹に挑む。ノコギリ鉋の変形機構を発動させ長柄の鉋にし遠心力をかけた一撃を見舞う。神風のようにはいかないか…。しかし一応怯みはしたようだ。ならば、と左手に持つ散弾銃を口のような場所に突っ込み引き金を引く。重々しい発砲音を轟かせ散弾銃から水銀弾が発射される。

さすがの魔物もこれには耐えきれず文字通り木っ端微塵となり体を霧に変え消滅する。

「至近距離なら威力は上々、だな。」

近くにいる小型の個体に向かって散弾銃を放つがそこまで離れてもいないの目に見えて威力が下がっているのがわかる。それでも一応衝撃は大したもので相手の動きを拘束出来ている。すかさず距離を詰め鉋で叩き斬る。

「射程はな…アンティーク物だし仕方ないと割り切るしかないかな。一応衝撃で相手止めれるし…」

ダメージ自体はほぼなさそうだったがな！

「渡、念のため確認するが、魔力は枯渇していないな？」

「え？あ、すまん。戦闘に集中してて減ってることにも気づかなかった…」

「なるほど。頼もしさの理由がわかる。私ももう気にしないことにしよう危なくなったら言ってくれ。」

素晴らしいながら神風も俺も周囲の警戒を怠らない。

神風がまた大きい個体を見つけたようだ。

「…ふむ。二体目だな。少し奇妙だ。」

「なにがだ？」

「いや、この間隔で配置されているなら、本体はすぐ近くのはずだが…神社まではまだ距離がある。離れたところに分身を作るには力が必要だ。人面樹が誕生したと推測されるのが二日前。そこまでの力はまだないはずだ。…とにかく斬ろう。時間を無駄には出来ない。」

大きな個体へと飛び出した神風が続くように取り巻きへと攻撃を仕掛ける。今回はやってみたくともある。折り畳んだ状態でノコギリ状の刃による連撃を叩き込み

体を撃破。さらに近くにいたもう1体に対して変形機構を作動させながら思い切り振り抜く。振り抜き自体の遠心力に変形時の遠心力も加わることで威力を増したことで人面樹は半ばから断たれ消滅した。最後の1体は枝で攻撃してきたところを鉋の攻撃で反らし近づいたところで散弾銃を至近距離で発射し仕留めた。

こつちが小型を撃破している間に神凧も2体目の大型個体を撃破したようだ。どこか被弾した様子もない。散弾銃に弾を込めながら先に進む。戦闘中にもスムーズに装填できるように練習だな、これも。

ようやく境内へとたどり着いた。本体も近いだろう。

「…ふうっ。」

「神凧？ 疲れてるなら少し休むか？」

「大丈夫だ。休憩が必要なほど疲れてはいない。どちらかというところを恐れているんだ。家族の避難は万全だという連絡だが…それが間違いで、もしかしたら命を落としている者がいるかもしれない、と。人面樹がすでに太刀打ちできないほど成長しているのではないかな。クエストの時はいつもこんな心境だ。まだまだ精進が足りない証拠だよ。」

弱音を吐露するとは、いや、神凧も人間だ。家族のいるところが襲われて心配にならないようなやつなんていないだろう。

「…とはいえ、私は襲われているかもしれない家族を助けに来たんだ。ここまで来て立

ち止まっている理屈はないな。すまないがあと一息だ。サポートを頼む。終わったら茶でも飲むか。今回の礼にねぎらってやろう。お前には随分と助けられたからな。当然のことだ。」

「俺たちの勝ち揺るぎないけど、一応まだ終わってないからな。」

「…ふふ。そうだな。まだ早いかな。おかげで落ち着けた。ありがとう。では行こうか。すぐそこだ。」

「りよーかい。」

最後の人面樹は他のよりさらに大きいな。ただ、取り巻きも居ないみたいだ。

神風と俺は二人同時に飛び出し人面樹の攻撃を左右に分かれて回避する。神風は枝の攻撃を刀で斬り落として相手の攻撃手段を削っていく。俺はそんな器用なことができないので大振りな攻撃を誘いそれを避けてから腕のような枝にへと散弾銃を押し当て発砲し砕き割る。これで大きな枝からの攻撃は来ないな。一旦距離を取りながら散弾銃の空薬莖をリリースし新たな弾を装填しておく。

少し手間取ったか。神風に攻撃が集中してきてるな。

しかし、相手の裏を取ることができたのでそのままノコギリによる連撃を繰り返す。袈裟斬りからの変形機構を使った振り払い。さすがにこちらを向いてきたので散弾銃を構えながら

「神風！動きを止める。決めろ！」

神風にそう言いながら散弾銃を放つ。空中で無数に別れた弾丸は人面樹の幹にへと殺到し高い衝撃をもって動きを阻害する。

その間に近づいた神風は天の構えからの切り落としが人面樹に決まり消滅した。

そのあと境内などを見回り分身がいなかを確認していく。

「…うむ。どうやら分身はこれ以上いないようだ。分身と本体の距離が離れていたのが気になったが…杞憂だったようだな。いちおう報告はしておこう。もしかしたら見落としなどがあるかもしれん。よし。ではこのクエストは終了だ。学園に戻るぞ。」

「つつかれたー。」

雑談などを交えつつ神風と学園に戻る。もちろんまだ報告などやることは残っている。

∴

∴

∴

生徒会室で今回のクエストの報告を終えると神風はクエスト後であるにも関わらず授業へ戻ってしまった。

俺はというと夏海の時きも一応は戦ったとはいえ、武器や銃器を本格的に運用したのは今回が初めてだったため身体に疲れが溜まっている。素直に部屋に戻って休息をやらせてもらおう。

：

シャワーなどを済ませてから部屋に戻り、着替えるのもだるかったのでそのままベッドに入り目を瞑る。意識が薄れて行き：

次に目を覚ませた時俺は地面に寝ていた。ベッドに落ちたというわけでもなくまずここは学園ではないだろう。俺の格好もいつの間に変化したのか制服から狩装束になっている。

回りを確認する。庭、なのだろう。俺が倒れていたところを含めかなりの場所に同じ花が咲いている。所々に墓のような物があるのが気になる。今いる場所は少し坂になっていてその先には一軒家がある。

確かに寝たとは思うが体感的に1時間かそこらのはずだ。昼前には帰っているからまだ昼間のはずだ。それにも関わらず上空には綺麗な満月が浮かんでおり灯りもないのにこの場所全体を明るく照らしてくれている。

警戒しながら家の扉の前に立つ。すでに扉は開いていたので中を覗き見る。一人の背の高い女性が立っていた。彼女はこちらに気づいたのだろう。近づいてくる。

「はじめまして狩人様。私は人形。ここ、狩人の夢にて貴方に仕えるためにいます。」
「は、はあ？」

話を聞くに彼女は狩人となった俺に仕える存在らしい。詳しい話は「わからない」の一点張りで結局薄気味悪さが募っただけだ。しかし、実家の荷物に混じっていたノコギリ鉋や散弾銃、魔導書はどうやらここから送られてきたということがわかった。

狩人の夢の使者と呼ばれるどう見ても魔物っぽかったので攻撃しかけたがノコギリ鉋を振り上げた直後に水盆の中に隠れてしまった。直後に人形にそれは魔物でないと諭された。

使者たちは俺に一冊の本と2つの木箱を渡してくる。それを受け取り中を確認する。まず本の方にはヤスリというエンCHANTアイテムの作り方が書いてあった。また、ノコギリ鉋や散弾銃の整備方法も事細かに書いてある。大部分が空白のページなのが気になるが……

そして木箱だが開けると西洋の装飾を施された剣が一本あった。なんというのだろう両刃剣と言うべきか？ 鞘に入っている方とは逆側にも小太刀ほどの長さの刃がついている。柄を回すことで分離も出来るようだ。鞘から刀身を抜くとその装飾とは裏腹に先ほども見た片刃の……刀となっていた。どちらの刀身にも魔方阵のようなものが彫つてあるのが見てとれる。

もう片方の木箱も開けてみる。中には二連装になった銃身の機械的なデザインが見てとれる銃があった。2つの武器を見ていると先ほどの魔導書が仄かに光る。何事かと本を捲ってみると空白だったページに新たに「落葉」と「教会の連装銃」の整備方法などが記載されていた。どうやら武器が増える度にここのページが埋まっていくようだ。

…なんだ？急に眠気が。

急速に意識が落ちる。次に目を覚ますとベッドの上にいる。ベッドの足元には狩人の夢でもらった魔導書と落葉と連装銃が置いてあった。

「夢じゃない…か。俺は一体？」

幕間：備え

「悪いな、呼び寄せて」

「いいえ」

重々しい口調で入室者へと声をかけた生徒会長：武田 虎千代に対し、早く本題に入ろうと口を開いた天才：穴戸 結希はすでに今回の異常に目処がたっているのだろう。

「まず前提を確認するわ。街に発生した魔物は通常、弱いうちに駆除される。」

それに対して会長の横に佇んでいた黒いポニーテールの少女：副会長、水瀬 薫子は質問を投げ掛ける。

「それが今回は、2回続けて逃れた魔物がいた：軍や執行部の怠慢でないとしたら、理由は何が考えられますか？」

少し溜めたあと穴戸 結希は答える。

「第7次侵攻」

部屋に重々しい空気が漂う。それに負けぬように口を開いた虎千代はさらに質問を投げ掛ける。

「可能性はどのくらいだ？」

「今はまだわからないわ。ただこれが【前触れ】だとしたら…これから、魔物が発生する頻度が格段に高くなるわ。それに、より強力なものになるはずだわ。」

それを聞いた虎千代は現時点で打てる最善手を練り始める。

「…薫子、精鋭部隊に伝えろ。」

「わかりました。」

もちろんその中には非常時の際、学園の主力部隊となる精鋭部隊へと情報を共有すること含まれる。

薫子はそれを聞くなりすぐに動き始めた。

「侵攻だったら大事件だ。念のため準備をするぞ。すぐにできることは訓練メニューの強化と…他になにかあるか…」

その後も可能性で留まっている案件に対しての対策を練り続け、次々と指示をしていく。

「いちおう、カリキュラムを警戒用に変えておこう。」

副会長もそれに続くようにやるべきことを挙げていく。

「短期間での学園全体での戦力上昇をはかりましょう。」

「万が一のための金もいる。聖奈。」

会長に呼ばれすぐに動き始める会計…結城 聖奈。

「はい。執行部へ支給金増額の通知をしておきます。」

しかし穴戸 結希はそれに対して口をはさむ。

「…学園執行部は特にアクションをしないとと思うわ。国軍の装備も更新されているから、学園の出番はないという見解よ。」

それに対し虎千代はため息を吐きつつも対策を練っていく。

「それが本当ならケチにもほどがあるぞ…通知はしておく。その上でこちらはこちらで金を集めよう。クエストの受け入れ数を増やす。」

「魔物討伐数が増えれば、政府からの報奨金も増えますね。」

「…わたしもできるだけ協力するわ。といっても些細なことだけど。」

「十分だ。北海道のようなことが二度とないようにするぞ。」

第6次侵攻において魔物に占拠された北海道を引き合いにだし二の舞を踏まぬようにと士気を高める。

「…まだ第7次侵攻だと決まっていなわ。詳しくわかったら連絡するわね。」

穴戸 結希は自らのできることをするために部屋を出て研究室に戻った。

…

…
狩人の魔導書

ノコギリ鉋

狩人が獣狩りに用いる、工房の「仕掛け武器」の1つ。

変形前は人ならぬ獣の皮肉を裂くノコギリとして、変形後は遠心力を生かした長柄の鉋として、それぞれ機能する。

刃を並べ血を削るノコギリは、特に獣狩りを象徴する武器であり酷い獣化者にこそ有効であるとされた。

…

…

落葉

時計塔の女狩人、マリアの狩武器。

カインハーストの「千景」と同邦となる仕込み刀であるが血の力ではなく、高い技量をこそ要求する名刀である。

マリアもまた、「落葉」のそうした性質を好み

女王の傍系でありながら、血刀を厭ったという

だが彼女は、ある時、愛する「落葉」を捨てた

暗い井戸に、ただ心弱きが故に

：

：

獣狩りの散弾銃

狩人が獣狩りに用いる、工房製の獣

獣狩りの銃は特別製で、水銀に自らの血を混ぜ

これを弾丸とすることで、獣への威力を確保している。

また、衝撃により獣のはやい動きに対処する部分も大きく、特に散弾を用いるこの銃は、当てやすく効果が高い。

：

：

教会の連装銃

特に医療教会の狩人が用いる連装銃。

ほぼ金属製で、複雑な機構を有するこの銃は

一射撃で2発を発射し、水銀弾の消費も早い

工房の銃よりも慎重な、切り札的運用が必要になるだろう。

訓練に明けくれて

神風神社でのクエストの一件のあと学校の授業はここに来て日の浅い俺にもわかるくらい実戦よりのものとなっていた。

通常授業はそうでもないが魔物の生態を学ぶ授業や訓練授業は先日までとガラリと変わっているのだ。異常事態が近づいてきているのは雰囲気で察せるだろう。

で、今は何をしているかというと

「智花は相手を牽制、相手が複数人でラインを引いてきたら無理せず下がって。

夏海と神風は相手が智花と複数人で撃ち合う場合は弾幕の薄いところから突撃してそのまま近距離戦闘に持ち込む感じで。相手が撃ち合いとかほぼなしに突撃して来るときは俺と智花守りながら迎撃戦つてところかな。」

生徒間で行われる対抗戦のブリーフィング中です。

今回は智花、夏海、神風、俺の4人チーム。相手も4人だから4 on 4での戦闘だ。俺なんぞただの囃兼魔力タンクだけど：一応最近是自衛力上がったし（震え）

それでもチームには俺がいることでチームの全体的な火力は相手側より大きくなる。つまり俺は是が非でも逃げ切らなければならない。

ついでに言うとは一番後ろに居ることから戦場全体の把握がしやすいため戦術的なものではあるが指揮を取るのも俺となる。

あとは智花だ。神風は自身の肉体と剣に強化魔法を施しての近距離戦がメインだし夏海もどちらかという強化魔法の方が得意らしい。つまり今のチームで遠距離戦をこなせるのが智花一人なのだ。俺がいるおかげか簡単な魔法でもそれなり以上の火力がでるため智花一人でも撃ち合うことは可能なのが救いだ。俺も連装銃に模擬弾装填すればゴミ程度の威力だけど射撃戦にも出来るしね（白目）

それに相手に幻惑魔法の使い手が居たとしても狙ってくるのはほぼ俺だ。相手の狙いがわかっているならそれを逆手に取ることも難しくはない、とは神風の言だ。

ブリーフィングを終えた俺たちは対抗戦のステージへと足を運び訓練開始の合図を待つ。

∴
∴
∴

指定された対抗戦をすべて終えた俺たちはブリーフィングを行った部屋に入りデブリーフィングを開始する。

「いや、びっくりするくらい型にハマったな。」

5戦中5勝しました。全勝です。

「というか神風さん強すぎなんだよな……クエストの時も思ったけど、風紀委員は伊達じゃない、か。」

「明斗さんもすごかったですよ。的確に指示をくれましたし。」

「前に精鋭部隊の練習に混じったときにエレンさんとメアリーさんにしごかれたから多少は出来るようになったよ」

「あれは地獄だった。指示が曖昧だったりミスだったりすると回避訓練という名の射的か自衛力向上という名目の近接勢との格闘訓練のどちらかだ。嫌でも出来るようになるわ。俺の今の実力と性質からして後ろでただ魔力配るだけじゃお荷物と変わらんからな。良い訓練ではあったが……」

「さて、と。真面目にデブリーフィングしようか。」

∴

∴

∴

「授業や訓練も一段落し昼休みとなった。昼飯を学食で済ませ図書館へと向かう。が
「ふはは！ 貴様が転校生だな！ 探したぞ！」

「我が名は生天目（なばため）つかさ！ 戦いを求め、戦いに生きる者だ。」

あ、絶対ヤバい人だ。本能が警鐘を鳴らしている今すぐ逃げろと轟き叫ぶ。

「貴様の噂は常々聞いておる！ 鬼神のごとき強さというではないか！」

任務達成率、人々からの信頼。なかなかの男とみた。」

おい誰だそんなガセ流したのは

「ここは私が一戦交え、貴様の力を見極めてやろうではないか！」

いざ尋常に勝負っ！

…どうした、かかってこい！ 来ないならこちらから…おおっ!?」

逃げる。全速力だ。捕まったらボコられる間違いない。というか図書館に用があっただけだから武器とかは教室置いてあるんだよ！

「逃げるな、コラあ！ 臆病者めがあっ！」

ま、待てい！ 背を向けるなど男の風上にもおけぬぞ！

なんたる、なんたる軟弱！ なぜ逃げるのだ！ 勝負せいっ！

闘わずして平穩無事に過ごそうなどと甘えた考えは通じないぞ！」

やかましいわ！ なばため、生天目！ 思い出したわ。この学園で会長と並ぶくらい強いって噂のバーサーカーじゃねえか！ やってられるかクソッ！

「…む？ …ほう、なかなか足が速いではないか！」

くく。くはははは！ どうしても貴様と戦いたくなつたぞ！

速いのは逃げ足だけではないところを見せてもらおう！

ええーい、待たんか！ 地獄の底までも追いかけてくれるわ！」

嫌だ！まだ死にたくない！

：

：

やらかした

適当に走つてたから行き止まりですよ。詰んだな（諦め）

「ふっふ。ようやく追いつめたぞ。鬼ごっこは終わりだな。

ここまで手こずらされたのは、お前が初めてだぞ…

さあ、立ち会え！ なおも逃げるならば貴様の命をもらう！

ええい！ 口答えはいらん！ さっさと構えるのだ！

ゴングは次に木の葉が落ちたとき！ 決着はいずれかが倒れたとき！

血沸き肉躍る戦いの陶酔に身を委ねようぞ！」

覚悟を決める。木の葉が落ちるその時を神経を研ぎ澄ませる。

「…そう、それで良い。では行くぞ！ 魂と魂のぶつけ合いだ！」

キーンコーンカーンコーン

「な、なんだとっ!？」

じ、時間切れ…!? なんとるっ! なんとる!

ぐぬぬ…チャイムが鳴っては仕方ない。この勝負はお預けだ。」

ええ…

「運が良かったな、転校生。次は首を洗って待っているよ。」

…まさか貴様…その顔は…端からこれを狙っていたというのか?

だとしたら、こいつはとんだ策士だな。面白い! 実に面白いぞ!

今度は時間無制限の放課後にでもくるとするか…いいか、次こそは逃がさん!

ふふふ…ふははははは! はーっはっはっはっは!」

とんでもない人に絡まれたな。午後からも訓練なのに全然休んでないや。というか

どこどこ? 走れば訓練間に合うかな?

…

…

…

一日の授業と訓練も終わり部屋に帰って来た俺はさっさと風呂を済ませて寝たいという欲求を抑えつつ狩人の魔導書を開く。

戦闘時をイメージし制服を狩装束へと変化させる。

「マントの裏地にナイフとか仕込めそうなんだよな。あとはコートの中か?」

確かスロージングナイフの制作方が載ってたはず…あった。

うーん、ナイフの構造がなかなか複雑だな。ノコギリ状の刃になってるのか。でもこれ事態に施す物理強化魔法の刻印は割と簡単なものだな。魔力を流せば発動して術者の手元から離れる場合でも5秒くらいは効果が持つらしいし。

これも購買部で使いやすそうなの買って刻印彫ればいいか。

と、本が唐突に光り始める…

「は？」

…

…

またここか…光に飲まれて来た先は「狩人の夢」である。人形もこちらに気づいたのか話しかけてくる。

「狩人様、またお会いしましたね」

「今度はなんで呼ばれたんですかね俺は」

「?ここに用があつたのではないのですか?」

ん?何を言っているんだ。呼ばれたのは俺の方だよな?

近くの水盆から従者が現れる。どうしたのかと近づくと先ほど魔導書で見たスロージングナイフを持っていた。

「なるほど。人形さん一つ聞いていいか？」

「はい、なんでしよう。狩人様」

「ここで貰ったものは向こうの世界にも持っていける。この認識は合ってるか？」

「はい。ここで貰ったものはすべて別の世界に持っていくことが出来ます。」

なるほど、ね。便利なところだな。購買部に行く必要はなくなつたな。ついでに弾丸製作用の水銀も貰つていくとしよう。

「ちなみに向こうに帰るときってどうすればいいんだ？」

「ではこれを」

そう言われて渡されたのは何かのマーク。これは…吊るされた男か？と考えていたら唐突な眠気に襲われ…気づけば元の部屋にいた。手元には狩人の夢で貰ったスロウイングナイフ10本と弾丸製作用の水銀の入った瓶。

「いや、ホントに便利だなおい」

スロウイングナイフには魔術刻印を彫って魔力を流し込みちゃんと発動するかを確認。ホントはダメだけどいちいち訓練所に行つて確認するのもめんどくさいから妥協。

採血器具を使って血を採取しておく。弾丸製作はさすがに許可取つてやらないと弾数管理されてつから勝手に増えると処罰されちゃうからね。

「うーん。肉食いに行つてから寝よ」

夜の外出が見つかるまであと30秒。

もも、出動します！

「なんか！無性に！パンが！食いたい!!」

「はいはい、パンなら購買部に……つてもういないし」

というところで朝からなぜか無性にパンが食べたくなった俺は突然カミングアウトされた上に無視された夏海をあとに購買部に足を運んだ。朝のHR始まる前に戻らないといけないしね。

「いらつしやいませ、先輩！」

「朝から働いてるんだなもちゃん。はよ切り上げて学業戻るんだぞい」

「そういえば、先輩のお噂、聞いてますよ。転校早々、クエストを3回もこなしたって。

最初はみんな、魔物と戦うのを怖がるんですよ……大けがの危険があるので。

だから先輩、とつても勇気があると思うんです！」

「ありがと、というか年は上だけど俺の方が後から入ってるしなんで【先輩】呼びなの？」

「あ、【先輩】って、この学園ではよくある呼び方なんですよ。

転校してくる年齢がみんなバラバラなんで、先輩後輩の区別が難しいんです。

だから年上だってわかってる人のことを先輩って呼ぶんですよ。

だから先輩も、先輩なんです…あ、すみません、なにかお探しですか？」
せや、パン買わなきや

と思つてたらもちやんのデバイスに着信が入ったようだ。

「あ、バイト先からですね。すいません、ちよつと失礼します…

もしもし…えっ？て、店長？ 店長!？」

………嘘。…魔物が…また、街に…

せ、先輩、どうしましょう…あ、あたしのバイト先が…すいません！ あたし、行かないとー！」

急いでクエストの受注へ向かおうとしたもちやんは思い出したように俺の方を向き直る。

「…あの…こんなことお願いできる立場ではないんですけど…も、もしよかったら、先輩のお力をお借りしたいんですが…！」

「バイト先が心配なんですよ？なら、早く行こうか」

「可愛い後輩のお願いを断る先輩なんて居るわけねーよなあ？」

…

…

…

なんとというか酷い状況だな。

今回の魔物はビツクマウス。その名の通りネズミの巨大化してキモくしたような魔物だ。

建物の至るところに大きな齧り跡がついている。間違いない魔物がしたものだろう。

「うう…ネズミかあ。あたし、苦手なんですよね、ネズミ。」

あたしがつていうより、飲食で働いてる人はみんな苦手だと思います…」

やっぱり大変なんだな飲食業…

「でも大きいから、急に死角なら出てくるということはないので…そういう意味での心配はありませんね。そういう意味での心配はありませんね。そういう意味での心配はありませぬ。そういう意味での心配はありませぬ…心臓に悪いんですよ。」

「今回の魔物の出現位置はバイト先に近いんだっけ？」

「あ、はい。勤務先はファミレスです。ちよつと大通りから外れたところの。」

チエーン店なので知ってると思いますよ。意外とオイシイあのお店、です。

店長さんたち、どうでしょうか。避難できたでしょうか…

ネズミって動きが速いんで、今回は犠牲者も出てると聞きました。」

視界の端で何かが動く。

「大丈夫かな…ひやつ？あ、な、なんでいきなり手を…」

「ん、敵」

ももちゃんの手を引き大ネズミの攻撃を避け、ノコギリ鉋で斬りつける。しかし浅かったようで相手は今も動き回っている。

「ああっ！ お、大ネズミですね！ すいません、気づきませんでした。 行きます！」
「動きが速いな。ももちゃんも魔法を放っているが中々当たる気配はない。」

「ももちゃん。俺が相手の動き止めるからトドメよろしく」

自分で追撃しても良いけどさつきみたいに浅かったりするとまた逃げられるかもしれない。なら確実に倒せるように動く。

スローイングナイフは使わない、というか使えない。投げる練習したけど難しかったよあれ。

ということとで左手で散弾銃を腰のホルスターから抜き発射。大ネズミの動きを止める。すかさず放たれた魔法をモロに受け大ネズミは消滅した。

散弾銃のリロードを終え再度動き出す。さつきのこともあるし慎重に行っていたが「うー…先輩！ 歩くの遅いですよう！」

早く街からモンスターを追い出しましょうよ！

早くしないと、あたしがアルバイトできないんです！

この街には、あたしがバイトしてるコンビニもファミレスもあるんですから！

「この街が機能しないのは、あたしにとつて死活問題なんです!」

「す、すまん。ちよつと慎重過ぎたかも…」

「…つて、なんか今の自己中みたいな言い方になっちゃったっ!」

「あうあう! ごめんなさい違うんです! イライラしてただけなんですーっ!」

「気にしてないから…:そういうえば、ファミレスにコンビニつてももちやんいくつバイト掛け持ちしてるの?」

「へ? あたしがしてるバイトの数ですか?」

「どしたんですか急に? んーと、そですねー。」

「今はコンビニとファミレス、新聞配達にあとゲームショップですね。」

「それらを適当にローテーションしてます。」

「1箇所だけだと飽きてしまうのでー。いろんな経験できて面白いですよ?」

「それプラス購買部でしょ。よくやるよ」

「あはは! 心配してくれるんですか? でも大丈夫です!」

「身体には気をつけてますし、アルバイト、楽しいですしね♪」

「…なんでバイトをしようと思つたの? お金に困ってるわけじゃないよな。それならクエストを多く受注する方が効率がいいし」

「…確かに、学園に通っている限り、お金には困りません。」

授業料も寮費も免除。クエストをこなせば報酬も出ますからね。

バイトが禁止されているわけではないんですけど、する人は少ないです。

あたしがアルバイトをするのはお金のためじゃないんです。

理解できないって、よく言われますけどね。

でも誰にだって、他人にはわからない好みやこだわりってあるじゃないですか。

あたしの場合それがバイトってだけだと思ってるんです。

言いかたは変ですけど、あたしの欲を満たすためにバイトをしてるんですよ。

お金ではなく、いろんな人と接して笑顔が見たいって理由は変でしょうか？」

優しい娘っていうのもあるんだろうけど…魔法使いは人の役に立たねば、か…魔法使

い自体がある種の洗脳、というより刷り込みをされている感は否めないな。特別な力に

目覚めた人間というのは見方を変えれば化物だ。ならば俺たちは対外イメージを良く

するべきだし仕方ないと言えばないんだろうけど…

「もう、バイト先のすぐ近くです。ここの角を曲がったら見えます。

大ネズミも確認されているのはあと二匹。今までと同じ強さなら…

大丈夫です。みんなちゃんと避難できているみたいだし。

ちよつと建物に被害は出ちゃってますけど、ものは直せますからね。

あたしはこの街の人たちが好きです。

だから、あたしの力が役に立つなら惜しまないです。

みんなの笑顔が見れば、それで幸せですから。」

無駄なことを考えるのはやめよう。彼女は自分の意志で他人のためにがんばろうとしている。ならば応援こそすれ、俺の勝手な考えを押しつけるのは彼女に失礼だろう。

ももちゃんに魔力を送りながら残りの大ネズミをどう狩るかを考える。

「魔力をいただいてすいません。でも、ありがとうございます。」

絶対に…大ネズミを倒して見せます！

見えました！ うちのお店のすぐ近く。まだなにも壊れていない…！

今のうちに倒しちやいましょう！

よろしく願います！ 行きます！」

相手にも気づかれたか。二匹の大ネズミはももちゃんを確認すると同時に左右から襲いかかってくる。

俺は一匹に向け散弾銃を放ち動きを止め、ノコギリ鉋で足を斬り落とす。これで機敏な動きの抑制ができる。その間にももちゃんは炎系統の魔法でもう片方を撃ち抜き消滅させる。俺は後ろに下がり、ももちゃんは俺と魔物の間に入る。こうすることで男としては完全に落ち度しかないが目の前のものを襲いかかる魔物はももちゃんの方に向

かうの俺は安全ということだ。

しかし、魔物はももちやんに襲いかかろうとせず切り落とされた足をもとせせず機敏に踏み込むと俺の方に向かってくる。

迎撃…間に合うか？ももちやんも魔法を放っているが間に合うかどうかは賭けだ。

間に…合え！

パァン！

危なかった。魔物に噛みつかれるギリギリのところで懐から取り出した連装銃でなんとか消滅させることができた。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ああ、大丈夫だ。かなりギリギリだったけど」

「ああ、よかった。途中で大ネズミが先輩に向かったから…」

とどめが間に合ったみたいでよかったです。

でも少しでも傷ついてたら、椎名さんに見てもらった方がいいですよ。

まだ魔物の生態は完全に明かされていません。もしかしたら毒があるかも。

…おかしいですね。魔物が目の前の敵より遠くを狙うなんてなかったのに…

知能があるのはわかってたんですが、そこまで賢くはなかったんです。

まさか、学習してるなんてことはいえ、そんな。

と、とにかく報告しましょう！ 幸い、バイト先には傷一つついてませんし！
よかったです！ ありがとうございます！

学習してる、か。だとしたらかなり面倒なことになるな。

：

：

：

後日俺は街にいた。実はクエスト中にもちやんにバイト先に遊びに来てくれ、と誘われてしまったしなによりこんな状態だ。単純に心配だったのもある。

バイト先はこの近くの…と噂をすればなんとやら、だな。

「ふう…バイトしゅーりよー！ 今日人は人もあんまり来なくて寂しかったなあ。

やっぱり大ネズミの件、あとを引きそう…あれ、先輩？

奇遇ですね！ こんなところでどうしたんですか？

もしかしてあたしのバイト先でご飯なんか…」

「あんなことの後だし、心配だね。ちよつと見に来た。」

「あ、心配で。そうですか…」

い、いえ、心配していただいてありがとうございます！ でも…その…

ほら、ご馳走するってお約束したじゃないですか！ だから来たのかなって！

あたし、ファミレスで働いてる時…ずうっと待ってたんですよ!

あ…でもごめんなさい。今日はおもてなし、できないんですよ…

単純に、あたしのシフトがつかつき終わっちゃったんです。

なんかバイト先に先輩と一緒に入るのもお恥ずかしいというか…えへへ…

あと勤務時間以外だと、店員割引が効かないんですよ!

ですから、また今度、あたしが働いている時間にお越しく下さい!」

「ほいほい、気が向いたらな」

「さて…なので今日は帰るつもりですが…先輩も寮ですよね?」

では…一緒にしましょう! あ、そだ…ちよつとブティックを覗いていいですか?

帰り道の、あそこにあるお店です!」

知ってるこれ。断れないやつな…

…

…

「はふうく…いやいやあー堪能しましたよー」

ウインドウショッピングなんて、すつごい久しぶりですよん!

お付き合いいただいてありがとうございます! えへへ…

先輩って頼りがいがありますよね! すごく頼もしいです!」

「どーいたしまして。」

女の子すごい。体力無限かな？楽しそうだし別にいいんだけど。

「…それにしても、この街の復興、早いですね。」

つい先日まで、モンスターだらけだったなんて想像できないですもん。

まあ、それだけ人がモンスターに耐性がついたってことでしようけど。

人って、嫌な状況におちいっても、案外すぐに慣れるものなんですよ。

それでも大ネズミが不潔っていうのはファミレスの評判に響いたんですけど…」

自分から地雷を踏むのか…

「…あー！ あたしからしておいて申し訳ないですが、やめましょうこの話！

もつともつと楽しい話をしましょうよ！ ……そうですね、例えば…

先輩って、彼女とか、気になる女の子とか、いるんですかあ…？」

また答えにくい質問を…

「彼女はいないぞ、というかいたことがないぞ。気になる女の子…夏海とかいつどんな

写真撮ってるかわかったもんじゃやないから常に気にしてるぞ。」

「先輩、そうじゃなくてですね」

…

…

「買い物も終わり女子寮の前に着いた。いや、はぐらかせるのめっちゃ大変だった。

「ふう…今日はありがとうございました。楽しかったです♪

結局、あたしは先輩をおもてなしできていないのが心残りですが…

まあ、また機会はありますよね♪

好きな人の質問、うまい具合にはぐらかされちゃったし…

次の機会に根掘り葉掘り聞いちゃいますからね〜！

だから先輩！ 絶対に、またバイト先来てくださいね！

しっかし、あれですねー。今日みたいに先輩とデートできるのなら…」

「なん…だと」

「で、デートです！これはデートなんです！ それ以外に何が…」

「それ以上はやめるんだ。風紀委員にしよつぴかれるぞ」

「わあっ！ じよ、冗談ですよ冗談！ デートじゃなくていいですってばあ！」

あ、今日のやつ風紀委員に見られてるんだよな。いや、大丈夫なはず、そこまで判定クソじゃないと信じて…

…

…

夜、もあつとに風紀委員長である水無月 風子から連絡が来た。

どーもどーも。清く正しく生きてます？

アンタさんの噂が少し広がっていたんで連絡したんですが。

ええ、氷川も神風も現場を目撃しているようで

女生徒との密会やデートの常習。

まあ行為まで及ばなければいいんですが、氷川と神風がうるせーんですよ。

要するにですね。誤解されるような行動は慎めつつーことです。

自覚がなからうが、周りは気にしてるんですから。

ウチにしてみれば見つからなきゃだいじょーぶですよ。がんばってステルスしてく

だせー。

平凡ってなんだっけ

「Oh, i, m s c a r y ♪ So, i, m s c a r y ♪ All t h a t i
 s e e ♪ Now i, m s c a r y ♪ All i s f a n t a s y ♪ Al
 l i s f a n t a s y ♪」

「何歌ってんのよ」

「いや、ほら。俺これから智花の弁当食うから…景気つけに？」

とするとむしろ鎮魂歌だな。智花には悪いがかなり憂鬱だ。

「こんにちは！」

噂をすればなんとやら、智花が神風を連れてやって来た。やはり手にはお弁当を持っているようだ。

SAN(94)

SANチエック

1D100:24

成功

減少値

0

残りSAN(94)

今回のやつは前回ほど壊滅的じゃないな。もしかしたら神風が手伝ったのかもしれ

ない。

食事も終わり雑談していると教室の端に不安そうな顔をしたピンク色の髪の生徒が見える。

「す、すみませ〜ん。あ、あのお〜…」

あ、あのおつ、えつと…っ。

…だ、誰も気づいてくれないよお。ど、どうしよう、どうすれば…

ひやううううっ!!? ご、ごめんなさいごめんなさいいっ!!

わたしみたいな人間が、こんな所においてごめんなさいいっ!!

土下座ですか! 土下座すれば許してくれますか?

はい、土下座ですつ! すみませんでしたあああ〜っ!!」

なんか突然土下座まで始めてる…仕方ないし話しかけるとしよう。

「こんなところでなにしてるの?」

「…ふえ? えつと、その…転校生の方を探してるんですが…」

あつ…もしかしてあなたが噂の…そうとは知らず…す、すみませんつ!

ど、土下座しますつ!! ふええええ…今度はすごい目立ちちゃってるう…っ!」

いやホントになにしてんのこの子!?

「み、皆さん誤解しないでください! いじめられているわけではないので!」

はふう…つ。あ、謝るのは昔からの癖で…気にしないでください。

あはは…別にいじめられてるわけじゃ…

…あれ？ もしかして…いじめられてるんですか？ わたし。

ま、まさかの事実には衝撃を隠せません…

そうですね…私みたいなくずはゴミ箱に行けつてことですよね。」

誰もごみくずをダストボックスにシュート！超エキサイティング!!なんて言わないししないから安心しろよ。でもそこにツツコミを入れるとまた繰り返しになるのは目に見えていることはスルーだ。

「もうここまで言われるといっそ清々しい気持ちになってしまいました。」

…つて、ああ！ 思いがけない出会いのお陰で当初の目的を忘れてました！

そうです！ そんなことはどうでもいいのですっ。

我らが天文部部长からの伝言です。おほんっ！

【貴様の能力、我が天文部がいただく】

…だそうです。伝わりました？ 伝わりますよね？

それでは…わたしは任務を全うしましたので戻ります。」

そこまで言うのと脱兎の如く逃げ帰ってしまった。天文部つてことはミナか…あいつももう少し人選を何とか…恋くらいしかまともないないか。

∴

∴

放課後になり天文部に顔を見せてからも帰る時間かと部室を出ると一人の女子生徒に声をかけられた。

金髪のロールの髪に薔薇の飾りを付けたいかにもお嬢様という雰囲気のでている。

「お待ちなさいな、その殿方∴貴方のことですね。噂の転校生さん。

私、貴方とお話するために、わざわざ足を運んで差し上げましたのよ？

学園1の天才、学園最強の魔術師と呼ばれ、薔薇姫の異名を持つ才女∴

この野薔薇姫がです！

∴こほん。実は私、貴方に対して非常に興味がありましたの。

ですが、実際にお会いすると∴ふむ。ま、想像通りでしたわね。

∴それでは、私は失礼致します。もう用事は済みましたので。

貴方の品定めという用事が、ね。それでは、ごきげんよう。」

口を挟む余地もなくひとしきり喋るとどこかに行ってしまった。結局何しに来たんだよ。

∴

∴

朝になり学園に向かう。下駄箱を開けて靴をはきかえようとしたら手紙が入っていた。なんとというか古風だな。手紙の主は野薔薇：昨日の金髪ロールか。内容は：は？

：

「どうも」

「ようこそいらつしやいました。私の手紙、読んでいただけましたか？」

それでは、これから話す内容もある程度は理解していらつしやいますわよね？

私、この学園には伴侶を探しにきております。将来の夫を、ですね。

なのでお渡ししたお手紙はラブレターとして受け止めていただいで結構。

私から提案があります。あなたの体質はまことにすばらしい。

ですが、魔法の技術などはまったくおいついておりません。」

グサツ！

魔法については勘弁してくれ。俺も割と頑張ってるんだよ。狩り道具以外も普通の魔法使えるように勉強や訓練はしてるんだよ。

「故に…残念ながら、まだまだ伴侶とするには不適切である、と言わざるを得ません。

しかし他の男子に有望株がないのも事実…そこで、提案いたします！

これからあなたを、野薔薇の男として相応しい者に育て上げて見せましょう！

いいえ、お礼は結構です。この世界に生まれ落ちたら野薔薇の性を名乗るほど幸せ

なことはないでしょうから…あら、何かご不満？」

ほぼ消去法じゃねーか！不満しかないよ。

「いや、そういうのいいんで…」

「…な、なんと、まさか断ろうとするなど…理解不能です…」

いやいや、そもそもですよ。昨日のあの態度でなんでいけると思ったの？というか結婚の理由そんなのでいいの？あれか、逆源氏物語か？あなたを私の色に染め上げてあげるってか？

「…あ、いえ、取り乱しました。ふふ、心理戦に長けてらっしやること。」

野薔薇姫は完璧です。このような嘘はすぐに看破します…私を試しましたね？

それでこそ私の伴侶としてふさわしい！では明日から、さらなる特訓ですわ！」

ドウシテ…

野薔薇さんは明日の予定まで取り付けて去って行った。

実はいま朝なんだぞこれ嘘だろ。ここ来てから日々が濃いよ。

∴
∴

放課後いつも通り俺は訓練所に来た。もちろん魔法の練習のためだ。

といつても攻撃系はもう諦めた。狩り道具もあるしな。ならば何の魔法の練習かというと身体強化と防御魔法だ。現状攻撃はともかく回避と防御という生存力に直結する魔法すら使えない俺は前線に出た場合、護衛への負担が大きすぎるのだ。最悪の場合俺を守るために人が死ぬ。

それを回避するためにも身体強化と防御の魔法の修得は必要だ。しかし、やはりといふべきか発動しない、もしくはしても実戦で使えるレベルではないという感じだ。

一応なのだが魔法使いは覚醒したときに身体が魔法を扱う反動に耐えるために魔力腺を通して身体強化を図るようだ。つまり身体強化魔法はそれをさらに重ね掛け、ないしその作用自体の活性化のようなものだろう。

ちなみに初回の身体強化も相当なもので小学生の魔法使いでもアメリカの軍人と腕相撲で負けることはない。つまりそれだけの身体能力の持ち主の惰力がたまたまとはいえ鳩尾にぶつ刺さったのだから気絶したとしても俺が悪いのではない。別にノエルが悪いわけでも…廊下走つてた時点でギルティか。

そろそろ訓練所の使用時間も終わり、か。なら次のところへ向かうか。

…

…

「剣を学びたい、か。私でいいのか？」

「いや神風くらいにししか頼める人いないしな。剣自体が特殊だから神風の技を修めるわけじゃないけど」

「落葉」を扱うためにも剣の基本的な使い方を学ぶ必要がある。神風の実力はクエストを共にしているから知っているしなにより頼みやすい。

「わかった。お前にはクエストでの借りもある。私で良ければ教えよう」

神風に型を見せてもらいたい見よう見まねで素振りをする。そこを更に矯正してもらいつつベストな状態を作っていく。

「よし今日はこんなところだろう」

神風からやめの声がかかった。型を維持するのに思った以上に集中力が要るな。

「初めてだからなかなか難しいな。悪いけどまた頼むよ」

「ああ。私で良ければいつでも力になろう」

定期的に剣道部に顔を出しつつ指導してもらおう約束を取りつけ剣道部を後にする。

嵐はまだ遠い…

∴

∴

兎ノ×明

明斗「そういえば俺以外の男子生徒ってどうしてんの？」

兎ノ助「生きてるよ」

明斗「…お、おう。そうだな？」

兎ノ助「じつさい特になんもないからな。普通に授業や訓練して。たまにクエスト行つて。対抗戦出してお前のいるPTにボコられる」

明斗「…ノーコメントで」

兎ノ助「しかもお前自体も自衛能力あるせいで男子からはけっこう嫌われてるぞ。」

明斗「背中刺されないよな俺？」

兎ノ助「風紀委員のやつらが目光らせてるし大丈夫だろ。たぶん」

ランデブーwith熟しすぎた少女

「あ、明斗さん。おはようございます！」

「ん。智花か…おはよー」

たまたま会った智花と一緒に登校する。最近朝に魔導書読んだり訓練のために早起きだったり野薔薇に朝から薔薇園の手入れを手伝わされたりしていたのでこの時間の登校は久しぶりだ。智花も智花で陸上部の朝練もあるだろうから朝に会うのはかなり珍しかったりする。

少し前に一房だけ紫のような色を残した白髪のカスロリ少女が見える。なにか独り言を言っているようだ。

「うーっ…やる気が出んわ…ぶつぶつ…なんでわざわざ妾を…ぶつぶつ…」

「アイラちゃん？ どうしたの？」

アイラ…東雲アイラか。この学校…いや、全世界を通して希有な魔法センスを持ち魔法の撃ち合いだけなら生徒会長をも超えるとされる人物だ。

ついでに自分のことを「吸血鬼」と言い張り天文部のミナと同じ病気を患っていると噂もある。

「おー、智花か。いやのう、聞いても涙、語るも涙のいやーな話でのう。」

「そ、そんなに嫌な話なんだ……」

「執行部のヘボがの、妾に魔物の討伐に行つて来いとゆるたんじゃ。」

「執行部が？ おかしいですね……普通、クエストは生徒会を通して……」

普通、クエストは軍から執行部へ要請が来た後、一度生徒会を通して情報やどの生徒が適正かを精査しクエストとして発令される。しかし今回はそれをせず執行部から直接アキラへと要請が来ているそうだ。これは生徒会と執行部で確執がありそうだな。

執行部としてもこれで生徒が死亡などすれば責任問題にされるため相当な猛者にか直接など送れないだろう。ともすれば東雲アキラが世界トップレベルの戦闘力を持つとされるのは噂ではなく事実なのだろう。

ちなみにグリモア学園だと生徒会長、生天目つかさも世界中の魔法使いでも上から数えた方が早いぐらいのランクである。アタマオカシイヨコノガッコウ……

「そこはホレ！ 妾つて吸血鬼じゃから！ 特別扱いじゃからのう……おつ。そうじゃそうじゃ。智花。その転校生をちよいとばかり借りるぞ。」

「え!? か、借りるっていうか、それは転校生さんの意思で……」

「ほーかほーか。んじゃ少年、妾と一緒にクエストに行こうぞ。」

「いいよ。」

世界トップレベルの戦闘力。興味が湧かないはずがない。

「お主の体質、一度試してみたかったんじや。」

「すんげえ量の魔物…妾が搾りつくせるかどうか、試してみようではないか。」

「こいつ中身BBANなのは…」

「そうと決まれば早速でっばつ！　なんかおもしろうなって来たぞ！」

…

…

「会長！　副会長！　執行部が東雲アイラに直接クエストを…！」

「扉を勢いよく開けながら生徒会室へ入ったのは書記の結城　聖奈。」

「…：…知っている。問い合わせている所だ。」

「それを一瞥し即座に対応に戻るは生徒会長である虎千代その人である。」

「会長…返答が来ました。【東雲アイラ1人で討伐は可能と判断】」

「生徒会を通してのクエストは最低2人以上の登録が必要なれば…」

「厳戒態勢にある学園から、必要以上の戦力を削るのは不適當である【」

副会長の水瀬　薫子が執行部から来た返信を読み上げる。

「…もってまわった言い回しだな。つまりなんだ？」

「私たちの対応が生意気なので意地悪してきた、ということですよ。」

対応……つまりこの間やった執行部に対する仮想……第七次侵攻時のための資金繰りの時のこちらの態度が気に食わなかったといったところだろう。

「ふむ……それで、東雲は請けたのか。」

人に命令されて、素直に従うようなやつじゃないだろう？」

「ええ、それは私も知っています……簡単には領かないと。」

「それが、つい先ほど出発しました。」

「はあ？ どうしてだ？」

聖奈から驚くべき報告が上がる。あの東雲アイラが……どういう風の吹き回しだろうか。

「その……よくはわかりませんが、転校生を連れて……」

呼び戻しますか？」

この場合の転校生とは渡 明斗のことだろう。

「……いや、いい。東雲がいれば転校生も安全だろう。魔物が現れたなら討伐すべきだ。こっちは執行部へ抗議するぞ。」

本人が乗り気ならば止める必要はないな。こっちはやるべき仕事をやるだけだ。

……

……

…

「ぶははははは、よく来たな少年！」

この最凶にして最強な妾と組めることをありがたく思え！」

仮面ライダーの社長かお前は…

「なにを隠そう、妾つてば超強いんじゃない。真祖だし。多分学園で一番。普段は猫被って大人しくしとるがな。」

今日はクエストついでに、そのおつそろしい力の一端をみせつけてやろう。

どっかんどっかんと蹴散らしてやるからどんと任せるがよい！」

これ俺の出番ないな？

「まかせた」

「…で、討伐対象はなんだったか。なんでも一緒だから気にしとらんかった。」

…サワガニ？ サワガニとは、あの佃煮にしたらうまいヤツか？」

やっぱり中身BB Aなのでは？ こういうのなんて言うんだったか…のじやロリだっ

け？

「ん？サワガニということとは、妾たちはどこに向かえばいいのじや。」

…うう、なんかイヤな予感がするが…まあよい。行くぞ少年。

どこであろうと構わん。先導しろ！なんか出てきたらクチャツとやってやる！」

「なんか不安になってきたわ…」

サワガニだし川いけば良いよな？ 丁度下流に当たるのが近くにあるし辿っていけば目標も見つけられるだろう。

…

…

「うう…きいとらん！ 妾はきいとらんぞ！

こんな川だらけの場所などはきいとらん！

くっそ、あのへボめ。なんかやけにニヤニヤしとると思つたら…

妾の唯一の弱点である「流れる水」がスゴいたくさんあるではないか！」

「カナヅチかよ…」

「ぐ…吸血鬼は流れる水を越えることができんのじゃ。

どうしても越える気にならん、というのが正確じゃな。

理屈は知らんがそういう設定になつとる。真祖でもそれは変わらん。」

設定って言つちやつたよ。

「こればかりは妾も無理じゃ。少年、おぶれ。

ようするに自分で渡ることができんのだから、誰かに移動させてもらえばよい。」

「ありなのそれ？」

やる必要性ある？普通に恥ずかしいんだけど…

「だーいじょうぶじゃ！ 見りゃわかるがコンパクトボディでめっちゃ軽いぞ！

ほれほれ、恥ずかしがっつる場合ではない。さっさと乗せろ。」

ツルペタだしな。

「肩車でいいか。」

「うむ、うむ…よっしゃ、ベストポジションじゃ！ 無駄に乗り心地がよいな！」

「そりゃどーも」

絵面が完全に兄妹のそれだがな。

「では行け…おい、ありゃなんじゃ。デカイカニがおるぞ。」

…おおっ！あれが討伐対象か！おろせ！おろせ！」

「あポイーっと」

「よーく見ておけ。これが吸血鬼の戦いかたじゃ！」

東雲アイラが手を前に出すと空中に複雑な魔方陣が現れ炎が放たれる。それはサワガニの魔物に向かつていくとその身を文字通り消し炭にと変え霧に戻っていく。

上級魔法…というレベルじゃない。すでに10冊ほど魔導書を読み漁ってきたがそのどれよりも複雑な魔方陣だ。もはやサワガニの魔物が不憫で仕方ない。

しかも炎だけでない。自然魔法と呼ばれる遠距離で有効な炎や雷などの自然現象を

魔法で再現するものだ。普通、自然魔法は人によって得意不得意が出るものだ。しかし東雲アイラという少女はそのどれをも使いこなしている。ただ威力が高いだけでない。魔法のコントロール技術がずば抜けている。

魔法使いのなかでも魔法の得意不得意が出るのはもちろん自然魔法では魔法との融和性とも言うべきか相性が良すぎて威力や精度のコントロールに手間取ってしまうことがあられるらしい。

しかし東雲アイラはあらゆる自然魔法をコントロールしきっている。威力はもちろん精度も凄まじくこちらには余波以外は飛んでこない。世界最強と自称するだけはあるということだろう。

一帯のサワガニを殲滅し終え再び肩車で川を移動する。浅瀬だし移動にはそう時間はかからなかった。

「おう、もういいぞ少年。ここから先は水場もなからう。たぶん。」

ようやく肩車から解放された。べつに軽いから問題はないのだがちよくちよく狩り装束の帽子をいじるのはやめてほしい。

「できるだけ低いところにいたいんじゃない？日光がな…」

妾の唯一の弱点である日光が少しでも弱まるところがよい…すなわちだ。

お前の影に入らせてくれんか。このあたり。

妾は影の似合う女じゃからな。ミステリアスなフェロモンむんむんじゃろ。

トランジスタグラマーな妾の魅力にメロメロになっちまうじゃろ。」

ナニイツテンダコイツハ…

「…そこは領かんか。妾がバカみたいじゃ。」

「実際バカ発言だったけど…」

「うっさいわ！ 見ろ、カニがおったぞ！ 今夜は佃煮じゃ！」

BB Aか…。というかあのサワガニとはシルエツト以外似ても似つかない魔物を佃煮にしてもな。というか目玉たくさんついててキモイ。

再びアイラによる一方的な殺戮が始まる。出番がなさすぎる。暇だ。

一応ももちちゃんの時のように抜けてくるやつがいるかもしれないから身構えてはいるがそんな気配は塵とも感じない。アイラが魔法を放つ度にサワガニの魔物は消え失せその数を0にした。

「…話は変わるが、お前みたいな体質の人間は人類史始まって以来じゃろう。

魔力を大量に貯蔵できる。さらにそれを分け与えることができる。」

殲滅し終えたところでアイラが話しかけてきた。その雰囲気は先ほどまでと違い真

面目なものだ。

「いつの時代も、その技術を確立しようと多くの人間が努力してきた。」

だがついで、そんな便利で安直な技術はうまれなかった。…どうじゃ少年。なんかすごく都合がいいと思わんか。

妾はお前に興味があるぞ。なぜお前みたいなのが突然出てきたのか。

ただの新種なのか、それともなにか超自然的な裏があるのか…某国の人体実験で生み出された生体兵器かもしれないな！」

「それはない…だろ」

「…冗談じゃ冗談。そんな顔をするな。 いじめすぎた。

まあ、実際のところは突然変異とかそんなんじゃないやろ。

300年くらい生きとるが、魔法は奥が深いからな。気にするな。」

こいつがいうとホントに300年生きてそうなんだからな…

「綺麗に締めたところでカニ発見じゃ！ 今度こそ佃煮にしてやるわ！

続け少年！季節の味覚は我らにあるぞ！」

そんなことを言いつつ最後の一匹であろうサワガニの魔物を発見し魔法を放つアイラ。

さつきから我慢してきたがそろそろ言うか…

「というか魔物倒したら霧に戻るから佃煮にはならんて」

「わーっとなるっつ！ 少しは空気を読めっつ！

魔物を倒したら霧に戻ることにくらい知つとるつつの!」

「あとで学食で佃煮食べような」

「慰めの言葉なぞいらんわ! 妾を食いしん坊キヤラにするな!

…まあ、お前の魔力のおかげで妾も久しぶりにストレス発散できたし。

多少いじるくらいは許してやろう。妾は心も広いのじゃ。…さて、当たり前のように

にカニを屠つてやつちやつたわけだが…

ま、とりあえず戻ろう。妾の魔物は威力はあるが消費も大きい。

だいぶ残量が減つたじやろ。気持ちよく使わせてもらったからな。」

別に減つた感じしないんだけど?

「いくら魔法を使つても干からびんというのはいいのう。いい気分じやつたぞ。」

このあとまた川渡らされた。

…

…

正門についた。あとは報告すれば終わりだが…

「ふむ。このまま報告をしてみまえばクエスト終了なんじやが…

おい少年! 報告は後じゃ! めんどくさいから先に屋上でサボるぞ!

なあに、今回は執行部も反則手を使つたんじゃ。構わん構わん。」

というアイラの提案により報告は後にして屋上にてサボタージュ実施中だ。「のう少年。妾はクエスト中、お主に「人類史始まって以来の体質」と言った。

その危険性を、念のため伝えておくぞ。大規模侵攻が確実となれば：

その混乱に乗じて、お主に近づいてくるヤツが出てくるかもしれないからの。

魔導科学研究所：通称【科研】は、その名の通り、魔導科学を研究しとる。

宍戸結希が魔法使いに覚醒する前、3ヶ月だけ所属しとったとこじや。

いいか、科研っぽいヤツらが近づいてきたら注意せないかんぞ。

あいつら、魔導科学の発展のためには人権無視が基本じゃからな。

実のところ、お主が科研に攫われる前に、虎千代と宍戸が手を回したんじや。」

マジかよ。もう宍戸さんと会長からなんか頼まれたら断れねーよ。

「学園に入学してしまえば、その生徒は自治の名のものに保護されるけんの。

お主の体質を理由に接触してくるヤツら、学園内にもおるじやろ？

お主が実感しとる以上に、お主を欲しがつとるヤツらは多いのよ。

野薔薇の縦ロールなんかは比較のお気楽な方じゃけどの。

まだ結婚のなんたるかもわからんまま伴侶だのムコ探しだの言うとる。

まあ、そんな悪いヤツでもない。気が向いたら相手にしてやれ。」

もうすでに絡まれてるんだよなあ：

野薔薇姫と書いてパーフェクトと読む

「渡さん！ 渡さん！」

なにをこんなところでグズグズしていますの！ 行きますわよ！」

「ごめん。状況がわからないんだけど…登校したばかりだし」

「あら…今しがた登校したばかりですか。それは失礼。」

私、毎朝バラ園の手入れを行っているのですが…

あろうことか…あろうことかそのバラ園に、魔物が現れたんですのよ！

なぜ、よりもよってバラ園なんですか！」

ああ、あのバラ園な。というか放課後とかたまに手入れ手伝わされてたけど野薔薇は毎朝やつてるのか。それにしても学園で魔物とは神風やもちやんの時もそうだけど人がいる場所での魔物の発生が多い気がするんだが。しかもこの学園は対魔物のエキスパートを教育する上で魔物の生態学もあるその場所でクエスト発令レベルで成長したというのは驚くべきことだろう。

「さあ！ 刀子と自由はすでに準備できております！クエスト発令を待っている暇などありません！ 校則違反など知りません！私のバラ園を、取り戻しにゆきます！」

校則違反ダメゼツタイ。

刀子と自由というのは野薔薇に仕えている護衛とメイドのことだ。護衛の支倉 刀子は長い髪を後ろでポニーテールにまとめ少し古めかしい話し方をする少女だ。メイドの小鳥遊 自由は銀髪ボブにカチューシャを着けている。基本的にやる気がなくよくサボっている。こちらはネットが好きな現代っ子だ。

∴

結局鬼気迫る野薔薇に圧され装備を整えた俺と野薔薇の前に刀子と自由が合流した。

「連れてきました、2人とも！」

「あ、クエスト申請すんでるっすよ。」

「結構！ 後で面倒くさいことにならずにすみましたね！」

では一刻も早く、魔物の手からバラ園を取り戻します！ 出発！」

「校則違反食らわないなら安心していけるよ。」

ため息をひとつ頭のスイッチを入れ換える。

学園内とはいえクエストだ。いや、今回は学園内で出てきた魔物だからこそ危険性の高い可能性がある。

…
…
…

「9年前の再来、ということではないな？」

生徒会は状況の対応をしつつ最近の魔物の動向をまとめていた。

「魔物の出現頻度が増え、人里に現れ、そして【学園】にまで現れた。

第6次侵攻の時と流れが同じです。ここから【タイコンデロガ】の近郊出現：

穴戸結希の提言によれば、それを経て侵攻が発生します。」

薫子から寄せられる情報から第7次侵攻は確定したと見ていいだろう。

「よし、学園生の戦力増強は間に合うな。」

前もって準備を進めていたのは成功だったな。これならば侵攻が起きても学園生の被害は軽微に収まるだろう。

「政府の情報開示と同時に、学園生に大規模侵攻の事を通達します。

すでに噂として広まっていますが…それを確定するためにも。」

「その辺は任せる。アタシはちよつとバラ園に行つてくるよ。」

「…はあ。」

「次に出現するのがタイコンデロガなら、生徒会の緊急出動があるからな。」

「いえ、タイコンデロガならば、我々ではなく軍が……」

「アタシがやる。クエストは久しぶりだからな。誰にも渡さないぞ。」

それにこれを期に転校生……渡の力がどんなものかを試したいしな。

「し、しかしそうだとしても、会長がバラ園に行く必要は……」

相変わらず薫子は心配性だな。

「生徒会はクエスト免除。とはいえ、学園に魔物が出て生徒会が一人もない……」

それはマズいだろう。なに、軽いウォームアップだ。

他の生徒が来たら譲るさ。」

そう言い残し生徒会室をあとにした

……

……

……

「遅いですよ！ 緊急出動のときほどより急がねばなりません！

まさかこの魔法学園に……しかもバラ園に魔物が現れるなど……

きいっ！ 私のバラ園があんなエセ薔薇のバケモノなんかに！

この野薔薇姫が根元から引っこ抜いてあげますわ！」

「落ち着け」

今は俺と野薔薇の二人だ。刀子と自由は別行動で手分けして魔物を倒す手筈になっている。

「…ふう。すいません、少し取り乱しました。

行きましょう。前衛は私にお任せなさい。

必ずやバラ園と学園に平和を取り戻して見せます。

その為に志願したのですから！ ついてきなさい、渡さん！」

魔物の討伐を開始した俺はひとつ疑問を感じ野薔薇に質問を投げ掛けた。

「学園内で魔物が発生した割には討伐に来る生徒の数が少くないか？」

「…他の生徒が来ないのは、クエストを私たちが受けているからです。

クエストを受けた生徒以外は、討伐に出向くことを禁じられています。

授業の一環ということもあるのですが、大きくは同士討ちを防ぐためですわ。」

「同士討ち？」

「このくらいは想像がついてほしいものですね…私たちはまだ学生。

未熟な生徒もおります。魔法の制御が甘かったり、状況把握ができなかったり…

ですから、クエストを受けた者たちが責任をもって、一致団結し、遂行する。」

それがわざわざ面倒くさい形式を取っている理由でもあります。」
「なるほどな。確かにここに学園生がこぞつて来たら阿鼻叫喚だな」

「…さ、おしゃべりが過ぎました。来ますわよ。」

今話したことの意味、お分かりですね？」

「ああ」

お出ましか。バラの頭をした人型の魔物。ローズバトラーという種類の魔物で過去にも出現が確認されている魔物だ。要は生態や対策が練られている魔物ということだ。

野薔薇は得物である鞭に強化魔法を施し振るう。それはローズバトラーへと絡み付きその動きを抑制する。流星は日本国軍の顔、「戦の野薔薇」の血を継いでいるだけはある。強化を施した鞭で相手を打ち、止め、時には自然魔法も織り込み完璧に勝つ。なにも常に完璧と言っているのは自称だけでないだろう。才能に溺れず常に努力を続けたからこそその力だ。

さて、俺も負けてはいられないな。野薔薇に魔力を供給しつつ横から出てきたローズバトラーの右腕のストレートに合わせ左手に持っていた散弾銃を放ち右腕をハネ上げる体勢が崩れたローズバトラーの胸へと落葉を突き刺す。これでもまだ霧散しないか。タフだな。いや、俺の技量が落葉に追い付いていないだけか。後ろから小型のバラの魔

物が襲いかかるがそれをローズバトラーに突き刺した落葉を抜きつつ柄の逆側についている短刀で迎撃し消滅させる。

再び俺に攻撃しようとしたローズバトラーだが野薔薇の鞭に打たれ今度こそ消滅した。

「野薔薇ってどんなところなんだ？」

魔物を搜索しつつそんな疑問を投げ掛ける。

「…あら、野薔薇のことを知りたいとは…」

お勉強熱心なのはいいですが、今するようなお話ではないでしょう。」

「まあ、それもそうなんだが」

「ですから、今は「野薔薇は完璧を以て野薔薇とする」とだけ伝えておきます。

野薔薇である以上、完璧であることが求められます。勉強にも武芸にも、です。」

「窮屈に感じたことは？」

「窮屈？ そんな馬鹿な。私は誇りに思っていますよ。」

野薔薇は歴史上、特別な役割を担ってきました。これからもそうです。

与えられる役割が重要であるほど、その責任は重いのですから。

名誉ある野薔薇に完璧が求められるのは当然のことですわ。

もちろん私も完璧です。成績優秀、このようにクエストも…

…やだ、こうして自慢をするのは欠点ですね。直しておきましょう。

ご満足ですか？ では次です。この不細工な薔薇をとっちめましょう。」

「ん。了解」

今回のはそれなりに数が多いな。小型の魔物が触手をだし打つてこようとす。野薔薇は鞭を振り逆に打ちつけている。

なら俺は…

キーン！という甲高い音と共に落葉の仕掛けを発動させ長刀と短刀の二刀流になる。落葉は長刀と短刀による二刀流と柄を合体させた両刃剣の2つの側面を持つ武器だ。その汎用性はノコギリ鉋以上だがあちらと違い刀という使い手の技量もろくに反映する武器だ。先程のようにローズバトラーを倒しきれなかったのは俺がこの武器を扱いきれていない証左である。

二刀流にした落葉で小型の触手を払いのけ長刀による突きで魔物の身を刺し貫く。

続くローズバトラーに体を回転させながらの連続斬りからの両刀での同時突きを放つ。柄を合体させながらの袈裟斬りを入れフリーになった左手でホルスターから連装銃を抜きドメを刺す。

それにしてもこれだけ連撃して落葉だけで倒しきれないのは確実に俺の技量不足だな。神風も落葉の特殊性からか「基本的なことしか教えることができない」って言う

てたもんな。神風の剣が一刀流の魔法剣士スタイルに比べ俺は両刃剣モードと二刀流を使い分けつつ衝撃の高い散弾銃と火力の高い連装銃も使い分けないといけないから大変なんだよな。ノコギリ鉋はまだ銃を状況で使い分けるくらいなんだが鉋とか変形斬りくらいでしか使わないし。

∴

∴

バラ園の魔物を他の生徒に引き継いだあと第7次侵攻を通達するために報道部などに手を回してもらいその準備を終えた。あとは演説をするだけだ。

「生徒会長、武田虎千代より学園生へ通達がある。

クエストに行っていない生徒は、各々作業を止め、聞いてくれ。

現在、学園のバラ園に霧の魔物が現れて、多数の生徒が討伐に赴いている。

人数制限のため、もどかしい思いをしている者もいるだろう。

だが事態はそれをはるかに超えつつある。噂としては聞いたことがあるが∴

ここに。第7次侵攻の発生を宣言する。」

∴

風紀委員の待機室で会長の演説を聞いていた風紀委員長風の風子は独りでに呟く

「∴ついに来やがりましたね。」

魔物の人里への出現、学園内への出現。第6次の時と同じ流れ…

となれば次はタイコンデロガですかね？ さー、会長。どーしましよーね。

あの頃より軍事力、戦力は上がっている。だから大丈夫…

それは果たして、正しいんでしょーかね…？」

…

「お前たち、対抗戦はここまでだ。非常事態宣言が発令された。

少なくとも3日間、全ての学業活動は停止され、クエストに専念する。」

コロシアムで対抗戦を見ていた赤い髪と左目の眼帯が特徴の精鋭部隊の隊長…エレンは対抗戦を行っていた…お互いチームなど知らんとばかりのワンマンプレーを行っていた精鋭部隊の来栖 焰と風紀委員の冬樹イヴ、両人を止めた

「…もう少しだったのに。」

荒れた息を整えながらそう呟くイヴと

「こつちのセリフだ！ あと一撃でアタシが…！」

目を見開きイヴに食いつく焰

「口で言いあつてどーすんだよ。えーと、フユキつつたつたっけか。

さっさと警備に行きな。こつちから精鋭部隊とキョードー作戦だ。

対抗戦で疲れました、なんてイイワケしてみやがれ。大笑いしてやる。」

その兩人を止めるのは金髪の女性：精鋭部隊の副隊長であるメアリーだ。

「氣遣い無用です。開始前にも言いましたが、そのことは心得ています。」

イヴはそう言い残すとコロシアムの警備へと移るためにその場所をあとにした。

「来栖は詰所に行け。ミーティング後、クエストを最優先で請けろ。」

エレンは来栖にそう言い自分もメアリーと共に精鋭部隊の詰所に向かう。焰も舌打ちをしながらもその指示に従う。

「ずいぶん嫌みが丁寧だな？ お前の狙いがわかってきたぞ。」

お前はあの2人にこれからチームワークを延々と押し付けるつもりだろう。

いや、他の生徒にもだな。

自分を敵にすれば、反感を持つ生徒同士が手を組む可能性もある。

メアリー、お前も随分素直に育ったものだな。」

「はあ……………?」

「バスター大佐がお前を育てたときの真似をするつもりだろう。」

「凶星じゃないか？ 日本の女学生にそれが通じるかどうか、考えてみたか？」

「オメー、バカじゃねーの。んなアホなことしてどーすんだ。」

「そんなオッサンのことなんか、とうの昔に忘れちゃったぜ。」

：

「なかなか根元が見つかりませんわね。」

これほどに巨大になるまで、この学園の誰も気づかなかつたなんて……いえ、違いますね。私と刀子は毎日バラ園を見えていますから。

自由は……まあ……たまに……見ていたのかしら。

どちらかという成長が異常に速かつたのでしようね。およそ一日。初めてだらけのことですが、結果はいつも通りです。

私が完璧に、魔物を消し去る。これに変わりはありませんわ。

転校生さん。正直、あなたには助かっています。

その尽きることのない魔力、非常に頼もしいですわね。

その調子で私をサポートしてください。存分に力を発揮できるように。

これが最後の花であることを信じ、今度こそ息の根を止めますよ。」

おそらく最後と思われるローズバトラーと取り巻きの魔物が出てきた。体力面でも問題ありだな。落葉を持つ腕が重くなってきた。落葉を腰の鞘に納刀し柄は持ったままにしておく所謂居合いの形を取り接近してきた小型の魔物を斬り払う。野薔薇は小

型を鞭でまとめて打ち払いローズバトラーに牽制の魔法を放っている。俺も散弾銃を放ちローズバトラーの動きを止めたところで野薔薇の鞭がローズバトラーを拘束しそのまま地面へと打ちつけ消滅させた。

「お疲れ様でした。多少でこずりましたが、とどめはさせたようです。

そんなに喜ぶことではありません。私が出たのだから当然です。

むしろもつと早く倒す方法があつたのではないかと考えると…

まだ完璧だと胸を張って言えるわけではありませんわ。

勝つて兜の緒を締めよと申しますし、気を緩める時間はありません。

それが野薔薇姫のありかたです。」

「それもそうだな。まだ残ってるのがあるかもしれないし…」

「渡さん。以前はあなたに不躰なことを言って申し訳ありませんでした。

謝罪しますわ。どうか水に流していただければと思います。」

ああ、最初に会ったときの。気にしてたんだな。

「なんのことが覚えてないわ」

「…覚えがないのであればそれで構いませんが。」

では戻りましょうか。学園の皆さんに、安全だと伝えねばなりませんからね。

またバラ園に魔物など出ることがあったら…いや…

この学園に出ることがあれば、私が戦います。

その時はあてにしてくださいな。」

…

…

…

屋上で生徒会長の話を聞いていたアイラは横にいた兎ノ助に疑問を投げ掛けていた
「のうウサ公。なぜにきやつらは学園に現れるのじゃろな。」

とゆーか、なぜに「大規模侵攻の前だけ」現れるのじゃろな。

魔法使いが厄介ならば、普段からこの学園にもりもり現れてよかろーにの。」

「ああ、俺、あんま知らねーけど、コロシアムの地下になんかあるらしいぜ。」

てゆーか、お前の方が詳しいんじゃないの？」

「いやいや、そりや違う。コロシアムの地下に「厄介な何か」があるなら…それこそ、魔物は普段からここに来るじゃろ？」

「ん、まあ、確かにな。」

「もう一つ疑問があつてな。なぜ学園はこんなにも安全なんじゃろな。」

街から離れた郊外にあるんに、大規模侵攻の前くらいしか魔物は現れん。」

さらに疑問を投げ掛ける。別に答えが欲しいわけではない。ただ自分の頭を整理するためをやっているだけだ。

「うーん：俺も不思議なんだけどな。理由は判明してないんだろ？」

「魔物は知能がないつちゆうのが定説じゃがの。真実は違う。」

少なくとも、指揮官がおるのよ。どこにおるかはおはわからんがのう。

頭のいーヤツじゃ。妾はそれが「ムサシ」じゃと考える。」

300年ほど前に出現した「ムサシ」。倒されたという記録はなくその後出現したという情報もない。しかし、魔物たちの指揮官だというのならあるいは後方から魔物に指示を出しているのかもしれない。

「攻める場所はそいつが指示してるってのか？」

「こう考えるとうのう。おかしいんじやよ。魔法学園を攻めない指示：

それはつまり、きやつらは魔法使いなぞ相手にしてない、ということになる。

つまり「人間は滅ぼすが、魔法使いは後回し、もしくは：滅ぼさない」とのう。」

魔物を倒すのに一番効果的なものは魔法だ。「テク」やその他の兵器が発達した今でもそれは変わらない。だから魔法使い自体に特別な理由のない限り魔物が魔法使いを見逃しているのはおかしい。

「…なあ、お前、どこまで知ってるんだ？ なにを知らうとしてるんだ？」

兎ノ助から疑念を感じるが別に気にすることは無い。

「穴戸に負けんくらいは詳しいと思っとるよ。まあ…

それでも、なんも知らんのとあんま変わらんがの。

まあ妾はきよーみないが、コロシアムの地下に何かがあるのは間違いない。

執行部が「これこそが大事なモノ」だと思うとるもんがの。

さて…魔物は本当に「それ」を狙って来たのかのう？」

…

…

対抗戦を切り上げコロシアムの警備に就いたイヴの前に一人の生徒がやってくる。

褐色の肌と黒いショートのを髪をした女生徒…生天目つかさだ。

「……うん？」

つかさはコロシアムを見渡すと心底不思議そうな顔をする。

「あ、あなた…！　なんでこんなところに…」

関わりたくはないが仕事の関係上そうはいかない。イヴは覚悟を決めつかさへと話しかける。

「魔物が現れたと聞いたんでな。急いで戻ってきた。出るなら「ここ」だと思ったんだが

…アテが外れたな。」

「…バラ園よ。でももうクエストの定員上限に達しているわ。

もつともそんなこと、気にしないでしようけど。

それより…あなた、どうしてここだと思ったの？」

警備をしると言われたが詳細を明かされているわけではないイヴはつかさへと疑問をぶつける。

「9年前に現れたのがここだからだ。それに…地下のものもあるしな。」

生天目つかさはどこまでなにを知っているのだろうか。普段は授業や訓練をサポートし校外に出ては校則を無視して魔物の討伐を勝手にやっているこの生徒はただ強いだけでない…自分よりも多くを知っているだろう。

「…地下は執行部管轄よ。精鋭部隊意外は立入禁…」

「【そんなこと、気にしないでしようけど】だ。」

さて、魔物がいないならここにいない意味はない。

私はバラ園に行こう。」

言い切るより先に発言される。しかもその内容からしてもやはり異常だ。

「…なんてこと…彼女、執行部も意に介さないのね…」

私は地下になにかがあるのか知らないけれど…彼女は知っている。

…私はあくまで、組織の中でトップに立つ必要がある。

羨ましいと思うけれど、彼女の生き方とは相いれないわね。」
「独りでにそう呟くとイヴは再びコロシアムの警備へと戻った。

：

：

：

目が覚める。

夢から醒めるため。

外に出ようと動こうとする。

ここは水の中、あらゆる神秘を秘匿する籠。

水面から顔を出そうとする。

でもそれは叶わなかった。水面の外に人影が見える。

それがナニかを振るう。意識が途切れる。

また水の奥底に沈み。夢へと落ちる。

お姉さんといっしょ

なんか朝から生徒会に捕まったと思ったら他人に聞かれたくないと生徒会室に連行されクエストを受けることになった。場所は「大垣峰」。風飛の街の近くにある街として栄えている、ように魔法を使つて見せかけているらしい。実際は魔物に占拠されたいコンデロガ級がわんさかと湧く特級危険区域であるようだ。今回のクエストはそこから魔物の原種である「ブレイヤール・ドウ」が漏れたらしくそれを討伐してこいとのことだ。

今回のクエストの同行者は転校してきたばかりの生徒であるらしいが実力の方は折り紙付きですでに学園でもトップレベルに位置しているらしい。

というこゝで装備を整える。今回の魔物はどちらかと言えば獣寄りなのでメインはノコギリ鉋を持つていく。前回のクエストでまともに扱えていなかったし落葉はお留守番だ。あとは腰の後ろに散弾銃を左側に連装銃をそれぞれホルスターに格納しマントのような外套の内側へと投げナイフを仕込む。

準備が完了し同行者の待つている校門へと行く。そこには青い巫女装束のような戦闘服を纏った女性がいた。

「貴女が今回の同行者、であつてますよね？ 渡 明斗です。よろしく」

「ああ…君が…そうか。君が渡 明斗か。なるほど、魔力量が凄いわね。

挨拶がまだだったかしら。私は朱鷺坂チトセ。君と同じ転校生よ。

私はまだ転校してきたばかり。腕試しということとでクエストを受けたけれど…

いろいろ教えてね、渡君。魔法は得意だから心配しないで。」

「ああ。じゃ、行きますか」

…

…

目的の場所へと向かう道中チトセが話しかけてきた。

「で、さっそく…実は私、辺鄙などところの出であまり情勢を知らないのよ。

世界はどんな状況になつてるのかしら。魔法使いとして興味があるわ。

例えば、アメリカはどの程度侵食されてる？ イギリスは？

魔法学園は6つとも全て現存しているかしら？」

「そのくらいのことならテレビ見てればわかるはずだけど…」

「…そうね、テレビも新聞もない田舎だったから。

魔法使いに覚醒しても、しばらくこの学園に見つからないくらいの。」

「すごい所から来たんだな」

「ふふ、そんな場所もあるのよ。この世界にはね。しかもたくさん。」

そんな話をしていたら大垣峰へと到着する。

「このあたりは…懐かしいわね…あ、ゴメンなさい。来たことはないのよ。」

この辺、もといたところに雰囲気が出てね。よく見ると全然違うんだけど。

やだ、いきなりホームシックなのかしら…」

「帰れそうにないところなのか？」

「まあ、しばらくは帰れないわね。」

…君の故郷は無事？ 魔物に攻め込まれたりしてはいない？

私の故郷は魔物に攻められたわ。みんな避難できたからまだマシだけどね。

だから私は、そこを取り戻すために強い魔法使いになりたいのよ。

できないことを言う馬鹿だって思う？」

「いや、魔物と戦ってる人はみんなそう思うんじゃないか。」

「…フフ、否定してくれてありがとう。」

このくらいの敵なら大丈夫よ。学園に来る前はもつと強いのはかりだったから。

…まあ、魔力を節約しながらだったのもあるけれどね。

その【体質】。羨ましいわ…でも代償として魔法がほとんど使えないなら…

私の境遇だったら死んでただろうから、複雑ね。一人で戦ってたから。

…でも君の力、きつとみんなの役に立つわよ。わかってると思うけど。強い魔物を倒すには、君が必要。君のその膨大な魔力が。

…どうやら、君が選ばれるのはそれだけじゃなさそうだけどね？」

「今回の魔物は…ふうん…あんまり興味ないわ。」

なんだって魔物は嫌いな。すつごくね。大事な人が何人も殺されたし。

私がいなくなるからって、地元の人たちは住居を捨てないといけなくなつたし。

悔しいでしょう？ 友達も、みんな死んじゃつた…どうしたの、元気出して。

そういう人がでないように、私たちは強くなるんでしよう？」

少し気分が減入り過ぎたか。顔に出るとは思わなかつた。

「逆に奮起してもらわないと困るわ…そういうえばちよつと聞きたいんだけど。」

君、どこの生まれかしら？ この辺ではないと思うのよね…」

「この辺じゃないのだけは確かだけど…なにかあるのか？」

「いえ、少し気になつただけ。カンよ、カン。嫌ならいいけどね。」

グリモアには世界中から集まってくるでしょう？ ちよつと珍しくて。

…あら、長話しちゃつたわね。敵さんのお出ましょ。

行きましょ。まずは一発お見舞いしてやるわ。人類代表として。」

「おでましか」

廃墟の影から現れる魔物の原種「ブレイヤール・ドウ」はしかしこちらに襲いかかるより先にチトセの放った魔法により即座に霧散した。

驚いた学園のトップレベルに位置しているとは聞いていたがこの間クエストを一緒にしたアイラと同等レベルだ。つまり俺の出番はない。たぶん。

魔物というのは出現する際に霧が近くの動植物の体内に入り侵食しその体構造を変化させる場合と霧自体が固まり人間が空想でしか知らないような竜やケンタウロスなどの形を取る場合が多い。では原種とは何かというと元になる動植物も空想や伝説もない人類が初めて出会った形状をしている魔物を原種というわけだ。「ブレイヤール・ドウ」の形状を無理やり地球上の生物に当てはめるなら蜘蛛が近いだろうか。多足、頭と胸部をつなぐ小さな胸部。その全身は影で作られているかのように醜悪な黒色をしている。

しかしその「ブレイヤール・ドウ」もチトセの魔法の前に次々と撃破されていった。「あの規模と威力の魔法を使いこなして…すごいな。」

「そうね、センスはあるのかもね。魔力量も普通の人より多いみたい、私。でも、一人で戦い続けるには全然足りないわ。だから仲間というか…

協力してくれるような人を探しに学園に来た、というのが正解かしら。

可能であれば、クエストとして故郷を救いたいわ。可能ならね。

もちろん、今は難しいことはわかってるわ。私は新参だし、危険なもの。まずは実績作り。そして土台作り。地道に行かなきゃってね。

でも、こんな考えがうまれたのよ。きいてくれる？ …たとえばの話…ね。」「
チトセは続ける。

「自分の故郷が魔物に襲われているとして…そう、私のことよ。

ここに理想的なパートナーがいました。多分その人を連れて行けば…

その人の魔力量と自分の魔法技術を駆使すれば…

明日にでも故郷が救える。そうなったとき、私はどうすればいいと思う？」

「…」

もし自分が同じ境遇だったら…

「…卑怯だったかしら。故郷を出すと否定しにくいわよね。

大丈夫よ、言ってみただけ。今は私も学園生だし、校則違反はしないわ。

だから卒業したら、ね。約束よ？」

「わかった。今は俺も狩人だ。約束は必ず果たすさ。」

その後も俺は魔力供給以外にすることもなくチトセが魔物を屠っていくのを見ていた。

「それにしても魔力を他人に受け渡せる人がいるなんて、知らなかった。

：フフフ。そうね、私の地元は田舎だから。他にはいるかしら？

他人に魔力を与えられる人。宍戸さんは機械を使ってなんとかできてる？

東雲さんは貴方の体を弄りたがっている？

でしょうね。あなたの魔力量はとんでもないもの：数百倍、いえ：

そんな数字で表せられるものじゃないわ。魔力量が多すぎるのね。

みんな正しく把握できないから【数百倍】なんて言葉でごまかしてるのよ。」

「チトセの見解は？」

「私が見たところ、人類全員の魔力量とほぼ同等。少なくともそのくらい。

それ以上は私にもわからない：」

「流石に冗談だろ」

「あら、冗談なんかじゃないわ。

じゃあ、私が本気を出して魔法を使ってみましようか？

それであなたの魔力が尽きるかどうか、試してみようじゃない。」

そういうとチトセは新手の魔物に今までの比ではないレベルの魔法を連続で行使し始める。魔力供給本当に追い付くのかよ。ガス欠でお陀仏とか笑えないぞ。

チトセといえば先程のは冗談ではない：と証明するためだろう。見るからに魔法の威力と範囲が上がり次々と出てくる魔物を殲滅していく。ここまで来るとただの蹂躪

だ。

「あー、気持ちいいわ。覚醒したとき以来ね、こんなにぶっ放せるの。で、どう？　ちなみに今の戦いで成人が50人は空になったわよ。」

魔力を無駄遣いしてるからね。わずかでも疲れたりしてる？」

「いや、全くそんな感じはしないな」

我ながらなんという魔力量だろう。変化すら感じられないとは…

「…でしょう？　じゃあどんどん使っていくから、気分が悪くなったら言つて。多分、そんなことはありえないでしょうから。」

…それにしても…魔物が現れる頻度はどのくらいなの？

私も転校三日目で請けたけど、君は頻繁に出ていると聞いたよ。」

「多いときは週1くらい」

「そう、このあたりも随分多いのね…『ゲート』に近いから…」

「『ゲート』？」

「ゲート、知らない？　そこから魔物が出てくるっていう穴みたいところ。」

もしかしたら知らずに言ってるかもしれないけど…知らないならいいわ。

知ってても、どちらでもね。とにかく、この辺に魔物が多く出るのはね…

その『ゲート』のせいだって、私は知ってるわよ。」

その後ほどなくして戦闘は終わる。チトセはあのあとも派手な魔法を連発していたが結局俺の魔力は自覚できるほど減ることはなかった。

「…まだ、弱い…」

ああ、お疲れ様。どこか怪我してる？ 大丈夫なように戦ったけど。」

チトセが何か呟いたようだが…

「いや、問題ない。むしろ持ってきた装備が全部無駄になったくらいだ」

「あら、それはごめんなさいね。まあ、これだけが取り柄だからね。なんか魔法の技術が高いとか言われて。」

この学園でも上位なんだって。おだてられてるのかしら。

でも、生徒会長の武田さんとか、東雲さんとか、生天目さんとか…

凄い人がいっぱいいるんでしょう？ まだ井の中の蛙ね。

…念のためなんだけど、もう一度、君の名前、きいていいかしら？」

「渡 明斗」

「…偽名じゃないわよね？ 確かに？ 名前を変えたとかはしてない？」

「なんでそんなことしないといけないのさ」

「そう…いえ、ごめんなさい。馬鹿にするつもりなんかはないのよ。」

ただ、本当にちよっと気になっただけ。気を悪くしないで。

そうよ。その証拠に、これからお友達になりましょう♪

クエストの後は授業免除でしよう？ このあたりでどこかに連れて行ってよ。」

∴
∴
∴

あのあと学校で今回のクエストの詳細は伏せるよう通達を受けた。そしてチトセの提案の通り街へと遊びに出た。侵攻については一応は警戒をしているがバラ園の一件のあととりあえずタイコンデロガ級の出現までは交代制で警戒を続けるに留まっている。街へと出たチトセはというとクエストの時とはうってかわり買い物などを楽しんでいたようだった。

結構な時間を遊んだ気がしたが学校に戻ってきたのが丁度学校の授業などが終わったあとだったのでひさしぶりに天文部へと顔を出す。

「おひゃー」

「あつ、サーヴァント！なんでもっと私の召喚に応じないのだ！」

変なことを言いながらの一番に近づいてきたのは部長である風槍 ミナ。銀髪のツインテールと右目の眼帯が特徴の少女である。

極度の中二病であり俺のことをサーヴァントと呼んでくる。

「おい、ミナ！あまり渡に迷惑をかけるなど言つとるじゃろ！」

そんなミナの面倒を見る古風な話し方をする少女は南条 恋。この変人集団である天文部のブレーキ役だ。

「ひえっ！すみません！視界に入つてすみません！土下座しますからあ！」

いきなり土下座を始めたのは双美 心。勘弁してくれ……。別に俺だけにこういう態度な訳ではなく誰に対してもこれなので別に俺がいじめられているわけではないということとは覚えておいて欲しい。

「…zzzz」

部屋の隅で寝ているのは立華 卯衣。白髪の美少女であるが常に寝ている。今は目を瞑つて寝ているようだがたまに目を開けたまま寝ているときもある。穴戸博士と共に魔法学園に入学したらしく実際はどうか知らないが人工生命体であるという。

「おっ！センパイじゃないですか。こっちで会うのはひさびさつすね〜」

最後に話しかけてきたのは風紀委員も兼任しているNINJAの服部 梓である。

ちなみに天文部以外だと風紀委員の手伝いでよく会っている。別に風紀委員長に脅されているわけではない。断じてそうじゃない。

「よし！サーヴァントも来たことだし。攻め込まれる前に【組織】の本拠地を攻撃するぞ

!

「聖戦の始まりだ！ 大垣峰に行くぞっ！」

「…!?」

「ミナが大垣峰の方面を見ながらそんなことを言います。」

「いつも中二病でテキトーなことを言うミナであるが…なぜ? よりにもよって大垣峰なのだ。タイムリー過ぎるだろう。」

「クエストの情報が漏れた? いや、俺の口からは「クエストに行ってきた」という程度の情報しか出してない。チトセや生徒会の誰かが口を滑らせた? ありえないだろう。生徒会以外でも知っている者はいるだろう。しかしだからといってミナにそれを話すメリツトがあるとは思えない…」

「たわけ! ここから大垣峰までどれだけ時間がかかると思つとるんじや!」

「なんの根拠があるか知らんが、許可なしで行けるわけなからう!」

「思案に耽っていたところでいつも通り恋がミナを止めに入る。服部は…あの様子だと大垣峰のことは知っているようだな。目配せをして「トイレ」と言いながら廊下に出る。」

「ミナの言っていること…どう見る?」

「偶然…にしては出来すぎてるっすよね。でも現状だと様子見しかないのも確かっす」

ね。」

「それもそうだな。すまない忙しいだろうけど様子見てやってくれるか。俺も暇なときにまた天文部に顔出すから…」

「了解です。」

話を終え部室に戻る。中ではまだ暴走するミナとそれを止める恋、それを見守る心と隅で熟睡している卯衣がいた。

なんというか、心配のしすぎなのかもしれない…

天に愛されし軍神

10月もほぼ終わり季節も冬へ移り変わろうとしていた頃それは来た。
「転校生。登校すぐですまないが手を貸してくれ。」

アタシとクエストに行くぞ。魔物が出た。正確には昨日出たんだが…
会長が直々に俺を呼びに来たってことは…どうとう来たか…

「どうやらタイコンデロガらしくてな…いや、まだ正体不明なんだ。」

普通は出現してすぐ、執行部がだいたいのデータを出すものなんだよ。

それが無い。そしてそのまま、生徒会に出撃要請が出た。

様子がおかしいだろう？

しかも出現場所は洞窟の奥深く。人的被害はまだ出ていない。」

「データを出さないんじゃないのか？それだけその魔物が強大なのかそれとも…」

「こういう魔物は、軍が余裕をもってあたるものだ。」

国軍は第7次侵攻の準備に手を取られているから…

マニュアルに従えば、通常の魔物はいったん放置される。

力量がわからない相手との戦闘はしないのが学園の方針だ。

だが来た。この魔物は「すぐ退治しなければならぬ」と判断された。

しかも生徒会長のアタシを御指名の緊急出動だ。

十中八九タイコンデロガだな。そういうわけで、アタシはすぐにでかける。」

「そしてアタシからお前への頼みだ。同行してくれ。

生徒会役員を始め、万全の態勢で臨む。お前の力が必要だ。

さあ、みんなを守るぞ。」

：

：

生徒会室ではチトセと聖奈が話していた。

「…私が仲間はすれなものは、新参だからかしら。」

そう呟くのはチトセ。今回のタイコンデロガのクエストには諸事情から参加出来ないのを不服に思っているようだ。

「そうではなく、特級危険区域に行ったばかりだからだ。」

そう返す聖奈は事務的である。

「あの程度の魔物で疲れたりしないわ。ええと…もう何年も戦ってるもの。」

「その申告を額面通りに受け取るわけにはいかない。」

我々は生徒を守り、学園の秩序を守るための組織だ。

可能な限り、生徒の規範でなければならん。

すなわち【役目を果たした後は休め】だ。」

「…つまんないわあ。」

「自信に見合う実力があるのは知っている。だから万が一にも：

第7次侵攻の時、体調不良で動けないなどということがないようにすべきだ。

わずかな疲れもためないための措置と考えてくれ。」

「第7次侵攻をダシにするなんてズルいじゃない。仕方ないわね。」

そう。今回警戒すべきはタイコンデロガではない。このあとすぐにくる第7次侵攻

である。

「わかってくれてなによりだ。では私は出発の準備をする。

学園を頼んだぞ。」

：

：

聖奈のいなくなったあとと生徒会室に一人の生徒が入ってくる。

「お姉さまーっ…あれ？ いない。」

赤毛のポニーテールを携えた少女は辺りを見回すが探している人物はいなかったよ

うだ。

「みんな、クエストに行ったわよ。知らなかったの？ 副会長補佐さん。」

「むう。えらそーなヤツだな。アタシのこと知ってるの？」

「JGJのご令嬢でしょう。ちようどよかったわ、頼みたいことがあるの。」

「なんだ？ 金欲しいの？」

「軍事複合体企業であるJGJ。軍用品から魔導品果てはホテル・結婚式場・娯楽施設までをも運営する大企業だ。チトセがそんな大企業の令嬢に求めるのはもちろん金、などではない。」

「いいえ、クエストに出た討伐隊が〔崩落で分断されたから〕：

レスキューチームに出動を要請してほしいの。もちろんデクも連れて。」

窓の外を見ながらチトセは自らの要求を述べる。

「崩落で分断？ どういうことだ？」

「どうもこうもないわ。宍戸さんにも伝えてちようだいね。」

私は休むように言われてるから。この部屋で待つてるわ。」

チトセはそう言うとう椅子に座り休息へと移った。

：

∴
∴

「∴討伐隊が分断？ どういうこと？」

穴戸 結希は自らの研究室で初音からの報告を受ける。

「知らねーよ、アタシも。でもあの新しい生徒会のヤツが言ってたぜ。

崩落で分断されたって。」

「崩落∴いえ、そんな情報はどこにも∴待って∴

∴今、エレンから連絡があつたわ。洞窟内で大規模な振動。

連絡は取れたけど、虎千代と転校生君が行方不明∴

崩落した岩石の向こう側に取り残されている可能性があるわ。」

「エレンって、軍人だろ？ なんでいるんだ？」

「国軍の手がいつぱいだから、クエストの進行監視をしているの。」

だから彼女からの情報が一番早いはず∴でも、朱鷺坂チトセはより早い∴」

「そーそー、なんか来るときモヤモヤしてたんだ。」

「なんのこと？」

「いや、あの女さあ、なにか見ながらじゃなかったんだよ。」

アンタは今、デバイスで情報を確認してるだろ？ それがなくってさ。

生徒会室つて通信機器ないし、どこでそんな情報仕入れたんだ？」

「盗聴……？ いや、説明がつかない。彼女の方が早かったわ……」

いえ、今は置いておきましょう。J G Jへのレスキュー要請は？」

チトセのことが気になりはするが今は考えている暇がない。今やるべきは状況への対応だ。

「ガセだつたらまずいからまだしてねーけど、やるよ。やるやる。」

沙那ーっ！ 聞いてたなーっ!？」

初音がそう言うと言と研究室へと白髪を後ろにまとめた一人の女生徒が入ってくる。彼女は月宮 沙那。初音のメイドであり護衛である。

「承知しております。今、初音様の権限で要請を済ませたところでございます。」

「じゃ、アタシたちも行くか！ 生徒会として！」

「レスキューチームに任せましょう。タイコンデロガが相手であれば……」

「私も執行部にかかけあつてくるわ。向こうにも伝わってるでしょうし。」

今、武田虎千代を失うのはまずい……」

：

：

：

報道部内では夏海と鳴子がクエストの情報を集めていた。

「情報はなによりも早い。人類が魔物と戦う上でなによりも発達したのが情報だ。」

「そうなんですか？ そう言われてみると、魔物は知能が低いから…」

「そうだね。劣勢の状況であっても、人類に強みはあるわけだ。」

「だけど、最近はそうとも言い切れない。魔物の行動がどうも怪しい。」

「怪しいって…どういうことですか？ ケータイ使い出したりとか。」

「大規模侵攻が近づくと、学園に1体現れる。タイコンデロガが1体現れる…」

「この法則、ただの法則じゃなくて「魔物が連携している」とすれば？」

「もつと言えば、大規模侵攻だって魔物が示し合わせてやってる…」

「そういう可能性が出てくるわけだ。」

「…それって、魔物が連絡を取り合って、互いに協力してるってことですか？」

「情報の共有。それは単純でありながらも強力な武器である。」

「昔から、魔物を知的生命体として極秘に研究している所はあった。」

「正直な所、魔物に知能がないというのはある種のプロパガンダみたいなものだ。」

「人類に勝利の可能性がないと知れば、あとはもう全滅まっしぐらだからね。」

「…えっ!? それってヤバくないですか？ 魔物、知能があるんですよね？」

「さあ。」

鳴子は首を傾げながらなんでもない風に呟く。

「だ、だって今部長が……！」

「全部、とある陰謀論者の書いた本からの引用だよ？」

「……え？」

「さあ、夏海。これが情報の力だ。確証がなくてもそれっぽく伝えれば……

人は信じる。僕たちはそれを悪用してはならないのだよ。」

「……ぶちよーっ！」

「……この与太話は、あることを示唆してくれてもいる。

魔物が知能をもっていたら、人類が勝利する可能性がなくなる……

そう思う人がいる。夏海、君が「ヤバイ」っていったようにね。

それを自分が知った時、僕たちジャーナリストはどうすればいいと思う？」

「……えつと……！」

「人々を絶望に追い込むことになったとしても、真実を報道すべきか？」

希望を持たねばならないと、それを隠すか？

夏海、これは君がジャーナリストを目指すなら、いずれ必ず直面する問題だ。

そこで、ちょうど今、とんでもない情報が届いている……盗聴だけだね。」

「……………?」

この部長は本当に底が知れない。そんな部長が「とんでもない」と言うのは珍しい。「生徒会長がクエスト中に行方不明だ。君はこれを報道するかい?」

…

…

…

クエスト近くでの風紀委員の待機所にて虎千代と明斗が洞窟内に閉じ込められたこと。副会長の水瀬 薫子が洞窟に再突入しようとしていると報告を聞いた風紀委員長 水無月 風子はどうでもいいとばかりに手を振った。

「水瀬薫子が洞窟に再突入ですか? 報告するよーなことじゃねーですよ。」

「し、しかしすでにクエスト進行の権限は精鋭部隊に移ったわけで…

緊急時に執行部の裁定を無視するのは校則違反です!」

それに食いつくのは風紀委員の中でも特に厳しいとされる氷川 紗紀。

しかしそれすらもどうでもいいと言うように風子は続ける。

「現場指揮のエレンが許可したんですから別にいいですよ。」

エレンの判断も正しいですよ。あんな石頭、受け流すくらいがいいんです。」

「い、石頭? 水瀬薫子がですか?」

「トンカチで殴っても割れませんよ。虎のこととなると頑として聞きませんし。

水瀬薫子にとって虎は神様仏様。いや、唯一神の方がちけーですかね。

とにかく、彼女には虎より優先すべきものなんかねーんですよ。」

「……ええと、それはいつたい……」

副会長の水瀬 薫子はカリスマはあつてもどこか抜けている生徒会長の武田虎千代を補佐し支えるためあらゆる事柄を完璧にこなす超人のような印象を持たせるのだ。

「虎の命令であれば人も殺す……ま、そんなシチュエーションはねーですけどね。

極端に言えばそんなところです。法律も校則も、彼女には障害足りえねーです。」

「そ、そんな人が副会長を……？ なぜ今まで放置していたのですか……！」

「虎の下にいる限り安全です。虎は極端な理想主義者ですからね。」

虎が道を誤らないかぎり、有能な副会長で居続けるでしょー。

さて……ここで問題がありましたね。精鋭部隊に連絡しなきゃいけません。」

「あ、で、ではデバイスを……しかし、なにを……水瀬薫子ですか……？」

「慌てて助けに行くくらいなんで、事態はちよいと深刻です。万が一、虎が……」

自分の命よりも大事な相手が死んだら……そのとき、彼女はもうどうすると思いますか？」

「……ま、まさか……」

「そのまさかですよ。自殺しないよう、要監視です。」

水瀬薫子は仮にも副会長。会長になにかあったら、仕事はしてもらわねーと。」

∴
∴
∴

轟音と共に岩盤が崩落し先行していた俺と会長を残し分断されてしまった。

「∴揺れはおさまったようだな。だが∴脆い洞窟のようだ。退路がふさがれた。

魔法で掘ることはできるが、どこまで埋まっているかわからん。

他の生徒は心配だが、土砂をどうかしようとするのはやめた方がいい。

お前の魔力が膨大なのは知っているが、永遠に尽きないわけでもないだろう。」

最近ほぼ無限ってことが判明しました。

たぶん会長がどれだけ絞り尽くそうとしても無理だとは思うけど∴

「ここはおとなしく先に進もう。運が良ければ合流できるだろう。

念のため、現状を確認するぞ。」

「お願いします。」

「今回の討伐対象は不明。洞窟の奥にいるなにかのだ。

霧から生まれたには違いないが∴どれほどの強さかもわからん。

ゆえに最少の人数で最大の力を発揮できるメンバーが選抜された。

だが、おそらくその魔物の影響だが…地震が起き、洞窟が崩れ…

少なくともアタシたちと他のメンバーが離れ離れになった。

最悪なのは今の崩落で死傷者が出ていることだが…今は確認できん。

みんなを信じるしかない。行くぞ。」

そう言うのと会長は前へと歩を進める。

洞窟内は広く大小様々な岩がありその中より魔物が現れる。タイコンデロガはまだ現れないが代わりに現れた取り巻きの魔物は今までのものとは雰囲気が違う。明らかに今までのものより強力なことが窺える。

だがやるしかない。

会長も歩を緩めることなく進む。

そこに魔物が襲いかかるが会長はそれに対し柔道を応用したであろう業で難なく撃退する。

身体強化魔法により身体能力を底上げして拳に自然魔法によるエンチャントを施しているのか。あれだけの魔物を一撃で屠るとは…

こちらにも負けていられない。漏れた敵くらいは自分で処理しないとな。

鱗を持つ大型のトカゲのような魔物に対してノコギリ鉋を振るうが鱗に弾かれてまともに通らなかつた。

何度か試してみるが残念ながら全く、という訳ではないだろうがほとんど効いていないように思える。

仕方ない。敢えて近づき噛みつきを誘発させる。口の中には鱗はない、つまりは攻撃が通りやすいということだ。開かれた口へと連装銃を向け発砲する。流石に魔物もこれには耐えきれなかったようで霧散する。

敢えて一匹だけこちらに残したのだろう。残りの魔物を倒し終えた会長はこちらに振り向く。

「ザコ相手なら心配するな。だてに生徒会長はやつていない。

問題は討伐対象だが……まあ、相手が魔物である限りどうにかなる。」

流石は生徒会長ということか。学園で最強というなら武田虎千代……この人において他に居ないだろう。確かにアイラとチトセは魔法のセンスにおいては生徒会長をも上回っている。しかしあの二人が異常なだけで生徒会長の魔法のセンスはトップレベルだ。その上で近接戦闘適性も高い。状況対応力が桁外れだな。

「どれほど強くとも、全ての魔物には対処法がある。

魔法が効かない魔物はいないからな。今のところ、という条件付きだが。

ヤツらは霧でできているが、形を伴ったものの特性を得る。

目があるのならば潰せば見えなくなり、耳を潰せば音が聞こえなくなるんだ。どうだ？ 【魔物】であること以外が不明でも、恐ろしくなくなるだろう。

全ては敵を知ることからだ。アタシは今までずっとそうしてきたよ。

生徒会長選挙のときも：そして、これからもだ。

気を抜くなっ！ 戦闘準備だ！

それだけ言うとう新たに来た魔物の群れに突っ込み次々と消滅させていく。

会長からのありがたい助言だ。利用させてもらおうとしよう。

一体の魔物が俺に対して爪による引つ掻き攻撃をしてくるがそれは後ろに跳ぶことで避ける。

まずは相手の視界を潰す。

マントの裏に仕込んだナイフを手に攻撃を外した魔物の内側に一気に駆け寄り眼に突き刺す。

痛みと視界がなくなったことによる混乱からか左右の爪や尻尾を乱雑に振り回していたのを攻撃の範囲外へ退避しながら見つめる。次は攻撃手段を潰すか。

大きな身体の下に入り込み鱗が比較的薄い間接部を攻撃していく。今度は鱗に少し阻まれて手応えは硬かったが完全に効かないほどでもなくノコギリ状の刃は魔物の肉へと食い込む。ノコギリ状の武器の利点は刃の返しにより肉を抉ることにより出血を

強いる…ことは霧の魔物なのでできないが魔物自体の再生を阻害する効果は高い。

右の腕と足の間接をノコギリ鉋で斬り立てなくなつた魔物に対し更に左側も間接部を斬つて動けなくする。

こいつにはいろいろと試させてもらおう。

まずは鉋モードに切り替えたノコギリ鉋を思い切り振りかぶり鱗の厚いところに叩きつけてみる。しかしその刃は鱗に阻まれて必殺となることはなかった。至近距離からの散弾銃や連装銃は鱗を破壊しながらも一撃で内部まで破壊できるほどではなかったが何発か撃てば鱗側からでも撃破出来そうだ。

と言つても水銀弾は俺自身の血を使う製作法故に生産性は劣悪だ、無難に近接武器で鱗の薄い場所を狙うしかないな。

よし、こいつも用済みだな。

今回の魔物については大体分かった。弱りきつた魔物にトドメを刺すべく一番鱗の薄い腹に鉋モードで刃を刺し、腹から胸にかけて斬り上げて消滅させる。

殺し方は覚えた。囲まれれば対処しきれないけど少数相手なら問題ない。

…
…
…

「入るわ。」

「あら…いらつしやい。私しかいないけど、いいかしら？」

生徒会室に残っていたチトセの前に穴戸結希が現れた。

「あなたしかいない」から来たの。聞きたいことがあって。」

「答えられることならいいけれど…」

「…あなた、崩落の発生前にそれを神宮寺さんに伝えたそうね。」

「…それに答えればいいのかしら。」

「いいえ。神宮寺さんから聞いた後に連絡を受けたから、それは間違いない。

聞きたいのは、あなたがどうしてそれを知っていたのか。

「崩落が起こる前に、なぜそれを知っていたのか。」

「女のカンよ。」

はぐらかすようにチトセは言う。もちろん嘘だ。

「予知の魔法が使えるのなら、すぐに教えて。でないと…」

「科研の怖い人たちに攫われちゃう？」

「…そうよ。科研の科学者は、あなたの引き渡しを要求してくる。」

「私が予知を使って…危険も顧みずに会長の身に起こる崩落を伝えて…」

すばらしい自己犠牲ね。」

「はぐらかすのはやめてほしい。世界に3人しかいない【予知】の魔法使い：

あなたも使えるとすると、4人になるわ。人類にとつて重要なこと。」

「仮に予知を使えたとして、私なら大丈夫よ。科研の人たち、追いつからずから。」

あなたには私の心配より、もつと大事なことがあるでしょう？」

事実としてこの少女は科研が本気で襲つてきたとしてもそれを追いつくだけの力がある。

ならば今心配すべきはチトセ自身の身の安全ではない。

「……………」

「転校生君と一緒だから、会長が死ぬことはないわ。」

そう…転校生君がいるからね。」

…

…

「あれはドラゴンだ。長いこと空想の生き物だったが、もはや違う。」

ドラゴン種の魔物はかなりの数が確認されている。多くは討伐されたがな。

不思議だとは思わないか。実在しない想像の幻獣を魔物はどうやって知った？」

魔物は人間の空想上の生き物の形を取ることがあるがなぜ魔物はそれになることが

出来るのか、そのプロセスは今をもって判明していない。可能性としては霧が取り込んだ人間の頭の中を覗いた、か？

「実態化するまでは意思すら持たない、知能においては獣以下の怪物がだぞ。

わからないんだ。意味不明な相手はみんな怖い。」

だか、と会長は続ける

「アタシは対処法を知っている。ならば戦うのに恐れはないだろう。

他の誰が怖がっても、アタシは最後まで勇敢であり続けたいと願う。

アタシは生徒会長だからな。それにふさわしくあろう。」

「野薔薇と似てるな」

「…なるほど、野薔薇に似ているという印象をもたれるのも不思議ではない。

だがヤツとアタシには決定的に違うところがある。わかるか？

…では、答えはドラゴン退治の後だ。」

そう言うのと大型のドラゴンの魔物へと向き小型のドラゴンを蹴散らしながらそちらへ向かう。

俺も引き続き小型のドラゴンを倒していく。

1体目のドラゴンの嘴みつきをその牙が俺の身に食らいつくより先に連装銃で撃ち抜く。続けて迫る小型ドラゴンの左右の爪を使った連撃を身を屈めることで避け逆に

ノコギリ鉋で連撃を入れる。消滅はしなかったがそのまま胴の下をくぐり抜けてからその背中へと蹴りを入れ、俺の後ろから尻尾で叩きつけようとしていた小型ドラゴンの攻撃の盾代わりにする。スローイングナイフを構え、首だけでこちらを見ていたドラゴンの眼にナイフを投げ刺す。着地したところで先ほど盾代わりにしたドラゴンがこちらに噛みつきこうとしていた。銃は取り出すのが間に合わないので顎を蹴り上げてから散弾銃を取り出す。喉元に散弾銃を押し付け発砲しその身体を霧散させる。最後の一体もすでに眼を潰していたため抵抗させるまでもなく、ほどなくして霧になって消えた。

「野薔薇は野薔薇の家に生まれた。だが私は違う。」

それだけだ。ヤツは強くなることを運命づけられていたが、私は自分で選んだ。

ただ一人、武田虎千代として強くなるのだ。

この学園の生徒たちを守るためにな。

…だが、協力してくれるものは多い。それは喜ばしいことだ。

お前は転校してきたばかりだが…

もし学園をさらによくしたいと思うのなら、手を貸してくれ。」

会長の…武田虎千代の強さは血に依るものではない。野薔薇のように血より来る責任から強くなったわけではない。自ら強くなろうと決心した…意思による強さであり

力だ。

武田虎千代という光は人を寄せる。まるで太陽のような人だ…

そんなことを考えていた俺の前に1体の大型のドラゴンが現れる。さきほどのものより大きい個体。これがタイコンデロガ級か…

「さあ、あと少しだ。運よくアタシたちの前に魔物が現れた。

他のものと合流する必要もあるまい。このままカタをつけよう。

あそこだ。援護を頼む。」

会長に魔力を渡し俺もタイコンデロガ級ドラゴンと会長の戦いを見守る。もちろん何もしないわけではない小型のドラゴンが俺の方に向かって来るのでそれを撃退していく。

会長といえどタイコンデロガの腕による叩きつけを避けたから即座に反撃し俺なら当たれば即死は確実であろう爪を身体強化と雷の自然魔法により強化した攻撃でへし折つていき、噛みつきか、それとも火炎でも吐くためか開いた口をアツパーで即座に打ち上げ鼻つ柱に拳で作ったハンマーを打ち付ける。

まだ止まらないとばかりにタイコンデロガの顔面はと拳による連撃浴びせ、自然魔法でさらに怯ませていく。トドメとばかりに両手を開くと暗いはずの洞窟で眩しくなるほどの光を放った。それはタイコンデロガの身体を貫き確かにその身体を消滅させる

に至った。

「…うむ。やはり魔物だ。あのような巨体が霧散するなど、他では考えられん。

よし、と言いたいところだが、アタシたちにはまだ仕事が残っている。

クエストは原則、受けた全員で報告せねばならんからな。

他の生徒を探し、無事を確認。その後脱出路を探すぞ。

…おい、転校生。

一度組んだだけだが、確かにお前の魔力は心強い。

後ろからの注意掛けも危なげない。助かったぞ。

興味が出たらで構わん。この虎千代とともに学園の守護者になりたいのなら…

その時は、いつでも声をかけろ。アタシはそれに応えるぞ。」「

「考えときます」

あとはどうやってここ出るか、だよな…

…

…

洞窟を出たのは次の日だった。俺たちが洞窟の出口を探している間に魔物が大量発生し学園に残っていたアイラとチトセ、そしてどこからともなく現れた生天目先輩が対応に向かった。

国軍も動いた。魔法学園の生徒にも臨戦態勢が敷かれた。

精鋭部隊が、風紀委員が、会長の戻った生徒会も即座に対応に当たり始める。もちろん俺もだ。

そしてここに第7次侵攻が始まるのだった。

第7次侵攻（前編）

クエストから戻ったあと他の生徒会メンバーの計らいで半日ほど寝ていた虎千代は起きてからの侵攻の状況を聞くと血相を変えてある人物を探していた。

「兎ノ助、兎ノ助！　ここにいたか！」

「ああ、いるぜ。わかってるよ、第7次侵攻だろ？」

「伝わっていたか…未明に全世界で大規模な魔物の発生が確認された。」

一番近いのは小鯛山だ。風飛を目標して南下してきている。」

「小鯛山から南下か。風飛を通って東京に向かっているのか？」

「ヤツらに東京を目標しているという自覚があるかはわからないが、そうだ。」

国軍が風飛の北西に展開するのが1時間後。いちおう、魔物の到来には間に合う。」

魔物には知性がない、だから何を目標しているかは誰も分からない。しかし魔物の群れの侵攻方向には確かに日本の首都たる東京が控えていた。

そしてその道中にはグリモア学園の近くの街、風飛も含まれている。

「学園への要請は？」

「全員出動だ。」

そして今回の侵攻では学園生には本来出動はかからない予定だった。国軍は以前の侵攻よりも力を増し第6次侵攻程度の魔物の発生量ならば確実に勝てると踏んでいた。だからこそ虎千代もしも要請が来ても東雲アイラや朱鷺坂チトセ、生天目つかさに自分という魔法使いとしてもトップレベルにある自分たちくらいだと思っていた。確かに最悪の：今回のケースに備え第7次侵攻のための準備は行つたが杞憂に終わるものとばかり思っていた。

「は!? 全員つてお前、今回は出動すらない可能性があつたんじやないのか？」
そしてそれは執行部である兎ノ助にとつても驚くべきことである。

「事前の予想以上に魔物の数が多い。」

「警戒態勢で小鯛山からの避難は迅速だが、それでも被害が出ている。」

「うーむ、学園からそんなに離れてないことが救いか。」

「進路上に風飛があるのは不幸中の幸いだ。他の街なら被害はもっと拡大する。」

風飛は土地柄的にも侵攻前は特に魔物が発生しやすいため魔物の対処に慣れている。魔法学園が近くにあり、交流も盛んなため魔法使いに理解があるのも自分達の行動にプラスになる。

「風飛は歴史的に魔物の対応に慣れている地域だからな。」

生徒たちも学園のバックアップの元戦えるし…だが、量が多い？

なんか嫌な予感がするな…俺はいつも通りでいいのか？」

「ああ、お前は3回の大規模侵攻を経験している。

学園生は不安がつているだろう。勇気づけてやってくれ。」

「俺、多分第3次の時に死んでるから、それ含めると4回だな。」

「それは言うなよ。」

兎ノ助は記録上第3次侵攻の際に死んでいる。今はどういう理屈か機械の身体で生き延びている。そのため侵攻の経験数は誰よりも多い。

「わーってるって。魔法が使えない今、俺にできるのはそれくらいだ。

いざとなつたらこの身を盾にして、魔物の攻撃を受け止めてやらあ。」

「ああ、頼んだ…アタシはすぐに学園生に通達する。

アタシたちができるのは風飛の防衛だ。全世界を守ることはできない…

だからだからこそ、必ず風飛を守り通す。」

「お前、自分が強いからって油断するんじゃないやねえぞ。体調もまだ悪いだろ？」

「アタシは武田虎千代だぞ。学園を代表する、生徒会長だ。

学園生は全員守る。見ていろ。」

…

生徒会長としての侵攻における最初の責任を果たすべく報道部に手伝ってもらい校内へと放送を開始する。

「生徒諸君！ 生徒会会長の武田虎千代だ。

今朝のニュースで知った生徒もいるだろうが、ここから北西の小鯛山で……大規模な魔物の発生が確認された。時刻は午前2時。規模は通常の42倍。大規模侵攻の発生だ。国連軍はこれを第7次侵攻と命名した。

そして、政府の要請でこの学園からも生徒が出動することになった。

国軍は日本各地、国連軍、IMFはすでに世界各地に展開し戦っている。

42倍だ。これは過去の侵攻に比べても多い。過去最大の規模と言える。

だが、我々人類の戦力も9年前とは比較にならない！

私立グリモワール魔法学園もまた、9年前とは比較にならない！

虎千代が宣言する！ この防衛戦では誰も死なせない！

そして風飛の街は、一歩たりとも魔物に侵させない！

ここで魔物を退け、北海道奪還の……人類反撃の嚆矢とするぞ！

各自、割り振りに従い10人規模のパーティを作り出発！

風飛市の北に陣取り防衛戦を敷く！

これほどの規模の作戦は各人初めてだろうが、怖じることはない。指示に従い、持てる力をじゆうぶんに発揮すればなにも心配はない！

なにかあればアタシを呼べ。すぐに駆けつける！」

：

：

クエストから帰って来たばかりだが運の悪い：

しかしまあ、俺よりも会長の方が疲れているはずだ。そんな彼女が頑張っているのに俺が頑張らない道理もない。

俺の今回の侵攻での役目はいつもと変わらず魔力の供給だ。いつもと違うことといえば戦場が広大な範囲であることといつもは大体ツーマンセルだが今回は精鋭部隊の隊長であるエレンと守谷の率いる1部隊が護衛であるということだ。といつても部隊活動がメインであるためエレンと守谷：月詠は俺たちと別行動をとる場合もあるためいつも通りツーマンセルも居るんだが：

目の前の少女。黒いおかつぱの髪型で一部だけ脱色したように緑色の戦闘服がアメリカンヒーローのような彼女がそれなんだが：

「よろしくお願ひします、 円野真理佳です！ 先日転校してきました！

噂の転校生さんについて行動するようにとのことなので、一緒に行きましょう！

センパイの体質のことは知ってます。魔物は僕に任せてください！」

「渡 明斗だ。よろしく」

「アンタ、エライ元気ね…最初っからそんなだとバテるわよ？」

月詠は真理佳に警告であろう言葉を投げ掛ける。

「魔法使いに覚醒したときのために、毎日トレーニングしていました！」

体力には自信あるので、心配はいりません！」

「ふうん…ん？ 転校してきたの、この前？ クエストには出たことある？」

「今回が初めてです！」

マジかよ。俺、自分でちゃんと自衛しないとな。

俺は右手にノコギリ鉋、左腰には連装銃のホルスターと落葉を提げ、後ろ腰には散弾銃。もちろんマントやコートの内側には投げナイフを多数仕込んであるという機動力を損なわない程度の重装備だ。右腰のポーチには携帯食料や飲料、そして侵攻に際し時間のない中急遽製作した武器に自然魔法を纏わせるエンチャントアイテムである発火ヤスリと雷光ヤスリをそれぞれ3個ほど入れてある。

「……………ああ、明斗、アンタたちはいろんなパーティの助っ人だつて。

魔物が多い所に行って、魔力を渡したり状況を目で把握したり…

魔物と正面からぶつかることは少ないけど、注意しなさいよ。」

真理佳の即答に絶句していた月詠だが思い出したように俺に今回の役割を説明してくる。と言つても俺は自分の役割を自覚しているしどちらかといえば真理佳に対しての説明だろう。

「ふむふむ…：注意しなきゃ、と。」

「アンタと護衛の生徒！　そしてパーティの司令官はアンタなんだからね。」

矛盾してるようだけど、護衛の生徒がケガしたらアンタのミスだと思いなさい！」

「司令官はセンパイ…：メモメモ…」

「な、なんかやりにくいわね…：とにかく！」

わかったわね!?　あと、直接の戦闘は控えること、アンタは貴重な戦力なの！

大ケガなんかしたら承知しないんだから！　そこんとこ覚悟しなさいよ！」

「分かってる。俺がちやんと魔力供給していけば全体的な怪我人は減る。無用な犠牲者も出ないしな。自衛以外の戦闘は控える。」

：

：

侵攻に対する前線指揮所にて虎千代は副会長の薫子と状況を見ていた。

「会長。国軍と魔物との戦闘が始まりました。まだ時間があります。」

まだ疲れが残っているでしょうし、今のうちに休まれては…」
「半日寝たんだ。これ以上は甘えられん。」

ほとんどの生徒は初めての実戦だ。怖くないはずがない。

そういつたとき、アタシの姿を見て安心してくれるだけでも違うからな。」

「そうは言っても、せめてもう少し下がってもよろしいのでは。」

虎千代はタイコンデログ級とその配下の魔物を倒してきたばかりなのだ。いくら渡明斗の魔力譲渡があつたとはいえ半日程度で回復するはずもない。副会長としてはせめて丸一日は最低限休んでほしいという思惑もあつた。

「薰子。アタシは生徒会長だ。その役目を全うするだけの体力はある。」

心配してくれるのは嬉しいが、それ以上はアタシを不機嫌にするぞ。」

「……はい、申し訳ありません。控えます。」

「さあ…国軍は上位の魔物は何としてでも食い止めると言っていた。」

少なくとも最初はみんなに任せて大丈夫だろう。東雲やつかさもいるしな。」

「グリモアの戦力はここ数年でもっとも高いでしょう。」

まるでこの侵攻に備え、誰かが集めたかのようにですね。」

グリモア学園は他の国の魔法学校と比べても異様なほど優秀な魔法使いが集まっている。虎千代やつかさ、アイラやチトセといったトップレベルだけでない。例えば精鋭

部隊。エレンやメアリーといった元軍人による育成によつて国軍の作戦行動にも合わせられるような精強な部隊となつている。例えば風紀委員。精鋭部隊の中では連携に難があるとは言え単純な魔法の腕だけで言えば上位に入る来栖 焔。それと互角の勝負をできる冬樹イヴや神風神社の魔法剣術を修得している神風 怜など戦闘面でも優秀な生徒が揃つておりさらにそれらを率いる水無月 風子は虎千代が卒業したあとのグリモアを引つ張つていけるだけのカリスマと戦闘力を持つている。

他にも教会から送られていけるだけのシャルロット・ディオールや天文部にいる立華 卯衣など強力な力を持つ生徒が多い。

そして渡 明斗。底知れぬ魔力量、そしてその魔力を他人に譲渡できる能力。技術的には発展途上だが変形する特殊な武器と古式銃を用いた戦闘スタイルは魔物と戦い始めた期間も含めて異様なペースでの成長といえる。特にあの古式銃は異常だ。最新の対魔物用の銃火器ですら魔物を倒すには十数発必要だというのにそれを当たりどころ次第で1発で消滅に追い込んでいける。対抗戦ではエレンにしごかれたからか戦術レベルの指揮もできる。今年一番のダークホースだ。

「ああ、在籍生徒としてはベストだろう。特に今年来たのが大きい。

来年はアタシもつかさも、遊佐も雪白もないからな。」

「……………そうですね。」

…
…
…

国軍と魔物が激突してからいくらか経った後、国軍の部隊は弱い魔物だけ敢えて突破させていった。そしてそういう弱い魔物はその後ろに控えていた新米の国軍部隊や学園側の派出した精鋭部隊などが駆逐していた。これには前衛部隊が体力を温存するという長期の活動を見越した作戦である。

いくら実戦形式で鍛えられた精鋭部隊であろうとも本当の実戦は過半以上が初めてであるため俺のところにもある程度が漏れるのは仕方のないことだ。そのための直衛なのだが：真理佳は目の前の魔物に集中し過ぎてたまに突出するため必然的に俺自身が自衛をする機会も多い。真理佳は魔法使いに覚醒して日も浅いため使用する魔法も消費の激しいものが大半である。そして目の前に現れた魔物は絶対に逃がさんとはかりに追いかける。周りに味方がいるのだから任せてもいいだろうに…

戦闘が始まって数時間しようやく周りの魔物を一掃した。
「ハア、ハア…つ、疲れた…」

呼吸を乱しながら真理佳が呟く。

「どうした、まだ緒戦が終わっただけだぞ…ああ、新入生だったな。」

充分に訓練を積むまでは実戦で無理をするな。お前の仕事は渡を守ること。渡に魔物を近づけなければいい。倒す必要はない。」

エレンが真理佳を見ながらアドバイスをしていく、が

「ハア…ハア…で、でも魔物は全部倒さなきゃ…」

コズミックシューターは、対峙した魔物を逃がしたことがないんです…！」

「覚醒したばかりの自分とヒーローを比べるな。馬鹿のすることだ。」

コズミックシューターとはアメリカの魔法使い集団のヒーローに属している現在の魔法使いで最強の存在である。

しかし、さすがに魔法使い最強でもいきなりの戦闘が侵攻でここまでの無理はせんと思いが…

「なっ…ぼ、僕はヒーローを目指してるんです！」

「1日も早くヒーローになるためには、多少の無理なんか苦じゃありません！」
それにしてもこやつまさか…

「今は作戦行動中だ。渡、お前が言っておけ。」

「この戦いが終わったら、私がマンツーマンでしごいてやろう。」

合掌

「…でも、覚醒したばかりの僕だって、魔物を倒せてるんだ…！」

「そうですよね、センパイ!？」

「お、おう。魔物は倒せてるな……うん」

俺の護衛は出来てないけどな。なんなら真理佳が気づいたなかった魔物何体かこつちで倒したし。

「アンタ、明斗を困らせるような話の振り方しないの。」

「も、守谷センパイ……」

俺たちの会話を聞いていてもたつてもいられなくなったのか月詠が来た。率直に言つて助かる。

「エレンはああ言つたけどね、ツクは言つてやるわよ。」

アンタ、今日だけで終わりだなんて思つてないわよね?。」

「え……………?。」

月詠の発した言葉に理解できないとばかりに真理佳が呆ける。

やっぱり分かつてなかったか。

「魔物の攻撃は明日も、明後日も…一週間くらい続くかもしれないの。」

いつ終わるかわからないのに、初日からそんなへバツててもつと思う?。」

「あ……………う……………」

月詠の口撃に真理佳は何も言えなくなっていた。

「明斗！　こーゆーのはアンタが言ってあげないとダメじゃない！」

そして俺にも飛び火した

「うん…いや、すまん」

「ま、ツクの方が優秀だから？　しょうがないけどね。」

ま、さっきの戦いでこの辺の魔物は一掃できたし、しばらく休憩ね。

アンタ達も今のうちに休んでおきなさい。特に明斗。アンタよ、アンタ。

武田虎千代と一緒に2日も冷えた洞窟にいたんだから、風邪ひくわよ？」

「心配してくれるのか。ありがとう」

そう返しながら頭を撫でてやる。

態度が無駄に大きいだけで基本的に良い娘なんだよな月詠。ほんとその態度の大きさが少しは胸か身長に回るべきだと思うときが多々あるけど。ま、これはこれだからかい甲斐があるというものだ。

「馬鹿にすんな！」

速攻で叩き落とされた。

「うわあ…：センパイの心配までできるなんて、凄いなあ…」

真理佳はそんなことを呟いている。

「しっ、心配!？」

ギョツとするよな顔で真理佳の方に振り向く月詠。

「やっぱり戦い慣れてる人って凄いですね！ よーし、こうしちやいられない！

僕も頑張つて、一人前のヒーローにならないと！」

「ちよつと待ちなさいよ！ し、心配なんてしてないわよ、心配なんて！」

「弱つてるセンパイの心配をしてない…これが心の通じ合つた信頼ですね！」

さあ。面白くなつて参りました。真理佳さんの天然爛りが月詠に殺到する！

「信頼!!？ ち、ちがつ…！」

月詠さんは狼狽しておりますね〜

「僕だつて負けませんよ！ 仲間たちとの信頼関係を築いて見せます！」

「違つてば！ ツクはこいつのことなんてなんとも…！」

「みんなにも教えてあげないと…！」

とうとうただの公開処刑となつております。でも面白くなりそうだから止めない。

「な、なに言い出すのよ！ 明斗、アンタ、早く止めてよ！」

「だが断る」

真理佳、とまるんじゃねーぞ…

「うーっ！ 最近の転校生、変わり者が多すぎよ…！」

侵攻終わったら風紀委員に捕まるのも覚悟しとこう…

∴
∴
∴

「∴フン、所詮は国軍に見逃された雑魚か。他愛もない∴」

生天目つかさは割り振られた地域の魔物を一人で掃した。しかし、国軍に見逃された程度の魔物では彼女の闘争の飢えを満たせるはずもない。最前線の方に足を向けた途端後ろから声がかかる。

「あーっ！ ダメツスよ生天目先輩！ 最前線に行ったりしちやダメツス！」

手も頭も全力で振り必死につかさを止めようとする服部梓であるが

「まだなにも言っていない。間違っではないがな。」

「絶対にそうなるからって、自分が先輩の静止役なんツスよ！」

そんなのできるわけないし怖いし、でも自分の評価下がったらマズインツス！

「ここは自分に免じて！ どうかどうか、ここで魔物を迎えうってください！」

「黙れ。」

「いいや、生天目先輩も戦力に勘定され∴ん？」

必死につかさを説得していたが空気が変わった。何かが来たことを梓もここに来て

把握し周囲の状況を確認する。

「来るぞ。雑魚ではない。」

「…姿かたちは似たようなのツスけど…ゲツ。なんすかあの顔…」

先ほどもでの魔物、名称「ガロトン」は体長数メートル巨人のような魔物で顎のような部分が異様に伸びているのが特徴であったが目や鼻、口の配置は人間に酷似していた。しかし、今度来た魔物はその配置が上下逆になっておりまるで頭を180度回転させたかのような。言うならば「ガロトン亜種」といったところだろうか。

「ただの色違いというわけではなさそうだな…ククク…」

「あの顔、そんなに笑えますか？」

「下がっている、服部！ 私の獲物だ！ 2体いる…他を近寄らせるなよ！」

そう梓に言うときかきはガロトン亜種の元へ向かっていく

「あつはいい。見てるツス。」

「……ん？ あ、ヤバ。」

「おーおー、やってんじやねえか。あれがガロトン亜種か。」

キメえツラしやがって。そのエラだか耳だか、キレーに削ってやるよ。」

そんな戦場にやって来たのはエレンとは別行動をしていたメアリーの率いる精鋭部隊だ。

「……生天目が戦ってるぞ？」

焰がメアリーにそう言うがメアリーは意にも介さない。

「もう一体来てやがる。アレはアタイらのもんだ。」

テメーら、ハマすんじゃないぞ！ アタイの言うとおりによりや楽勝だ！

Fuck him up, girls！ ケツ蹴つ飛ばしてやりな！」

メアリーはつかさが戦っているのは別のガロトン亜種に目星をつけ精鋭部隊を率いて突撃していく。

戦闘はすぐに終わった。しかし問題はここからだった。

「ひとの闘争の邪魔をしたな。どういう見だ。」

つかさが精鋭部隊の方を向き怒りを顕わにしながら言い放つ。

「ああ？ 知らねーよ。ンなの。魔物がいたからぶつ殺したただけだ。わりーか。」

メアリーはそれがどうしたと言わんばかりに言い返す。

「ど、どうしよ……」

梓は青ざめた表情でつかさとメアリーの顔を交互に見ていた。

「なんだよ。脇からかすめ取られて悔しかったのか？」

今度からは名前でも書いときな。」

ここにきてメアリーはつかさを挑発するような発言をする。

「ま、まあまあお、2人とも。まだ魔物はいっぱいいるんですから、なにも今…」

「貴様、どうやら私の邪魔をしたいようだな。いいだろう。」

ヤル気スイツチの入ってしまったつかさと

「ハツハ！ 凄んで怖がると思つたら大きな勘違いだぜ！」

いまだに挑発的態度を繰り返すメアリーに梓の胃は限界を迎えそうになっていた。

「同じような魔物ばかりで飽きていたところだ。貴様の血で渴きを癒そう。」

今にも仲間内の殺し合いが始まりそうなところで梓は視界の端に魔物の一団を発見した。

「だーっ！ 仲間割れしてる場合じゃないツスよ！ ホラ、来た来た！」

「……ちっ。」

「ケツ。次から次へと…ゴキブリみてーなヤツらだ。」

つかさは舌打ちをしながら、メアリーはそう吐き捨てながらお互い魔物に見合うのだった。

いつもは嫌いな魔物にも今回ばかりは救われた梓であった。

第7次侵攻（後編）

侵攻が始まってから3日が経った。戦線は膠着状態に入り人類側は負傷者や戦死者を出しながら大規模侵攻を耐えていた。

学園生も常にお互いを庇えるように大人数でパーティーを組み、それをローテーションさせながら戦い続けていた。

月詠や真理佳も休息のため今は学園で待機となっている。

俺は前線付近から引くわけにもいかないので休憩は多いが必要最低限でしか学園には戻らない。俺が居ることによって学園生も魔力切れで死ぬようなことはないので安心して戦えるのだからどちらかといえば魔力譲渡の能力よりは居ることによる精神安定の方が効果が高いかもしれない。

会長も会長で戦場全体の指示出しをしつつも学園生が危うくなったらすぐに駆けつけ魔物を駆逐していつているようだ。

それに生天目先輩も文句を言いつつ指定区域での戦闘を続けているらしい。

俺は現在メアリーと来栖の部隊に護衛されながらバテた学園生への魔力譲渡を行っている。ついでに押され気味な前線を押し返したりするのも仕事の内だ。

来栖はかなり戦い慣れているようで炎の魔法を使い、敵を殲滅しながらも息切れしている様子はない。ついでに俺を護衛する気も特にないように「巻き込まれたくなかったら下がってろ」とだけ言われた。たまたま魔物抜けてくるけど自衛出来る範囲なので問題ない。

「……ふうっ。まあまあか。」

なんだ渡、いたのか。」

「いたよ。魔力は？」

「魔力？　いやよ、まだ元気だ……チツ。まだ魔力は余ってるんだよ。」

チツ。メアリーのヤロウ、胸糞悪いぜ。

いっそのこと指揮がヘタクソなら一気に燃やせるんだけどよ。」

舌打ちをしすぎだし味方を燃やそうとするな。

「……これが前線で戦ってたヤツの実力……クソッ！」

メアリーは国連軍じゃ小隊長だった。まだアタシは小隊長にも届かねえのか……！

……なんだよ。なにか言いたいことあんのかよ。」

「……いや、特に」

来栖　焔ね。魔物に対しての殺意が異常に高い気がするが力を求めているのもその辺りが関係しているのだろうか？

「……あ？　おい、今なんつった。」

通信機で現状報告をしていたメアリーが不機嫌そうに通信機に聞き返している。

「……なんだ？」

そんな様子のメアリーに来栖も怪訝そうな声を上げる。

「マジか。いつだ？　あと何分でここに来る？」

…チツ。メンドクサーことになったぜ…テメーら、前線を下げるぞ！」

「はあ？　ここまで順調じゃねえか！　なんで下げる必要があるんだよ！」

「Silence！　国軍がへバリやがった。質問は後だ！」

学園生は全員迅速に戻れ！　編成替えして備えるぞ！」

「…国軍がへバった？　なにが起きてんだ？」

…

…

…

国軍が維持し続けていた前線が魔物に突破されたらしく俺も一時本部へと戻り編成替えをしている。

辺りを見回しているとアイラがいた。

アイラの元にいるのは最近転校してきた「我妻　浅梨」だ。中等部の女子の制服を身

に付けているが「男」である。本人曰く「立派な魔法少女になるのが夢」だ、そうだ。日本
本の師祖十家である「我妻」の一員であり魔法のセンスも高い。

「おい、話は本当か。妾の仕事は非戦闘員の護衛だけじゃと思っとなが…」

アイラは学園の守りを引き受けていたのか。どうりで前線で見ないはずだ。

「はい。国軍の防衛ラインが一部突破されました。」

「ばつかもん。突破に一部もなんもないわい。「突破された」だけでいい。」

「国軍は再編成後、防衛ラインを立て直すそうです。」

「その間ガンバってね、というわけか。仕方ないのう。ここはちいと、妾がやってやるわ。おい少年、妾と一緒に来い。」

「私ですか？」

あざとく首を傾げながら浅梨はアイラに聞き返している。

「聞けば、国軍が相手しとったなかにタイコンデロガがおるといいう。」

さすがに散歩部や歓談部の連中と一緒に戦うわけにはいかんからもう。」

「でもわたし、本部の防衛で…」

「そりやお主を自由にさせるとどっか行っちゃうじやろうが。」

魔力でマーキングしてやるから、来い！なあに、お主なら平気じやろ。」

一瞬アイラと目が合った気がする。とりあえず回れ右をして離脱を試みるが

「団体行動はともかく、スタミナは無尽蔵じゃ。明斗、お主も来るんじやぞ。

水瀬とエレンには許可を取っておるから心配せんでついてこい。」

ノールツクでアイラに腕を掴まれてしまい離脱は失敗。前線へと回れ右する羽目になった。

「はあ…じゃあ、遠出の準備してきます。」

浅梨も行くようだが…

「すぐそこじゃぞ…遠出ってどこに行くつもりじゃ…？」

そういうえば浅梨は極度の方向音痴だって月詠がぼやいてたな。

…

…

…

アイラと浅梨と共に突破された前線から流れてきたタイコンデロガ付きの魔物の集団を一掃して一時帰途に着いていた。魔物の集団の相手は魔力満タンのアイラと浅梨に蹴散らしていたので特筆するようなことはない。アイラと浅梨は新たに前線へ現れたタイコンデロガの出現位置が近かったためそちらの方に行った。魔力は十分だというので俺は本部へと帰還している。

!? チツ：

視界の端に魔物が見えた。複数の魔物が学園生のいる地域へ行っている。あれはまずいな。

疲れた体に鞭を打ち魔物の侵攻方向へ先行するように駆けていく。

：

：

「なによなによ！ 話が違うじゃない！」

第7次侵攻だからってキンチョーしてたら最初は弱いのはっかりで：

ちよつと安心したところに強いのが来ないでよね！ こつちの都合も考えなさい！」

そんなことを愚痴るのは夏海だ。

「な、夏海ちゃん…：気持ちにはわかるけど、それはちよつと無理じゃないかな…」

智花も疲れた様子で夏海へとツツコミを入れている。

「しかしこれまでに比べ、魔物の強さと数が明らかに増えた。

国軍はこんなにくさんの魔物を相手にしていたんだな。」

感慨深く呟くのは神凧 怜。

「うん…：わたしたちも、再来年にはここじゃなくて、もつと前にいるんだね。」

卒業すればほとんどの学園生は前線へと出ることになる。それは魔法使いとして覚

醒した以上逃れることのできない、運命と呼べるものだ。

「あー、もう疲れた！ 明斗に魔力回復してもらいたいくっ！」

「渡はずつと戦場を走り回っている。あまり無理はさせるな……」

とはいえ、私も魔力が尽きかけている。一度戻って交代した方がいいな。」

「……あとのくらい続くんだろう……」

「悪い方向に考えるな。国軍が体制を立て直せば楽になる。」

夏海、遊佐に連絡してくれ。私が殿につくから、下がろう……しまった、急げ！」

「え？」 「どうしたの？」

「3体来るぞ！ 囲まれたら勝ち目がない……！」

大型魔物が3体。そしてそれに追従する小型の魔物もいる。

「さ、3体!? 魔力があつてもそんな数……！」

……

……

クソツ。魔物が到着する方が早かったか。あそこにいるのは智花、夏海、神風か。

3人に一番近い個体へと突撃をかける。腰のポーチから発火ヤスリを取り出し落葉に触れさせる。そのまま払うように斬ると刀身に炎が纏う。そのまま引き絞るように落葉を引き渾身の突きを放つ。

反応されたか。

渾身の突きは魔物の肩へと挟り込み刀身へと纏っていた炎は突き刺した箇所を内側から焼いていく。

そのまま横に払い腕を斬り落とす。左手で落葉の変形機構を発動させ短剣を分離させる。右手の剣で魔物の足の指を斬りバランスを崩させる。合流した他の2体がカバーに入るように俺に攻撃を繰り返すが下がって避けながら3人と合流する。

「間に合ったとは言いがたいな」

「渡！」

「悪いけど魔力を渡してる余裕もなさそうだし、時間は稼ぐから今のうちに逃げて」

「…わ、私はまだ戦える。1人にさせるわけにはいかない。」

神風がそう言うが

「俺もこいつらを相手にして勝てるとは思ってない。ホントに時間を稼ぐだけだから早く行つて。俺もすぐに合流する！」

3人とも余力はないし頼みの綱の魔力譲渡も前線を維持するものがないければやっている余裕もない。とにかく俺が時間を稼いで3人には一旦逃げてもらう。そのあと俺も逃げて合流して体制建て直すのがベストだろう。

「…お前も早く来るんだぞ！」

よし。行つてくれたか。

現状を確認する。敵は大型3体と小型の複数体。

こちらは落葉もノコギリ鉋も万全の状態であり水銀弾もフルで温存してある。投げナイフはマント裏にある分しかない。

ヤスリは効果時間が切れた。しかし再使用する暇はなさそうだ。

逃げるにしてもとにかく数を減らしたいな。弱つてるやつを早急に片付けなければ。分離させていた落葉を合体させ連装銃を抜く。

後ろから襲いかかってきた小型を裏拳の要領で落葉で迎撃し消滅させながら目の前に迫るまだ元気な大型に袈裟懸けに斬る。そこからさらに横風ぎに繋げバックステップを取りながら連装銃を放つて別の個体を撃ち抜き衝撃で足止めしながら距離を離す。

さすがに体力的にもキツイな……しまッ!?

目の端に映るのは4体目の大型個体。その巨大な腕が俺を潰さんと振るわれる。

∴

∴

朱鷺坂チトセは焦っていた。

学園の防衛を担当していた彼女だが思った以上に前線が突破されている。学園生を守るために各所に現れた魔物を屠っていた彼女だが智花、夏海、怜の3人から渡が魔物

の足止めをしていることを聞きその現場へと駆けつけていた。

渡 明斗はこの世界に必要な人物だ。死なれた時の被害は…その場合の人類がどうなるのかを彼女は知っている。

怜から聞いた場所へとたどり着いたとき視界にそれは見えた。物陰から現れる魔物。突如現れたそれに対応できていない渡 明斗。そして明斗へと振るわれる魔物の豪腕。

魔法は…この距離からでは間に合わない！

渡 明斗が…人類の希望が、潰される。

：

「センスはあるな。しかし狩人としては及第点…か。」

ひとりそんなことを呟く。

渡 明斗を潰さんとして振るわれた腕は半ばから絶ち斬られ地面に落ちることもなく消滅していった。

：

渡 明斗の腕が不自然に動いた。まるでコマ送りのように右手の落葉が振るわれ魔物の腕を斬り落としていた。

「彼」は落葉を腰の鞆に納めながら独り言を呟いている。

まず服装が変わった。貴族のような、しかし確かに実戦向けに作られていた狩り装束

は、より実戦向けの黒いコートに。頭の帽子はまるで枯れた鴉の羽のような印象を受ける目深な帽子になった。口元は覆われていて明斗とは別人のような雰囲気が出ている。次に空間から突如歪曲した剣が現れ右手に収まる。背中には半分に折れた木の棒が背負われた。

「ミストファイバー……だったか。ふむ、俺の普段の狩り装束を読み取って自動的に変化したようだな。

まあ、どうだっていい。やることは変わらんからな。」

斬り落とされた腕とは逆の腕で再び魔物が攻撃してくる。それに対して彼は独特な緩急のついたステップで即座に後ろを取り手に持った曲剣で頭を落とす。

「まず一つ」

そこに大型に付随してきた小型の群れが襲いかかった。しかし「彼」はなんでもないといいように近くにいた何匹かを迎撃し左手で背中に背負った木の棒を取り出す。半分に折れていた木の棒は伸びきりそこ先端部に曲剣がはめ込まれる。そうして出来た巨大な鎌は再び襲いかかろうとする魔物たちを一撃ですべて刈り取り消滅させる。

大型も動きだしたがそれに対して「彼」は鎌を背中へと背負うように構え右手で肩の上から柄の端を、左手で左腰の方から刃の部分に近い柄を持つ。

攻防一体。この構えならばある程度距離のある敵ならば右手で振るえば遠心力の

乗った必殺の一撃となり、内側に入り込んだ敵に対しては左手で刃を引けば死角からの強襲となる。

そして魔物との距離はまだある。右手で振るわれる巨大な鎌は魔物を消滅させるギロチンとなった。

次に襲いかかる魔物に対して柄を左手でつかみながら折り畳み、右手で即座に刃を持たば変形機構が発動し再び折り畳まれた木の棒と曲剣となる。そのまま右手の曲剣斬り払い魔物の残骸に当たる気もないとばかりに独特なステップで横をすり抜ける。

大型の魔物3体と無数の小型を秒殺した「彼」はそのまま弱っていた個体に近づき曲剣を振るい足を斬り落とす。そのまま残っていた腕も斬り、それでも消滅しない魔物の頭に左手で散弾銃を押し付ける。直後に魔物の頭は弾け飛びながら霧となって消滅した。

「これで終わりか」

「あなたは何者なの？」

戦闘が終わった「彼」に対してチトセは近づきながら質問をぶつける。「彼」は味方とは限らない。いつでも魔法を使えるように「彼」の動きに注視していた。

「その質問に答える義理はないが、そうだな。強いていうなら【渡 明斗】を庇護する狩人さ。それ以上でもそれ以下でもない」

「あなたは味方なの？」

「それを俺の口から語ったところで君が信じるのか？」

「……」

「だろう。では、俺はこれで退散するでしょう」

そういつた直後に彼の体が崩れ落ちる。戦闘服が解かれ自動的に制服へと戻る。そんな彼を抱き止めながらチトセの頭の中は先ほどの「狩人」を名乗る人物で一杯だった。そしてそんな「狩人」に庇護されている「渡 明斗」とは…

…

…

気がついたら保健室のベッドの上にいた。顔を横に向けるとチトセがいる。

確か魔物から逃げる算段立ててたら横から4体目が現れたんだっけ？身体は…どこも異常なし。ということとはチトセが俺を助けてくれたんだらうか？

「あら、起きたの？大丈夫？魔物を全部倒したあと急に倒れたのよ。」

「魔物を…倒した？俺が？チトセじゃなくて？」

全く覚えがない。どういうことだ？

「覚えてないの？そう。なら、いいわ。」

そういうとチトセは保健委員に交代して部屋をあとにしてしまった。

身体に異常はない。多少疲れは出ているがこの程度なら問題ないだろう。ずっと寝ているわけにもいかないのだ。

そのあと保健委員から軽い検査などを受け許可を得た俺は再び戦場に戻った。

：

：

：

国軍の再編成も終わり前線が立て直されてから1週間ほど経った。

「智花、大丈夫か？ 無理せず、接近戦は私に任せろ。渡を守れ。」

「う、うん！ 明斗さん、少し下がりましたよ。」

近づいてきた小型を斬り伏せながら神風が智花に指示を出す。俺もまだ疲れが残っている。マトモに戦えたものではないので大人しく智花や夏海などと一緒に下がる。

「足止めなら私でもできる。その間に夏海、他の生徒と頼んだぞ。」

「オーケー！ 骨は拾ってあげるからね！」

「縁起でもないことを言うな！」

3人には俺が倒れたことは伏せてある。引きずられても困るしね。

「神風センパイ！ 僕も手伝います！」

「…なに？ ダメだ、お前は転校生の側にいる。」

真理佳の提案を神風が一蹴する。

「でも僕はまだ、あまり魔物を倒してない……」

「渡のおかげで、私たちは今も戦えるんだぞ。」

今の渡自信には戦う力がない。私たちが全力で守るんだ。

お前が命じられたのはその役目のはずだ。お前の功はそれを達成することだ。」

「……は、はい……」

ホントは俺が言わないといけないんだけどな、それ。

「わかればいい……転校生は私たちの友人なんだ。守ってやってくれ。」

「……わ、わかりました……僕の、役目……」

「ね、そんなに落ち込まないで。ヒーローを目指してるって聞いたけど……」

これから頑張って訓練して、もっと強くなってからでも遅くないよ?」

智花も見かねてフォローに入る。

「南センパイ……で、でも僕は1日も早く……!」

しかし、それでも真理佳はまだ納得がいかないようだ。

「わたしは、明斗さんにも円野さんにも大げがしてほしくないよ。」

同じグリモアのクラスメートだから。」

「!! ……せ、センパイ……」

智花の説得にようやくやくやく自らの役割に納得してくれたようだ。

「さあ、明斗さんも、こつちにどうぞ！みんなで力を合わせて…」

この戦いを乗り切りましょう！」

ドゴオ！

締めという言葉が入ると同時に近くの木をなぎ倒しながら大型が1体現れる。

「締まらねーなおい」

「せつかくのシャッターチャンスが…」

…

…

…

空が明るくなってきた。魔物を生み出す霧が減ってきたのだろう。10日、長かった戦いも終わろうとしている。背後に人の気配を感じとる。後ろにいるのは生天目つかさだ。

「……長かったな……」

「ふん、ふんぞり返っていたのでは長くも感じよう。」

私にとっては至福のひと時だったぞ。物足りんくらいだ。」

「可能な限り戦ってはいたんだがな…まあ、いい。お前がいたおかげだ。」

生徒会長として学園生に被害が出ぬよう合間を縫っては戦闘に参加していたがそれでもつかさの方が戦闘面では大きく貢献している。

「フン、おだてて何を期待しているか知らんが、無駄だ。」

「…だがこれだけの日数、これだけの魔物と戦ったのは初めてだろうか？」

私もこの前に思い知ったが、自分が考えるより、体は弱いものだ。

休め。今回を乗り切れたのだから、後8年は大丈夫だろう。」

「そうなければいいがな」

そういうとつかさは踵を返し去っていく。

代わりに来たのは薰子だ。

「…生天目つかさ、やはり常日頃、勝手に魔物討伐に出かけるだけはありませんね。」

「ああ…いつもは対抗戦かタイマンだったからわからなかったがな…」

「個人でも継戦能力は彼女がトップ…と、私が申し上げておきましょう。」

会長が仰る必要はありません。」

「いつも変なところに気を使うな…さて、私の仕事だ。ケリをつけよう。」

待ち望んだ時がようやく来た

「はい。生徒は集合させてあります。」

「疲れた体に無理をさせるな…短めにするか。いや、一言でいいな。

…第7次侵攻は終わった。勝ったぞ。」

ここに第7次侵攻は終結した。

…

…

学園の研究室で穴戸 結希はとある人物から電話を受ける。

「もしもし…あなた、どうしたの？ 半年ぶりね。」

…魔物の通り道…確かに、旧科研があつたわね…なんですって？

魔物の到着に余裕がったのはそのせい？ …わかつたわ。こつちで対処する。

なに？ …そう、完成したのね。安全装置はどうなってるの？

言つたはずよ。あなたが転校してくるのはまだ早い。

魔法を使つたときの負担は、魔法使いでないと耐えられない。

【覚醒してない】あなたが、他の生徒と一緒に戦うのは無理よ。

…好きにしないさい。忠告は何度もしたから。

研究のために命を捨てるといふなら、もう止めないわ。」

しかし、終結したからといって何も問題なく終わるとは限らないのだ。ヒトがヒトで

ある限り…

狩人の業

目が覚める。

ここは…

狩人の夢。俺はもたれ掛かっていた墓石から離れ辺りを見回す。人形や従者がいない。

工房へと足を運ぶ。いつもは開いているドアが最初に来たときと同じく閉ざされていた。

鍵は…開いているようだ。

扉を開ける。工房の奥、別の扉の近くには車椅子にもたれ掛かっている人物がいた。さらに近くには人形も控えている。

車椅子に座っている人物がこちらを向き、声をかけてくる。

「やあ、起きたかい新たな狩人」

「あなた…は？」

枯れた鳥の羽のような帽子に口元を覆う布。黒い狩装束には金の装飾品が備えられている。

まだ若い青年と言っても差し支えないだろう彼は青い瞳をこちらに向ける。

「私かい？ 私はこの工房の主だよ。そして君を狩人にしたのも私だ。」

「じゃあ、最初に寮に武器を送ってきたのも？」

「ああ、私だ。武器がないと魔物と戦うのも辛いだろう？最初に送ったノコギリ鉋は私のお古だが悪く思わないでくれよ。」

「武器や魔導書については助かつてる。ありがとう。あれがなければ魔物相手に逃げ惑うしかなかったから」

「そう言ってもらえると助かる…さて」

一旦区切ると彼は椅子を立ち近くの扉を開ける。俺に手招きをし俺の目覚めた墓石の前に立つ。

「君は狩人としてまだまだ未熟だ。君はまた気を失う。次に目覚めた先では狩人としての先人がいる。彼に狩人としての基本を学んできたまえ。」

「はっ。」

そういうと彼は俺の顔に手をかざす。

そして俺の意識は再び落ちる。

—————

「ハハハ…ハハハ…」

「目が覚めたか？」

「え？あ、はい」

目が覚めた俺の前には黒よりの青、勝色の神父服を身にまとっている。

目深に被った帽子からその容貌を窺うことは出来ない。

「工房でやつから話は聞いているな。なら、すぐに始めるぞ」

「始める、なにを？」

「なに、ここは夢だ。何があっても悪い夢のようなものだ」

そういうと彼は右手に持っていた大型の刃を持つ斧を振り上げるとこちらに振り下ろす。

「!?つぶね」

地面を転がりながらそれを避け素早く立ち上がる。

武器は…ある

腰の鞘から落葉を抜く。走りながら近づき胴を一閃する。

しかし、神父はその一閃を体を低くしながらふわりと飛ぶと刀の一閃をくくり抜けながら近づいてくる。

そこから斧を掬うようにして俺に叩きつけようとしたのを落葉を割り込ませてなんとか防ぐ。

つばぜり合いになるも元の体格とパワーが違いすぎるためすぐに俺は吹き飛ばされる。

「なぜ受け止めるようなことをした。体格を見ればお前が俺の攻撃を受けきることなど出来んとすぐに分かるはずだ。お前たちの戦っている魔物とやらも大抵は貴様らより力は上のはず。ならば防御は緊急時以外でするな。回避しろ」

彼の言うとおりだ。魔法使いは普通の人と比べれば頑丈だ。防御魔法が使えるならば防御するのもありだろう。しかし、俺はそんなものは使えない。攻撃を受け流すにも技量が足りていない。ならば回避するしかない。

神父は言うべきことは終わったとばかりに近づいてくる。右手の斧を袈裟懸けに振るう。

それを右の脇に潜り込むように避け落葉で攻撃するが神父はまたふわりと飛ぶような独特のステップで避けていく。

あれだ。あれを体得すれば…

神父がステップで目前まで距離を詰め斧を叩きつけてくる。見よう見まねでステップによる回避をするが動作が遅く飛距離も足りていない。ギリギリで避けることが出来たのは縦割りだったからだろう。袈裟斬りならば当たっていた。

もつとだ。もつと素早く、もつと軽快に…

続く斬り上げをバックステップで避ける。しかし、神父は俺が後ろに避けようとしたのを見てから斧の柄を少しひねる。すると唐突に斧の柄が伸びハルバートのような長柄となり俺に襲いかかる。

斧の分厚い刃は股から肩までを切り裂き俺の意識は闇へと落ちた。

「起きたか？」

目覚める。

「あれ？俺、死んだんじゃ」

「言っただろう。何が起きても悪い夢のようなものだ。構えろ」

即座に立ち上がり落葉を抜き神父と対峙する。

「狩りではなにか起こるかわからん。単調な回避は死を招くぞ」

さつき死んだしね

「相手の動きをよく見ろ。読みを先行させ過ぎるな。ギリギリまで引き付けてから回避しろ。行くぞ」

それだけ言うともた攻撃を仕掛けてくる。

さつきまでとは違う。こちらに攻撃させる気などないとばかりに攻めてくる。

片手斧での袈裟斬り、振り払い。それを未熟なステップでなんとか避けていく。そこ

から更に振り上げのモーションを取るがこれをただ後ろに引くだけでは先ほどの二の舞だ。だから恐怖で焦る足を踏ん張りギリギリまで引き付けてから右に避ける。

ここまでではよかった。しかし、神父はハルバート形態にした斧を溜めるように構え身体全体を使った凧ぎ払いをしてくる。前へとステップを踏み交差するように一撃目を回避するが身体を回しの二回転目で回避後の無防備な俺の背中へと刃を修正し斬り飛ばす。

クソ：ダメだったか

そのあと何回も死んだ。その度にステップに少しずつ修正を加え神父の攻撃を回避していくが神父もその度に新たな攻撃法を披露する。10も死んだ頃から散弾銃も使うようになった。そこからはさらに死んだ。死んだ数が30を超えた辺りから数えることをやめた。しかし、死ぬ度に俺は神父の動きを少しずつ学びいつの間にか回避の合間に反撃することも出来ていた。

斧の連撃を避け落葉で斬りつける。どちらの攻撃も空を斬るが構わない。神父がバックステップを踏みながら左手の散弾銃を構える。落葉を鞘に納め前へとステップを踏みながら近づき散弾銃の拡散範囲外つまり銃の内側に逃げ込む。

居合いの構えを取り一気に振り抜くがこれもやはりかわされてしまう。

「数えきれぬほどお前を殺してきたがそれもこれが最後になりそうだな」

「それでも殺すのかよ」

「ふん。狩人としての年季の差だ。お前は優秀だが、あいつには及ばない。それだけだ」

「あいつ？」

「狩人の夢で会っただろう」

「ああ。あの人が」

「正気を無くしていたとはいえ俺を殺した男だ。醜くも獣に堕ちた俺を殺してくれた。やつのでいで再び夢に囚われてはいるが恨むことはない。」

落葉の両刃剣による連続斬りさらに両刃を用いた隙の少ない突きを仕掛ける。神父はこれもすべて避けていく。右から左へと振り払う、と見せかけてから落葉を二刀流へと変形させ同時突きを放つ。これには神父も対応出来ない。神父の胸へと刃が吸い込まれる：はずだった。

神父が左手の散弾銃を撃つ。それは両手の剣をどちらとも弾き上げ俺は無防備な胴体をさらけ出す。

神父は俺の胴体へと貫手を刺しこむ。

「ここに身につけることは終わった。ではな」

それを皮切りにまた意識が落ちる。

目が覚める。ここは狩人の夢だ。いつものように墓石にもたれ掛かるように座っていた。

「くっそ。最後まで良いようにやられたか」

「おかえりなさい狩人様」

帰って来た俺を迎えるのは人形だ。

「あれ？あの人は？」

「あのお方はもうここにはいません。お出かけになられたので」

「そっか。うん。ならそろそろ向こうに戻るよ。」

「お待ち下さい。狩人様。あの子達があなた様にお渡しするものがあると……」

そう言いつつ下を見つめる人形の目線を追うと従者たちがいた。その手には何かを抱え上げられている。

「これは、武器？」

腕の手甲のような箱に小型のブレードが装備されている。なんだこれは？

「それでは狩人様。またいつでも来てくださいね。」

「いや、これなに……って、あ」

これのこと聞きたかったけど意識が落ちていく。

———
「ここ、は。俺の部屋か。日付は、侵攻が終わってから1日しか経ってないのか。本当に夢みたいだなあそこは

「ま、夢じゃないんだろうけど」

床には帰り際に貰った新たな武器もある。

「こういう時は魔導書を見てみるのが良いだろう。前と同じなら書き加えられているはずだ。」

やはりあった。この武器は…パイル…ハンマー…マジかよ。変形機構により箱のよ
うな部分…射出装置に刃を装填し打ち出す武器のようだ。

これ作ったやつ絶対HENTAIだぞ。

エミリア、クエストを放り出す

侵攻も終わり日常が戻ってきた。

学園も侵攻前のピリピリとした雰囲気は鳴りを潜め侵攻なんて昔のこのようだ。

昼間の学園内を宛てもなく歩いていた俺のところには一人の少女がやってくる。

金髪碧眼の少女、エミリア・ブルームフィールドだ。転校初日に歓談部での歓迎を受けたほかにも同時に同時期の転校（といっても向こうは交換留学だが）だったのでなにかと交流は多い。

「こんにちは！渡君」

「こんにちは。エミリア」

「渡君。第7次侵攻、お疲れ様でした。」

現役学園生にとって初めての大規模な作戦：学ぶことが多かったです。

渡君とは別の配置でしたけど、走り回っていたの、見ましたよ。

あんなに頑張ってるのを見て、私も頑張らなきゃって思ったんです。」

「俺は色々と特殊だからね。さすがに疲れたけど」

「勝ってカプトのヲを締めよ、とあやせさんから教えてもらいました。」

ですから日本のことわざにならない、油断することなく訓練するつもりです！

そうだ！ 渡君、よかつたら一緒に訓練しませんか？」

「訓練……この間夢の中で死ぬほどやりこんだな」

実際数えきれないほど死んだんだけどな。あの神父次こそは一太刀でも入れてやる。

「？イメージトレイニングでしょうか。渡君には何度か歓談部には来てもらってるけ

ど、訓練やクエストはまだですもんね。

あ、もちろん今日じゃなくて大丈夫ですよ。時間のあるときに……

……ああ、ちようどクエストですね！

明日……一緒にどうですか？」

デバイスを確認するとクエスト通知が来ていた。ちようど良いせっかく狩人の業を身に付けたのだこれを機に試してみるのもいいだろう。

「ああ、構わないぞ」

エミリアにそう返しクエスト受注へと向かった。

—————

虎千代は穴戸結希に呼ばれ彼女のラボへと足を運んだ。自動ドアが開き中へ入る。結希はすでに何かの準備を始めていた。内容は前もって聞かされているがいまだに納得のいかない虎千代は疑問を口にする。

「…今さら検査するのか？ あの後にはゆっくり休んだから、体調は万全だぞ。」

「ただの洞窟ならあれほど疲弊はしなかったわ。あなたならね。」

「……………？ なにが言いたい。」

クエストであれほどの長期行動を取ったのは虎千代でも初めてだ。だからこそクエスト後にあれまで疲れていたのだと思っていた。しかし、結希はそうでないと言う。

「【霧】が入り込んでいないか、確認する必要がある。」

「馬鹿な。制服が結界になって、霧が入り込むことはないはずだろ？」

「ええ、でもタイコンデロガを倒したでしょう。」

魔物は倒すと霧に戻る。タイコンデロガ級の霧は相当な量よ。

誤算は2つ。洞窟の入り口がふさがれ、もう片方の入り口が遠かったこと。

もう1つは、あなたがそこで一晩過ごさなければならなかったこと。」

「つまり、霧の濃さが尋常であれば、体に入り込む可能性があるのか？」

ゾツとする。霧は動物や植物の中に入ると体構造を変化させそれはやがて魔物となる。自分の身にそれが起きると思うと気が気でない。

「考えられるわ。極度の疲労は濃い霧にあてられたからなのに間違いない。」

…でも、私はあまり心配してないわ。渡君がいたから。

魔力の充実は制服よりも信頼できる結界になる。

彼のおかげで、あなたの魔力は常に最大容量だった。

だから、念のための検査。」

「待て。と言うことは渡の魔力は減っていた訳だろ？」

アタシより渡の方が危ないんじゃないか？」

「問題ないわ。彼の魔力量は桁違いよ。」

多少減ったところで、霧が入り込めるような隙にはならない。」

「…そんなにか。今さらながら、どこもアイツを欲しがるのがわかるな。」

学園最強と言われる虎千代は普通の魔法使いの数倍の魔力量を持つ。それに見合うだけの強力な魔法も扱える。その自分が全力で戦い続けたにも関わらずそれを多少だと言う。まさしく規格外の魔力量だろう。

「ええ、そうね…」

さあ、検査を開始するわ。服を脱いでちょうだい。」

そこまで言ううと天才は話は終わりだとばかりに検査へと取り掛かった。

—————

「さあ、反省会だ。」

放課後の教室でそう切り出したのは長い黒髪 of 刀剣のような風貌を持つ少女、神風怜である。

「第7次侵攻のとき、あんまり役に立たなかったもんね。

はあ…自信なくなっちゃうなあ…」

憂鬱そうに答えるのは活発そうなイメージは今鳴りを潜めている智花である。

「なーに言ってるのよ。規格外と比べてもしょうがないじゃない。」

あたしたちはあたしたちのやり方で戦えばいいの。」

智花にそう励ますのはツインテールと小柄な体躯、いつも手にカメラを持つジャーナリストの卵である夏海だ。

「その通りだ、智花。あんな風に強くなろうとしてもなれるものじゃない。

個人の力量で追い付かなければ別の手段を模索すればいい。」

そのための反省会だぞ。」

「…そうだね！ うん！」

夏海と怜の励ましを受けた智花は切り替えたように返事を返す。

「じゃ最初の議題。」

智花、あんた最近転校生と距離置いてない？」

「あ、そうだね。最近はあまり…ええっ!? きゅ、急になに言い出すの!？」

真面目に反省会が始まると思いきやいきなり関係ないことを議題に出す夏海に、危うく素直に答えそうになった智花は顔を赤くしながら夏海に質問を返す。

「いやさ、アイツが転校してきた時はすごく親密そうにしてたのに……」
やれやれと言わんばかりに首を振る夏海。

「あ、あれは私が学園を案内してあげてて……！」

「いつの間にかいち友達だもんねー。面白くないよ。」

「な、なんで夏海ちゃんが面白がるの?!」

あーだこーだと言いつつ二人に怜は收拾を付けるべく動く。

「……ゴホン。夏海。今は第7次侵攻の振り返りだ。」

マジメにやるぞ。」

怜の仕切り直しに仕方ないとばかりに夏海も真面目に反省会をするのだった。

—————

「ええい犬川のクソジジイめ！　せっかく妾が忠告してやったつてのに！」

学園長だか何だか知らんが、妾に比べたら生まれる前の赤ん坊じやろが！」

掲示板の前でそう愚痴るのは自称吸血鬼の東雲　アイラだ。

「むっ。貴様は朱鷺坂。妾になんの用じゃ。妾にはないぞ。じゃあな。」

人の気配を感じたアイラは視線の先に朱鷺坂チトセを発見するが一方的にそう告げるとその場を離れようとする。

「嫌われちゃったわねえ。」

「当たり前じゃ！　なんか知っておる風だが、言わなければ意味がないわ！」

チクチクもつたいぶっておるのは言いたいからじゃろ？　わかっておるぞ。

ホレ、言え、言つてしまえ。楽になるぞう？　」

「やっぱりあなた、察しがいいのね。

でも違うわ。私は「言えない」の。肝心なことは言えないまま…

でも、言わなければいけないことがある。助けなければならぬ人もいる。　」

思わせ振りの言動の多いチトセに対してアイラは我慢ならぬとばかりにそう言うが

チトセの態度が変わることはない。

「…ようわからんが、それはアレか。侵攻前のタイコンデロガ討伐のことか。

精鋭部隊に別の入り口の情報をリークしたのはお主じゃな。

崩落前、穴戸にそれを伝えたのもお主。ふふん、わかる、妾にはわかるぞ。　」

なめるなとばかりに自らの知り得る情報を開示するアイラにチトセは別の興味を持

つ。

「あら…いい情報筋を持つているのね。誰かしら…まさか遊佐鳴子？　」

「ふふーん、まあ敵の敵は味方と言うしな。多少協力してもらったわ。　」

「あなたと、遊佐さんが協力…フフフ…そういうこともあるのね。　」

プライドの高いアイラが遊佐に協力を仰いだ。普通ではあり得ることではない。し

かし、それが起こった。新たな発見をしたとばかりにチトセは笑う。

「なんじやまた訳知りか。ここまで引つ張つたんじやから、一つくらい話せ。」

「じゃあ一つ。私とあなたは知り合いよ。」

「…なんじやと？」

「あなたの秘密…【吸血鬼などではない】という秘密を知っているのは…」

あなたがアイザックのおかげで長らえているという秘密を知っているのは…

親友でもなければおかしいと思わない？」

「アイザック！ お主、そいつが何者か…知っておるな、その言い方は…」

アイザック…その名がチトセの口から出たのはアイラにとってなによりも驚くべくことであつた。

なぜならそれはアイザックが死んだ今となつてはアイラ本人しか知り得ないことだ。

「私には話してはいけないことが多すぎる。でも伝えたいことがあるの。」

「じゃからそれをはよ言えというとる！ あ！ 妾のこと信用しとらんな？」

「いいえ、信用してるわ。他の誰よりもね…だからこそ、もう少し待つて。」

今の私には、あなたたちが【生きながらえるよう】助言することしかできない。」

「生きながらえるよう…？」

な、なんじやと…！ お主、まさか…あのとときリークが無ければ…！」

「いいえ、武田虎千代は死ななかつたでしょうね。」

けれど【霧】が体内に侵入、重態で侵攻に参加できず……」

「ま、待て待て！ なにを言つとる！ そりやまるで……」

しかしチトセはまるで見てきたかのように言う。

「……お、おい、おかしいぞ！」

霧が入らなかつたのは少年がおつたからじやるが！」

アイラは混乱した。チトセの言葉は何一つとして現実に起こっていないにも関わらずあまりにも現実味に溢れていたからだ。

「ええ、そうよ。私もそれが不思議なのよ。」

私の知っている範囲では、彼は武田さんに同行しないはずだったもの。」

「お主……なんじゃ、予知の魔法使いか!?」

「ごめんなさい。言えないわ……でも私は、この学園の敵じゃない。」

今は、あなたの敵でもない……ただ、正体を明かせないだけ。」

それだけ言うとならチトセは踵を返してその場を去った。

「……ぐうつ。なんじゃアイツ……！ なにを言うておる……！」

—————

「おはようございます。渡君。」

「ん。おはよう。エミリアさん」

「今日は無理なお誘いを受けていただいてありがとうございます。」

ええと、男性のお友達が渡君だけ、というのもあるのですが…

なにより、先日のドラゴン型を倒したというお噂を伺いまして。

最近、渡君に対するみんなの評価が上がってるんですよ。

だから、引つ張りだこになる前に、是非ご一緒したくて…」

そういうこともあるのか。というかドラゴン型倒したの会長だぞ。俺は魔力譲渡と少し雑魚狩りしただけだ。言われて悪い気持ちでもないから良いんだが。

「そうなのか。ま、今日はよろしく」

「ええ、よろしくお願いします。」

それで、今回の討伐対象なんですけど、洞窟の奥にすむ…

コウモリ、のようですよ…あまり被害は出ていませんね。

私たちが転校間もないから、難度の低いクエストを、ということでしょうか。

まあ…腕試しにはちょうどいい相手、と考えましょう。」

「そうだな。でも油断はしないようにな。」

「はい。もちろんです。」

今回の武器はいつも通りノコギリ鉋と落葉…ではない。落葉は刃こぼれが酷かった

ので整備のために工房に預けてきた。銃も変形機構にガタが来はじめていたので同じく整備中である。仕方ないのでこの間夢の中で新たに渡されたHENTAI武器であるパイルハンマーを装備してきた。一応訓練はしてきたが実戦は初だから心許ないが他に武器がない以上仕方がない。その他はいつもと同じく投げナイフや散弾銃や連装銃を持ってきている。

クエストのして居場所へと着いた俺とエミリア。

コウモリ型ということで暗所から出てこないそうなので居るところも大体目星はついている。暗い場所を近い所から回っていけばそのうち討伐対処クラスも発見出来るという算段だ。

朝から来ているだけありコウモリ型の小型の魔物たちもろくに動けないようでエミリアと俺は次々と撃破していった。

「渡君の体質は伺ってましたけど、実際に体験すると凄いですね。」

魔法をどれだけ使っても全然疲れませんし、それに…

常に全力で放てる、というのが初めてのことで。

南さんの言ったやみつきになりそう、というのもわかる気がします。

…決して、変な意味ではないんですよ？

私たちの魔力は一般の人々を凌駕していますが、それでも多いとは言えません。

ですから、全力で魔法を使っているとすぐに枯渇してしまふんです。

ですが渡君から魔力を分けてもらうことで、何度でも使うことができます。

制限から解き放たれた、と言うのがいいでしょうか。

なので、みんな気持ちよく魔法を使えるんですよ、一緒にいると。」

何かの気配を感じたようにエミリアが周囲を見渡す。それに習うように俺も索敵を開始する。

「…待ってください。この気配は…」

嘘、あれは…きますっ！」

突如現れたのはまるで騎士のような外観を持つ魔物だ。鎧の隙間からは腕や足のように伸びた触手があり手にあたる部分には西洋剣を保持している。

それはこちらを確認するやいなや突撃し剣による風ぎ払いをしてくる。バックステップで避けようとするが触手が伸びることでステップ分の距離を詰め俺に襲いかかる。ギリギリでパイルハンマーのブレード部でのガードが間に合うが踏ん張りはせずわざと飛ばされることでダメージを軽減する。

騎士の魔物はそれだけすると物陰の方へと隠れてしまう。

「あれは…コウモリでは、ありませんでしたね。」

群体性の魔物も報告されていますが、コウモリは洞窟から出ませんし…

何よりあの騎士は群体などではありませんでした…

異なる魔物です。しかも人型は…私も初めて見ました。」

「俺もだな。」

「人型は珍しいんです。霧の魔物は変化にいくつか法則がありまして。

一般的に、戦闘に適した姿形を取ることが多いのです。

なので、生身ではあまり強くない人間の形は取りません。

ほとんどが獣の姿です。他にも過去に存在した異形の生物などですね。

不思議ですよ。霧の魔物は「なぜそうなのか」がほとんどわかりません。

なぜ生まれるのか、なぜ人を襲うのか。なぜ多様な形態を取るのか。

なぜ、私たちの文化圏にのみ存在する空想の生き物の姿も取れるのか。」

「考えるのは後だ」

「…うっ！ ま、またあの騎士が…！ 構えてください！」

「了解」

再び姿を現した騎士はヒット&アウェイで来るつもりなのかエミリアと俺の方へと突撃してくる。

「まずは武器から…」

パイルハンマーは変形前だと手甲に装備した片手剣のように使える。それを騎士の

突撃に合わせ攻撃をステップで避けながら剣を持つ腕のような触手にへと振るう。

しかし触手はしなるように蠢きこちらの斬撃の効果を失わせる。

同じくカウンターを狙っていたエミリアは刺剣を用いて胴へと攻撃するが鎧のせいでまともなダメージにはなっていないようだ。

「相性悪いか？」

動き的には問題ない。対応できる。夢の中で戦った神父と比べるのも烏滸がましいくらいだ。

パイルハンマーを変形させる。ブレードの大部分が射出装置に収まりこの状態だと殴るように刺突するのが主な攻撃になる。さらにブレードの射出による一撃の重さも期待できるがそのためにはある程度の溜めが必要となる。使い所を考えねばならない気難しい武器だが最大に溜めた際の一撃は目を見張るものがある。

とりあえず三度の騎士の魔物の突撃に合わせ鎧へとパイルハンマーの刃先を押し付ける。金属質の鈍い手応えが返ってきたが鎧の破壊には至っていない。

騎士の魔物も立て続けのカウンターに不利を感じたのかまた物陰へと逃げてしまう。

「あの騎士も、およそ魔物とは思えない動きです…」

まるで人間のよう。ヒット&アウェイで着実に狙ってきている…

…思考能力が発達しているようにも見えます。

魔物はあまり知能が高いとは言えませんでしたが、ここ最近…よくわからない動きを取る魔物が増えていると言います。

考え込んでいるようだったり、明らかに何かを守ろうとしていたり。」

「魔物が？」

ヒトを真似ているのか？魔物が知性を獲得すれば今まで以上の被害が出る。元のスベックが違うのだ。人間が勝っているのは知性だけ。だというのにその差さえも埋められてしまったら…

「…」存じの通り、魔物は霧が実体化して生まれるものですが…

その霧は、もちろん自然現象の霧とは別のものです。

それがどこから生まれ出るのか、やはりそれも明らかになっていません。

答えがあるとしたら、そこなのでしょうけど…

はい。もう驚いたりはしません。襲撃の間隔は把握しています！

来ます！ 今度こそ…！！」

「エミリア！相手を少しの間でいいから止めてくれ！そうすれば一撃で終わらせられる」

「はい！まかせてください！魔力を！」

「了解」

魔力讓渡開始…完了。

パイルハンマー…溜め、開始…

騎士が突撃してくる。肩まで上げた剣を突き出すがエミリアの風の魔法がその剣と俺たちの前に繰り出され剣と、騎士が止まる。

直後溜めの終わったパイルハンマーを騎士の鎧へと打ち出す。

ゴウツ！という凄まじい音と共に騎士の鎧は砕けるように吹き飛び中の触手の塊のようなものと共に霧散した。

「消えました。やはり霧の魔物でしたね…」

あ、いえ、確信はしていませんよ？

ですが人型は噂でしか聞いてなかったの…やっとな実感しました。

…これは、今日はコウモリの方は無理ですね。

いったん学園に戻り報告しましょう。突然現れた魔物と、それを討伐したこと。

コウモリのクエストは日を改めて、ですね。

私たちが受けるとは限りませんが、もしそうならお願いします。

…ありがとうございます。」

「流石に消耗しすぎたしな。本来のクエストは失敗、か。ま、仕方ないし帰ろうか」

「はい。」

「ふむ…ああ、まあ、校則違反には間違いない。」

クエスト放棄と非討伐対象との戦闘は結構な違反だからな。

2人とも初めてだから、水無月風紀委員長、お手柔らかに。」

学園に戻り今回のことを生徒会長と風紀委員長の前で報告した俺たちだが仕方ないことだが処罰が下るようだ。

「ええ。わかつてますよ。まずエミリア・ブルームフィールド。」

しばらくウチらと一緒に校門で取り締まりです。7時に登校してください。」

ルール遵守の大切さを叩きこんであげます。」

「わかりました。」

エミリアは風紀委員の手伝いか。万年人手不足って言ってたしな。ということは俺も…

「で、渡さん。あんたさんは彼女を止めなかつたんで嚴重注意です。」

氷川とセンセからみっちりお仕置きされてくだせー。

あと、2人とも「人型」について講義を受けるよーに。確かまだでしたよね？」

あれ？俺の方がきつくね？気のせい？

「すいません、今回の魔物が人型ということですが…なにが問題なのでしょう。」

確かに珍しいですが、講義を取るほどのものとは思えませんが…」
そんな俺を置いておいて話は続いていく。

待つてくれ氷川から説教とか一晩絞られるぞ俺…

「そりやそーでしょ。イギリスは人類根拠説じゃねーですか。

人間から生まれた魔物が人間に似てても不思議に思わないでしょ。

ですがグリモアは違ってますね。【武器を使う知能】を持つ魔物…

放つておくべからず、なんで。そーいう意味で、これでも減刑してるんですよ。」

「…はあ…わかりました。人型の魔物については、認識を改めます。」

「結構。郷に入つては郷に従えといいます。きちんと理由も説明しますんで。

渡さん。アンタさんもですよ。」

知恵のついた魔物なんて、そーぞーするのもイヤです。」

「それについては同感ですよ。知恵のついた魔物なんぞ狩りにくいにも程がありますし。」

といつてもif話しても仕方ないのでさっさと絞られてきますね。」

「アンタさんも潔いーですね」

氷川からの説教は本当に一晩続いた。途中で先生止めてくれなかったら日付跨いで

たと思う。あと殊更目をつけられるようになったのも追記しておく。

「予知の魔法使い、ですか」

「……………委員長。」

風紀委員の部屋で新しく入ってくる転校生の資料を見ていた風子の前に1人の少女がやってくる。

「お、来ましたね。よかったよかった。」

「私は、所属しているだけのはずですが。」

冬樹イヴ。風紀委員ではあるが委員長との契約でほとんど委員としての仕事はしていない。

「ええ、ウチもそれでいーって言ってましたがね。」

ちよいとばかし、やってもらわにやいけなくなりました。」

自らが持ちかけた契約だ。だからこそ風子はイヴが動くだけのエサを持ってきた。

「あなたもきよーみあることだと思いましてね。」

ウチと一緒に成績あげるチャンスですよ。」

愚者の檻

「お、お前ホントに行くのか？ ……転校してすぐだぞ…」

兎ノ助がそう声をかけるのはボサボサした赤毛と科学者のように……実際科学者なのだが……制服の上に白衣をまとった少女である。

彼女は如月 天（ききさらぎ そら）。魔導科学研究所……通称科研からグリモア学園へと転校してきたのは最近の話である。

「アンタが言いたいのは【魔法使いじゃないから】でしょ？

旧科研の話は知ってるわ。【部外者】に荒らされたくないよう、私が来たんだから。」

そう。彼女は【魔法使い】ではない。しかし【魔法を扱う】ことはできる。

「ああ、科研の隠ぺい体質はそのままか……自分たちで始末できねえくせに。」

兎ノ助が怒りを顕にするのは科研の隠ぺいによる苦い体験をしてきたからか
「かつて旧科研では魔物を洗脳し、人類側の兵器として運用する計画があった。

けれどももちろん失敗……魔物は暴走し、施設を放棄せざるを得なくなつた。

残されたのは【人類の兵器を装備させられた魔物だけ】……哀れね。」

「ああ、魔物とはいえ、なんか可哀想……」

「違うわよ。理解できないまま危険なものを運用しようとした哀れな科学者よ。

こんな話が外に全然漏れてないなんてありえないわ。

きつと第7次侵攻が無ければ、爆発するまで放置されてたでしょうね。」

霧の特性を理解できないままにおもいつき思いつきで魔物を利用しようとし、失敗した。自分達の尻を拭うこともせず隠し通す。どの世界の科学者も根本は同じなのだろ
う。

「研究所が密閉されていたおかげで、年数の割に強さは控えめだそうだ。

とはいえ、タイコンデロガに育ってるやつがいないとも限らない。

特にお前は慎重に行けよ。」

「余計なお世話よ。科学者の始末は科学者の私がつける。

愚かな先人の廃棄物は、このデウス・エクステルシテで焼却処分してやるわ。」

兎ノ助の忠告を聞く気もないのだろう。天は自らの背部に着けた機械を撫でながら
そっくり放つのだった。

今日もいつものことながらクエストに赴いている。メンバーは穴戸さんと新しい転
校生。料理部のメンバーの一部とに新聞部、あと後ろで縮こまっている双美 心か。

そして俺の目の前では新しい転校生と穴戸さんが話している。どう見ても立ち入れ

られる空気じゃない。蚊帳の外だ。辛い。

「久しぶりね。最後に会ったのは半年前…かしら…？」

先に切り出したのは宍戸さんだ。どうやら知り合いらしい。

「ちょうど200日よ。アンタが科研を出て行ってからね。

再開してすぐに旧科研だなんて皮肉なものね。」

「…あなたは出向扱いになってると聞いたわ。正確には学園生ではない…

クエストを請ける義務はないのだけど。」

なんとというか因縁深そうだな。宍戸さんは宍戸さんで赤毛の人をクエストに連れていきたくなさそうだし。

「アンタね、そんなに私に戦闘させたくないのね。」

「あなたの才能は素晴らしいわ。覚醒してない状態で魔法を使えるようにする…

でもその代償は大きい。あなたはまだ戦うべきではないわ。」

世の中には覚醒してるのに魔法使えないやつもいるしな。俺のことだよ言ってるわ。悲しくなるわ。

しかし、非覚醒状態での魔法の使用か。身体への負担は大きいだろうな。

「余計なお世話よ。自分の面倒くらい見られるわ。」

人工の魔力腺を用い、魔力を魔法に変換。やってみたら大したことなかったわ。」

後ろになんか着けてるな、とは思ったけどあの背部ユニットが人工の魔力腺兼変換器ってところだろうか。

「誰もそれを『実現しようとしなかった』理由はわかってるでしょう？」

「人の心配する前に、自分のやるべきことをやりなさい。」

「科研の汚点ともいえるこの施設。もし一般市民に被害が出たら……」

魔法使いの評判は底抜けだものね。」

「しかたないわね。できるだけ私たちが戦うわ。」

あなたはまだ魔法学園に来て間もない。先に私たちのやり方を見て。」

貰った魔力で常に全力ぶっぱに慣れるのはどうなの？ 将来的にやばくない？

「ま、いいわ。私もようやく魔法使いと接触できる。」

「データはどんどん取らせてもらおうわよ。」

「好きにしなさい。隠すことは何もない。」

そんな会話を終え探索に戻る二人。そして俺の後ろでは料理部の部員たちが探索しながら色々と話している。

「うーっ。花梨もレナも来ないとは誤ったネ……」

そう言うのは中国からの留学生である李 小蓮である。黒髪を後ろでお団子にしてまとめている小柄な少女は食の探究家でもあり手の込んだ料理を振る舞っている。

「まあまあ、誤ったら謝りませんとね。」

身の毛もよだつギヤグをかましてくるのは雪白 ましろ。背中まで伸ばした水色の長髪の美人であるがそれは黙っていたらの話である。常に親父ギヤグをかましてくるのは勘弁していただきたい。

「ううっ。とつても寒いのだ…冬眠しそうアル…」

小蓮と同じく中国からの留学生である雀 明鈴だ。ショートの赤髪だが一房だけ編み込んで後ろに垂らし同じく赤が基調のチャイナ服のような戦闘服を身にまといる少女はましろのギヤグに対してそう返す。

「冬眠…大ウスリー島の島民でも冬眠されるのですね。」

……

「やっ、やめるネ、マシロ！ 気が抜けるヨ！ 探索中ダヨ！」

ほんとにね

「どんどんお腹減ってくるのだ…花梨にもらったお弁当、まだアルか？」

「まだ2時間も経ってないネ！ いま食べたら後がもたないヨ！」

がんばれツッコミ役（小蓮）。俺は首突っ込まないから

「うわーん、ここ狭いしお腹減るし嫌いなのだー！」

「大きな声出さない！」

「…しかしレナさん、とても嫌がっていましたね。

木にかじりついて動きませんでした。いつもは積極的なのに…」

レナというのは料理部とよく行動を共にしている少女のことで最近まで「狼に育てられていた」過去を持つ。そのためかまだ言葉使いがたどたどしく目下料理部の部長である花梨さんのところで勉強中である。

「花梨が言ってたネ。レナは学園に来る前、科研にいたのヨ。」

「…まあ。狼に育てられたから、ですか？」

魔法使いに覚醒したから保護という名目で科研の連中に引き取られていたんだっただか？詳細は知らんが…

「そう。ナニがあつたか知らないけれどあの嫌がりよう、ロクなことじゃないネ。

聞いただけであんなに怯えるなんてタダゴトじゃないヨ。」

他人事ではない。俺も学園長や生徒会長が手を回さねばどうなっていたかわからない身だ

「なるほど。花梨さんが残ったのはそういうわけだったのですか。」

「レナ、たまに昼寝しながらうなされてるヨ。」

きつと科研の時のことネ。だからワタシ、科研嫌いネ。」

小蓮が吐き捨てるようにそう言うとキョトンとした顔で明鈴が口を開く。

「よくわかんないけど、花梨がいなのは科研が悪いアルか？」

「まあ、そうですね。」

「じゃあボクも科研嫌いなのだ！」

—————

探索中に発見した研究所内を徘徊していた魔物。その一体の足を砕き腕を落とす。動けなくなった魔物の顔に左手の散弾銃を押しつけ発砲する。重々しい音と共に魔物も霧へと戻り辺りは静寂に戻る。

ため息を吐きながら独り愚痴るのは如月 天だ。

「ああ、ポチね。ポチだわ…資料では見たことあったけど、おぞましい。」

Prototype Of Treasonable Impellent.

反攻兵器試作型…無理に英字当てて意味わかんなくなってるわ。馬鹿みたい。

どこのバカが兵器だけつけたのよ？ 洗脳はどこに行ったの？」

絶句もんだよ。誰だよつけたのセンス無すぎだろ。

「魔物の【意思】がなにかわかっていないまま強行したのね。」

おそらく、この制服と同じものはず。【理屈は分からないけど使う】。

その失敗した例がこの場所というわけね…」

「当然よ。」

成功例が制服の素材である「ミストファイバー」であり失敗例が先ほど霧へと戻って失せた「POTI」というわけである。そういったものは大抵失敗する場合が多い。「ミストファイバー」は奇跡といっても過言ではないだろう。

「…あなたのデウス・エクスもまだ成功とはいえない。

未来の希望になるのだから、命を無駄遣いしないで。」

【デウス・エクス】…ね。それがあの背部ユニットの名称であることは想像に難くない。穴戸さんの言い方だとやはり何らかの欠陥があるようだな。

「誰かがやらなくちゃいけないじゃない。なら私がやるわ。」

「魔力が活性化していないあなたには、魔法発動の反動が重い負担になる。

安全装置が完成するまでは、あなたに無理はさせないわ。私の権限で。」

そう言う穴戸に対して如月は見向きもせず言葉を返す。

「…さつきも言ったけど、私より先に自分の心配をしたらどうなの。

科研じゃアンタの評判は最悪よ。言うことを聞かないってね。

アンタ、科研も執行部も的に回して何をやるつもりなの？

ただ「人間を作る」だけなら、他の生徒の世話なんて必要ないじゃない。」

「私の目的はあなたと同じよ。魔物を殲滅し、世界に平和を取り戻す。

それでこそ、これまでの研究が報われるもの。」

「フン、なんでもわかった顔していけ好かないところも変わってないわね。ただし私はデウス・エクススの危険性もわかってるわ。」

「だからこそ、私がやるのよ。そこには口を挟まないで。」

互いに譲歩する気はないし必要もないのだろう。話を切り上げるように穴戸は如月に助言のみを残す。

「なにを言っても無駄ね。椎名ゆかりを紹介するわ。」

「せめて、治療は万全なものを受けなさい。魔法も使う治療をね。」

新聞部の様子を見るためにそちらに近づくと

「それにしても、と遊佐さんが微笑を含ませた顔で言う。」

「ああ、まさか旧科研に入れるとは思わなかった。ワクワクするね。」

「楽しそうだなによりですよ」

「ここ、電気生きてるんですか？ まさか今回のために復活させた…？」

夏海の疑問に対して同じようにおかしさを感じる。わざわざこのクエストのためだけに執行部や軍の人間が入って電源をつけた？ そんなことするくらいなら最初から自分達の手でカタをつけるだろう。ここは放置され封印された施設だと聞いた。普通そうする場合中の電源は切るだろう。そうすれば魔物は強くなることもなくなり外にで

る危険もなくなる。だというのにここの電源は生きている。

「いいや、ずつと生きていたはずだ。それどころか……これは一大事かもね。」

「……………」

ずつと生きていたとしたら何者かが定期的にここを使っていたということになる。

「注意して観察した方がいい。僕の予感が確かなら、すぐ穴戸君も気づく。渡くんは

……フフ、君は賢いね」

「なによ明斗なんか分かったんなら言いなさいよ。」

「おつと渡くん。僕は夏海に成長してもらいたいんだ。だから言つてはダメだよ。夏海。僕と同じ答えにたどり着けるか……」

頑張ってくれ。

……しかし、魔法使いじゃなくても魔法を使えるようにする機械、か。」

「新しい転校生の使ってるやつですか？ アレ、ホントなんです？」

「論文を盗み見たけど、とても理解できなかったよ。だけど理屈としては……」

魔力腺の代替物、のようだ。」

「魔力腺？ あー、なんか聞いたことあるかも……」

「夏海。お前はもう少し勉強しろ。人間には総量の差異はあれど誰だって魔力を持っている。」

「それくらい知ってるわよ。覚醒するとその魔力が活性化するんですよ。」

「ちよつと違う。厳密には【魔力腺】が活性化するんだ。魔力腺は魔力を外へと放出するための管みたいなものだ。魔法使いは【魔力腺】を通して外に出る魔力に魔法式を植え込んで魔法という事象を起こす。」

「ええと、じゃああの機械は体に穴をあける…?」

そういう夏海に遊佐さんは答える。

「魔力腺は物理的なものじゃないけど、おおむねそれであつてる。」

そして魔法は、発動する際に大きな反動がある。

魔力で肉体が強化されるのは、それに耐えるためだ。」

「メモメモ…それじゃ、あの機械はその役目もあるんですね。」

「さあ…僕にはそうは見えなかったな。　　そういえば渡くんの持つ武器も似たようなものなのかい?」

「似たようなものですね。俺の場合は魔力譲渡の要領で魔力を武器に流して武器に植えつけた魔法式を発動してる感じですよ。」

「あの銃は?」

「銃自体はただの古式銃だな。特殊なのは弾の方だ。俺の水銀と俺の血を媒体にして造ってる特殊な魔法弾だし。媒体に血が必要だから生産性はあれだけ。」

「結構エグいわね。」

「それにしても魔物の数少ないな。」

「きやあつ?!」

如月の悲鳴が聞こえそちらの方を向くと天井からぶら下がった服部 梓がいた。

「うつす、穴戸先輩、先の方は片付けたツスよ。」

「うわ?! あ、あんた誰よ?!」

見慣れていないからだろう。クエストメンバー内で梓に驚いているのは如月だけだ。

「おおつ。あなたが噂の魔法使いじゃない転校生さんツスね。」

忍者の服部梓ツス。以後お見知りおきを。ご用向きの際は天文部までツス!」

こいつも大概マイペースだよな。

「にに、忍者?! 馬鹿言ってるんじゃないわよ! この時代にいるわけないわ!」

「…忍術、見せてあげたら?」

梓に食ってかかる如月に対して穴戸さんは忍術の実演を提案する。

「いやー、ウチの特許なんでマネしないでくださいね?」

「結希! あ、あんた科学者のくせにこんな怪しいヤツと…!」

今度は穴戸さんに食ってかかろうとした如月だがどこからともなく現れた魔物が突如爆発し霧へと戻る。

「やだなー。忍者は元祖科学者みたいなもんツスよ？」

例えば薬の調合って、もともと忍者の薬草から来てるんですから。

昔は【術】だった火遁なんかも、解明してみれば化学変化の応用だったり。ちなみに今の爆発も火遁です。本来逃げるための術なんですが…

魔法で弱った魔物を倒すくらいならじゅーぶん使えます。」

相変わらず凄いなー。

「…な…なんてこと…！」

「忍者は今も実在するわ。術に科学的な説明ができる分…

魔法使いよりも現実的ね。」

「まー、魔物には魔法が一番ってことで、忍術は補助ツスけどね。

御用の際は服部梓をヨロシク！ では、物見に行ってくるツス。」

そう言い偵察に戻る梓

「つとその前に。先輩一応魔力の補充お願いするツス。」

「はいよー」

魔力譲渡開始…完了

「では、改めて行ってくるツス。」

そんなことはやってる俺たちの横では穴戸さんと如月が話している。

「……あなたは純粋な科学者。科研で生まれて科研で育った。

これからも信じたいことが起こると思うわ。けれど、あなたはあなた。

全部噛み砕いて吸収しなさい。デウス・エクスの完成はその先。」

「…わ、わかつてるわよ！ 科学の発展のためならなんだってするわ！

もう魔法も科学の一分野だってことを教えてあげる！」

—————

研究所の奥へと進んでいた俺たちの前に討伐対象級の魔物が現れる。

しかも武器を扱える程度の知性があるらしく手に持った火器をこちらに向け掃射を始める。

「みんな！隠れるツス!!」

梓がそう叫び全員壁の方へと隠れる。

壁はかなり頑丈な造りであり弾が貫通することはなさそうだ。重苦しい掃射音が止むと共に穴戸さんが魔導兵器である有線式のピットで攻撃を仕掛ける。それに合わせ各々遠距離から魔法を放ち執拗に魔物の持つ武器を破壊しにかかる。

武器が鈍器にしか使えないくらいまで壊れると明鈴がツツコミ魔物に近距離での魔法を体術も合わせ放つ。俺も右手のパイルハンマーを射出形態にし明鈴に合わせるが流石に復帰が早い。

速度重視の射出では決定打にはならないか。完全に復帰し再度攻撃してこようする魔物だが突如飛んできた閃光が魔物を掻き消し霧散させる。

魔法が飛んできた方向を見ると白いコートのような戦闘服を身にまとった風紀委員長：水無月 風子がそこにいた。

「あなた、来てたのね。」

先に口を開いたのは穴戸さんだ。

「ええ。科研の依頼のくせに、生徒会も精鋭部隊も動かかねーのは不自然でしょ。

気になって参加させてもらいました。いやー、キツイですね。

入学後にすぐ風紀委員長になって、クエスト免除されてましたから。

6年ぶりのクエストはろーたいには堪えましたよ。」

いやいや、十分高威力だったよ。生徒会長やチトセ、アイラには及ばないがそれでも高水準で魔法の威力と精度がまとまっていた。流星は風紀委員長というところだろう。

「なによ、なんなのよ！」

如月は如月でパニくっている。実にメダパニである。

「科研の科学者たちには、現場が見えていない。

彼らが思っているより、人間は賢いということよ。

目的を話した方がいいわ。」

科研がなにを目的にしているかはなんとなく察しはついているがどちらにせよ風紀委員長が来た時点で隠し通せるものではない。さっさとゲロって欲しいものだ。

「ウチには学園の風紀を守るとゆる目的があります。

風紀は安全がほしよーされて初めて守られる。

ウチの縄張り内で内緒ごとができるとは思わねーことです。」

「……クツ……わかつたわ。どうせいつか事件になる。

いい？ 口外無用よ。年内は動かないはず。だけど…

【霧の護り手】が近いうちになにかするわ。」

「…霧の護り手？ 意外な名前が出てきましたね。

霧の護り手が科研と何の関係が…

…まさか、ここの電気が生きているのは…」

よりにもよってテロリストに使われていたとは…。いや、でも…

「そうよ。科研はこの施設を封印したまま放置していた。

自分たちの愚かな所業から目を背けるようにね！

だからこの旧科研を【霧の護り手】が利用していたことも気づかなかった！」

「待ってください。話がおかしーですよ。

魔法使いでもない霧の護り手が、こんな魔物だらけの場所でどーやって？」

「そうだ。【霧の護り手】は魔法使いではない。もちろん軍隊でもない。つまり基本的には魔物に対して無力だ。こんなところで生きていられるはずがない。」

「かつて科学者はポチから身を守る手段としてレジストフィールドを作った。」

素材はミストファイバーよ。私たちの制服と同じ。」

幼い魔物なら、これで攻撃をシャットアウトできる。」

「まさか…あれは希少性が高く加工のむづかしー素材でしょう。」

テロリストが手に入れられるわけがねーじゃねーですか。」

風子の意見は最もだ。ならば話は単純。可能性として高いのは…

「裏切り者がいるってことか。学園内か軍か、科研か、あとは軍需産業のJ G Jあたりか」

俺がそう言うのと如月はそれに同意したように頷く。

「そうよ。裏切り者がいる。私の役目はここでその痕跡を見つけることよ。」

そう返した如月に対して風子は怒りをあらわにする。

「…確かに、使用された形跡はありましたが…まさか霧の護り手とは…」

そんなもんを黙ってたってゆーんですか。ブチキレますよ。

霧の護り手がここで【何を】してたか知りませんがね！

そんなもん、学園をどーにかすることに決まってるじゃありませんか！」

霧の護り手の目的は魔法使いの排除だ。ならば手段はわからずとも目的は絞られる。この施設の近くにはグリモア学園があるのだから。

「第7次侵攻で、魔物はこの封印を破った。進撃を止めてでもね。」

それが無かったら、最悪の時まで気づかなかったでしょうね。」

しかし、幸か不幸か先の大規模侵攻でこの封印は解かれ最悪だけは回避された。ならばこれ以上悪化しないように対応するしかない。

「とにかく、痕跡を探す。それに異論はないと思うわ。」

まだ魔物も残っている。殲滅しましょう。」

穴戸さんがそうまとめ俺たちは再び探索と魔物の排除を行うのだった。

—————

施設の最奥へと到着したが記録媒体は破壊し尽くされている。

「HDDが物理的に破壊されてたら、データの回収は無理ね。」

如月がそう言うのと穴戸さんは壊れた媒体に近づきながらとある生徒の名を呼ぶ。

「双美心。」

「ひ、ひいつ！ ななな、なんででしょう……！」

泣きそうになりながら返事をする心ちゃんだが

「任せたわ。サルベージをお願い。」

「わ、わかりましたあ！ す、すみませんが少々お待ちください！

……………」

作業を始めた途端に人が変わったように集中し始める。

「な、なによ。サルベージをお願いってどういうこと!？」

破壊されてんのよ！ 魔法で精密機械を直すって言うの!？」

「…双美心は…遊佐鳴子の天敵。」

え!？」

心から驚愕だよ。声には出さないけど…

「はあ!？」

如月さん声に出るほど驚いているようだ。

「ケープルを繋げばあらゆる物理的、セキュリティ制約を無視することができる。

…はず。今はまだ成長途中。

それが彼女の得意とする魔法よ。破壊されてようが関係ないわ。

ただ一つ、立華卯衣の内部情報だけは見られないけれど。理由は不明。」

チートかよ…

「な、なに言ってるのよ！ そんなの論理的じゃないわ！」

「違うわ。魔導科学がその論理にたどり着いていないだけ。」

「魔法は科学」なんでしょ？」

勝ち誇ったように宍戸さんが如月にそう告げた。

「…お、終わりました…あの、こゝ、これ多分外に出るとまずいものでは…

魔物の洗脳方法、更新されて新しい理論が付け加えられます。」

その頃には心ちやんも作業を終えたらしく如月にデータを渡している。

「私が預かるわ…まさか、そんな理論がうまくいくはずがないと思うけど…」

「天。わかつてると思うけれど。」

「わかつてるわよ！ 『破壊されてたから復旧はムリでした』で通すわ！

あんな愚か者たちにこれ以上間違わせたら、人類は滅びるもの…！

さあ！ 魔物も殲滅したしやることはやった！ 帰るわよ！」

帰ったらまた忙しくなりそうだな。裏切り者の件にしても「霧の護り手」の件にして
も、な。

鐘の音は遠く

クリスマス

パーティーやデート、誰もが浮かれている最中風紀委員長である水無月 風子は違反者がいないか巡回を行っていた。そんなところに1人の女生徒が近づいてくる。

黒い髪をポニーテールにまとめあげ見るものを圧倒する女性の象徴を携えた少女は他の生徒たちと違い特別な白い制服で身をまとっており。それはつまり生徒会長か副会長であることを示していた。彼女：水瀬 薫子は風子へと近づくと先日起きた魔物の事故について詳細を知っているか尋ねてくる。

「…あー、知ってますよ。数日前にトラックが襲われた奴でしょ？」

「ええ、そうです。そして魔物の移動経路を追跡すると…」

水瀬から送られてくるデータを見る。魔物の目標は…

「この学園が標的だったと。まあ、そーでしょーね。」

どっちかって言うとおのれんちゅーの「通り道」にトラックが入り込んだ…

そのほーが正しいでしょーね。念のため第1報のときから準備してました。」

そしてそんなことはすでにわかりきっている。対策はすでに行っている。」

「それは僥倖です。クリスマスパーティーの最中に申し訳ありませんが。」

「心にも思っていないこと言わなくていいので。こっちも仕事です。」

見え透いた謝罪は流し早く詳細を話せと目配せする。

「まあ、よいでしょう。魔物は散開した国軍を「無視」して進攻中です。

戦うにあたっては、一度彼らの足を止めなければ、素通りするでしょう。」

「風紀委員が出るのはそのためですか。」

軍を無視して学校に侵攻をかける、か。

「生徒会は年末の調査に向けて手続きが忙しく、手を貸せませんが…

精鋭部隊がバックアップにつきます。うまく使ってください。

それでも足りない場合は、パーティー中でも構いません。一般生徒に出勤を。」

年末の調査、風子も耳にはしている。闘技場の地下を調べにいろいろ詳しいが詳細はまだ

掴んでいない。

そこらはまた後で調べるが生徒会が風紀委員に精鋭部隊だけでなく一般生徒の出勤

まで許可するとは…。

「ウチの判断でいいんです？」

「もちろん。今回の作戦はあなたに一任します。信頼してますよ。」

「アンタさんに信頼されても嬉しくねーですが、いいですよ。やりましょ。」

元から断るつもりはありませんでしたがね……で、渡さん呼んだのは虎の情けでしよーかね？」

「どちらでもよいこと。さあ、渡さん。お楽しみのみ所申し訳ありませんが……」

風紀委員の「面倒見」をお願いしますね。」

「どもども。一緒にクエストに出るのは初めてですね。」

なに、心配ありません。ドーンと構えてください。ヨロシク。」

「へいへい。独り身とはいえせつかくのクリスマスなのに……ま、仕方ないのでお呼びしてないクソサンタは全部狩らしてもらいますよ」

—————

「会長、風紀委員でよろしいのですか？」

生徒会室へと戻った薫子は先程までのことを虎千代へと報告する。そして自分の感じた疑問を虎千代へと投げ掛ける。

「よろしいってなんだ？ 強さに不安はないだろ？」

「しかし水無月風子は、これまで入学時にクエストに1度出たきりで……」

風紀委員長になってからは1度も出ていません。」

生徒会として薫子は生徒のクエスト数をおおよそには把握している。その中でも水無月風子は異常な存在と言える。

「この前、旧科研に行つてたじゃないか。」

しかし虎千代といえども問題はないという信頼があるようだ。仲の悪い生徒会と風紀委員会だが虎千代個人としては水無月風子は信頼を寄せるに足る人物なのだろう。実際虎千代が卒業した場合の生徒会長の後見の候補には風子の名もある。

しかし引けないとばかりに薫子は食いつく。

「あれは科研からの圧力で正式なクエスト発注はされていませんでした。」
「それって屁理屈って言わないか？」

「例え過去1回が2回だったとしても、実戦経験のなさが目に付きます。」

リーダーは神風怜にすべきだったかと。

「風紀委員なんだから、委員長がリーダーを務めるべきだろ。」

それだけじゃない。クエストに出てなくても、アイツの強さはわかる。

特に今回のように、走り続ける魔物への足止め魔法が得意だしな。

ダテに5年も取締りをやってないさ。任せておこう。」

虎千代がここまで言い切るのだ。大丈夫だという確信があるのだろう。だからこそ薫子は折れたように返事を返す。

「……はあ……かしこまりました。」

「じゃあアタシ達は執行部だ。【あの下】に入る許可を取り付けなと。」

それに自分達にはやらなければならないことが多すぎる。気を引き締め自らのやることをやるべく動きだす。

魔物の通るルートへの配備も終わり辺りが静寂で包まれる、かと思つたがそうでもないらしい。

「…微かに鐘の音が聞こえますね。街の方でしょうか。」

そう呟く氷川紗妃は実際街のある方へと顔を向けている。

「たぶんそうだろう…風飛の街がルートに入ってなくてよかった。」

「【ここ】もちちおー風飛市ですよ。神風。ほんの端っこですけどね。」

市民避難終わり。イルミネーションだけ残ってるのが不気味ですねー。」

氷川にそう返す神風に対して一応のツツコミをいれておく。風紀委員の周りにはきらびやかに飾られた建物、演出の凝った風水、目立つところに飾られたクリスマスツリーなど本来ならば人が多く混みあっているはずの場所だが魔物の侵攻のために人々は避難を余儀なくされ無人となった街は不気味さだけが残る。

「委員長…風紀委員の仕事は学園の風紀を維持することです。」

やりたくない、というわけではありませんが、外部の魔物と戦うより…。」

「はっちゃけるかも知れない生徒の監視のほうがいいと?。」

「ええ…単刀直入に言えば。」

氷川が自分に意見を申告してくる。確かに風紀委員の仕事の主たるは学園内の自治だ。違反者を取り締まるのは大切だろう。しかしそれだけが風紀委員の本質というわけではない。それに確かに風紀委員総出で来たがなにもそちらが出来ないわけではない。

「だいじょぶですよ。それは服部にやってもらいますから。」

「え？ 自分、ここにいるツスよ？」

不思議そうな声音で言ってくるが構わず告げる。

「たまに学園まで様子を見に行ってください。ま、事態が事態なんで。」

過度な取締りは不要です。」

「え、ええー…ここまで30分くらいかかったツスけど…」

「アンタさんの足なら10分でしょ。おねげーしますよ。」

普通の生徒ならばそうだろう。しかし、服部梓という少女は普通ではなく忍者だ。もちろんこの中で一番の機動力を誇るの言うまでもない。

「あふう…ラ、ラジャツス…」

服部を社畜にしたところで先ほどの氷川の意見に対して答えてやる。

「さて、氷川。風紀委員の仕事は学園の風紀を維持する。せーかいです。」

つまり、学園生だけじゃなく不審者や反魔法使い勢力、それに…

魔物が来たらお引き取り願う。第7次侵攻で1番軽傷だったのがウチらです。

こーゆーときくらい、目立ちましょ。」

それだけいいとある少女の元へと足を運ぶ。

「いや、すいませんね。頼っちゃって。」

少女…冬樹イヴは特に反応もなく魔物が来る方向を見ている。

「成績でアンタさんを釣ったのは謝ります。パーティー行けず残念ですね。」

「興味ないので。」

冬樹はぶつきらぼうにそう答える。妹の誕生日でもこれだ。本当に彼女たちの問題

は複雑で面倒のようだ。

「さいですか。ま、早く片付けたら残り物でも食べられるかもしれません。」

風紀委員、総勢15名。行きますよ。」

「私は1人で。では。」

「……………せつかくキメたのに。で？いつまでそこで見てるんですか？渡さん」

独りごちりながらこちらを窺っていた少年へと声をかける。

「別に見てた訳じゃ…」

「妹さんに色々頼まれてるんでしょ？知ってますよ。」

こちらの情報網を甘く見がちな少年にそう告げると渋々といった感じで話し出す。

「ぶっちゃけると想定よりも面倒そうな関係なんですよあいつら。頼まれた以上はどうかしなきゃ…とは思ってるんですがね。」

「ま、せーぜーがんばってください。さ、私語は終わりです。そろそろ魔物の到着予定時刻です。期待してますよ?。」

「期待されても魔力以外出ませんよ」

—————
さて、おでましますか。

魔物の群れ。大規模侵攻とは比べるまでもない程度だがそれでもクエストとは比べるまでもないくらい多数の魔物。しかしその大多数は魔力譲渡を受けた各風紀委員の遠距離魔法で近づくよりも前に倒せた。近づいた魔物も神風のような近距離戦が得意な者たちによって即座に討伐される。

しかし、こいつらはいかなれば斥候だ。本命が来るのはまだ先だろう。

明斗に再び魔力譲渡してもらいつつ次の戦闘に備える。

「ふう。まだ雑魚のようだ。本命は到着してないか。」

神風が息を整えながら状況を分析している。どうやらあちらも同じ意見のようだ。

「ええ…まだしばらくは楽でしょう。」

「では今のうちに……いや、詮索などするものではないか。」

神風が氷川に何か問おうとする。しかし本人は多少の躊躇いがあるようだ。

「なんのことです？ あなたにしては珍しく歯切れが悪いですね。」

「少し気になったんだ。委員長は5年前に風紀委員長になったんだろ？」

まだ10だか11だかでなれた実力も凄いが、なぜなろうとしたのか。」

「ああ、幼い子供のときに風紀委員長を目指した理由ですか。」

いえ、私はまだ3年目ですから……転校してきた時はすでに……

あなたのほうが詳しいのでは？」

「私は、風紀委員になった時期がお前と同じくらいなんだ。」

仲のいいお前なら聞いているかもしれないと思っただけだな。」

神風たちは聞こえてないと思っているのだろう。確かに今も索敵を続けつつ委員た

ちに指示を飛ばしている自分だが合間で聞き耳を立てるくらいは朝飯前である。

「2人とも、ウチの前で内緒話ができると思わねーことです。」

「あ……委員長。すみません、警備に戻ります。」

そそくさと戻ろうとする神風に何の気なしに喋りかける。

「別に風紀委員長を目指したのに特別な理由はねーですよ。」

「そ、そうなのですか？」

キョトンとしたように返す神風にとさらに言葉を続ける。

「えーまー。たぶん、アンタさんがたと同じですよ。」

学園に転校してきた生徒は、あるいは覚醒後に友人も恋人も無くしたかも：

あるいは己の力を過信し、うぬぼれているかもしれない。

そんな人はね、ほつといたら社会に出ることは困難です。

魔法が使える、体が強化されるという肉体的な変化に加え：

魔物と戦うことで一般人とは常識が変わってくるわけですから。

誰かが正してやらねーといけねーでしょ。ウチが言ってるのはそれですよ。

体も社会的地位も人間扱いされねーんで、せめて心だけはね。

ま、なにがどうしてといえ、あるときふと目覚めた、くらいですかね。」

【魔法使い】に覚醒すれば強制的に魔法学園に入り、やがて軍に入り魔物と戦う。

覚醒した時点で【普通】であることなど不可能なのだ。身体は並の軍人を凌駕する。

強すぎる力は【普通】の人々から妬みや恨み、畏れを買う。故に【魔法使い】は魔物と

の戦いの尖兵とならざるを得ない。

他人と違うからこそ【自分は特別】だと思いう気持ちに支配される。そう思わないと平

常を保てなくなる人もいる。

故にこそ【普通】の象徴である風紀を守らせ、社会的な解離を防がなければならない。

それこそが自分達の存在理由だと風子は言う。

「委員長……」

「さ、みなさんが清く正しく過ごせるよーに、魔物を追い払っちゃいましょう。」
そして今私たちがやらねばならないのは魔物退治だ。

—————
風子の話を遠くで聞いていた冬樹イヴ。

「……体も社会的地位も人間じゃない……」

……そんなことは認めない……！」

風子の言う「魔法使い」……その扱いを彼女は受け入れられなかった。受け入れられなくな
い、というべきか。否、彼女自身はその扱いでも構わない、というだろう。誰よりもエ
リートを……【普通】であることを捨てようとしている彼女がその扱いに耐えられないは
ずもない。ならば何故だろう、と明斗は考える。しかし判断材料がなさすぎる。ノエル
の頼みを受けておいてなんという体たらくか……

「あ、冬樹先輩……」

「っ!？」

考え事に集中しすぎたか梓の接近に気づかなかった。

「……あ、すいません。集中の邪魔しちゃいました？」

「いえ…なにか用？」

平静を装い用件を促すと梓は口早く告げる。

「自分、今から学園に行つてくるんで、30分ほど前線をお願いします。」

「30分？」

「…ここに来るだけで30分かかっているのに、巡回も入れて30分というの？」

「あ、あーつ。そつちツスか。いやまあ、巡回つていつても本気で取り締まりは…」

「…いえ、いいわ。時間が惜しいから早くいつて。」

説明を受けたところで時間の無駄だ。早く向かうように促す。

「そツスか？ しかれば、ちよいとだけ失礼するツス。」

梓も即座に踵を返すと学園の方へと走り出す。

「そう、往復と巡回で30分は…なんでもないことなのね…」

…才能なのかしら…努力なのかしら…いいえ、どちらでもいいわ。

足の速さよりも、魔物を倒す方が重要なもの…！」

魔物その第二波がやってくる。先ほどの雑魚とは違う。しかし、この程度の魔物が何体来ようとも遅れを取るほどイヴは弱くない。

今回の魔物…溶けかけの雪だるまのような姿をした魔物は枝のような手をこちらに向ける。そこから氷の塊を弾丸のように飛ばしてくる。

魔法を発動する。イヴの周りにはつららが展開され滞空する。

「いきなさい」

イヴの号令と共にこちらに向かってきた魔物の飛ばしてきた氷の塊を空中で撃ち抜き、その勢いのまま魔物へと襲いかかり難なくその身を貫く。

魔法で生み出したつららを次々と魔物へと飛ばしていく。回避しようとする個体もいたが……

「……無駄よ」

地面ごと魔物の足を凍らせる。抵抗するように魔物は足掻くがその程度でどうにか出来るものではない。

そして蹂躪が始まった。

—————

流星は風紀委員でも最強格なだけはあるな。冬樹の方は問題なしか。

…今日魔力譲渡以外で戦闘参加してないな。

見回りに行っていた梓も帰って来たみたいだな。

「おつかれ。なんかいるか？」

「ひーっ、ひーっ。に、にんにんッス先輩。なにか…飲み物を…」

「ほいほい。ほらよ」

「ありがとうございます…ゴクゴク…うーっ。ただでさえ魔物と戦って疲れるのに…

いいんちよも人使い荒すぎッス…えーと…うしっ。往復と警備で25分!」

「大変そうだな」

「あ、いえ取締りって言っても本格的にやるわけじゃなくてですね。

こう、自分がツインテにして影をいいんちよそつくりにして…

声マネしながら人が少ない校舎を歩けば、みんな自重してくれるって寸法で…

相手は見つかりたくないですから、本格的な変装もいらないうし。

やること自体は単純なんで、体力ツスね後は…

あ、ちびっただけ魔力いたでいていーですか？

魔力が多いと体力の回復も速いですから。あんまこつちに参加できてませんし。」

話ながら手早く水分補給と魔力譲渡を済ませる。

「いやーすみませんね。このお礼はいつか体で…」

下らないことを言っているが後ろの風紀委員長殿の怒気に当てられ言葉も途中で切れる。

「な、なんでもパシってくださいいね! エロくない範囲で!」

「お疲れ様です。」

口を開いた風子はいまだに梓をジト目で見ている。

「あ、あれーっ！ いいんちよ、こんなところにいたんですね！」

ちよーど報告しよーと思つてたところですよ！ よかつたよかつた！」

うわー、相当棒読みだよ。

「どーぞ。お聞きしますよ。」

「あ、はい…いや別にどーということはないんですけど…」

運営委員がいい子ばっかつすから、みんなそれに引きずられてるツスね。

アルコールもケンカも特になし。逢引きはまあ、散らしましたけど…」

逢い引き散らしはザマーみると言つてやりたいな。こちとら独り身の上にこんなと

きまで仕事だよ畜生が！

「けっこー。で、もーひとつの方は？」

行つて帰つて30分未満にどんだけ仕事させてたんだ委員長…

「あ…え、えーとその…」

梓はこちらをチラチラと見ている。部外者に聞かせても大丈夫なのかと窺っている

ようだ。

「転校生さんなら気にしなくていいです。」

対する委員長の判決は俺に聞かれても問題ないというものだ。

「は、はあ。んじやま…遊佐先輩も特に怪しい動きはないツスね。」

どこか盗撮してましたけど、自分らじゃなさそうでした。

生徒会は執行部のところでしたね。」

最近ずっと忙しそうでもない生徒会。ただ忙しいのは引き継ぎ関連だけでもないみたいだな。

「けっこーです。遊佐鳴子も生徒会も、地下に目がいってるよーですね。

ウチらが出て行つた後にあやしー動きがないか…それがわかればいーです。

服部。もう学園には戻んなくていーんで、魔物討伐に参加してくださいー。」

「ウス、改めてお願いします。じゃあ冬樹先輩に合流するッス。」

「そろそろ第3波が来ます。強いのも来るころなんでみんなでいきましょう。

油断してたら、取り逃しちまいますよ。」

それにしても魔法が使えるならともかく今回の相手は俺と相性が悪い。

夏海と一緒に رفتったクエストで戦った(?) スライムもそうだが今回の雪だるまのなりそこないもただ斬るだけではすぐに腕などがくつついてしまうため落葉での攻撃は効果的ではない。パイルハンマーの変形後の最大出力ならば高い衝撃力でもろとも吹き飛ばせるのだろうか狙ってやるにはリスクが高すぎる。故に俺が今回の魔物と戦う場合の最大の攻撃は素手で殴るに他ならないというのが現状だ。

まあ魔法使えるやつらはそんなのお構いなしに吹き飛ばせるので彼らに魔力を与え

て戦ってもらうのが一番なのはいつも通りだろう。魔物に一番効くのは魔法という原則は変わらない。

「これで…あと何体？」

冬樹も息が上がってきたようだがまだ近くに委員長もいる。魔力の補充は大丈夫だろう。

「半分くれーです。まだまだ油断は禁物。」

「油断など…そんな余裕はありません。」

戦闘しながら会話してる時点でそれなりに余裕があるということを自覚してほしい。俺なんぞ物理で殴るを地でやっているのだ。喋る余裕すらない。普通に武器で殺せるなら多少は余裕が出るのだが…

「妹さんにケガさせるわけにはいきませんものね？」

「…あの子は関係ありません。成績に加点されるからです。」

委員長いきなり爆弾投げ込むか…。急激に温度が下がったのではないかと錯覚するくらい…。いや、冬樹の周囲で魔法による氷が浮かんでいることから実際に温度が下がっているのだろう。

「ふーん。つまんねーですね。」

「あなたを楽しませるために生きているわけではありませんから。」

「ま、いーでしよ。アンタさんの成績がよくなることは…

妹さんを守ることにつながりますもんね？」

「…行きます。」

反論する気も失せたのだろう。冬樹はそれだけ告げると新手の魔物に単身向かっていく。

「あつ…いじめすぎましたかね。しかしね、冬樹イヴ。」

ケンカしてるわけでもないのに双子が話さないつてのは悲しいじゃねーですか。」

そんな冬樹の背中を見ながら風子は呟く。

「転校生さん。アンタさん、一度氷川と神風のグループに行ってくださいー。」

氷川に魔力を吸わせて、中規模魔法で一掃して…

全員で戻ってくるよーに。宍戸結希から連絡がありました。

次の波が最後です…おーきいですよ。」

「了解です。」

すぐに切り替えたのだろう。俺に向かって指示を出し自らも戦場に戻る。

「俺もやることやりますか」

—————

「お待たせ。魔力譲渡の時間だぞ。氷川は魔法撃ったあともう一回な」

「すまない。助かる」

「ありがとうございます」

神凧と氷川のグループに合流して魔力を補充させる。氷川は中規模魔法を放つのでそのあとにさらに魔力を補充させておく。

移動しながら戦闘で疲れている風紀委員に魔力を渡し回復させていく。

「渡君。後ろ！」

「大丈夫」

魔力渡そうとしたら後ろから魔物が来ていたみたいだ。とりあえず氷弾を作り出す前に落葉で腕を斬り中断させる。効果が薄いといっても一時的に腕がなくなるのだから氷弾もまた消滅する。落葉を手放すとそのまま雪と水が混じったような身体の腕の部分絡めとり地面に頭から叩きつける。まだ抵抗しようと腕を伸ばそうとするが左足で踏みつけ動かなくなり胴体部を右足で踏み抜く。腰にマウントしていたパイルハンマーを右腕につけ変形させると叩きつける要領で打ち抜き消滅させる。

警告をくれた風紀委員の子がドン引いてるが気にしたら負けだろう。手早く装備の回収と魔力譲渡を済ませて次にいく。

—————
(妹さんを守ることにつながりますもんね?)

イヴの中で風子の言葉が木霊する。

（私が、ノエルのことを？）

（だからここに来た？ いいえ、私は「エリート」にならなければ…）

（あの子は関係ない。私が国連に入って…始祖十家を超える力を得て…）

（そして…そして…）

戦闘中だというのに思考が止まらない。そしてそれは致命的な隙を生み出す。

「冬樹っ!!」

怒号。それが風子のものだというのに気づいたときには魔物の影が自らを覆っていた。

—————

ふと冬樹の方を見ると何か考え込んでいるような、思い詰めた顔をしていた。

少し後ろの森林から魔物が現れる。普段の彼女ならば気づいたはずだ。

「冬樹っ!!」

委員長から怒号が飛ぶ頃には俺の身体も動き始めていた。

間に合うか？

いや、間に合わせる。

魔法使いとして覚醒してから無駄に上がった身体能力。今使わずにいつ使うのか。

蹴った地面が抉れるほど筋肉を酷使しとにかく身体を加速させる。

間に合った…

冬樹と魔物の攻撃の間に入り落葉と左腕を緩衝材に魔物の攻撃をガードする。

メキリ、と嫌な音が左腕から聞こえる。身体が浮く…いや、吹き飛ばされると判断し自分で飛ぶ。

直後冬樹共々吹き飛ばされ木に突撃するがガードし自分で飛び反動を減らしたため威力もその分弱まった。

「渡さん！冬樹！だいじょーぶですか!？」

「左腕折った以外は…木にぶつかったときに頭打ったつぽいですね。」

目の前が真っ赤だぜ。

「冬樹も軽傷です。今は気失ってるみたいですが」

もろとも吹っ飛ばされたしな。一応ぶつかるときも庇いはしたのだが

「渡！委員長！」

神風と氷川も来たか。心配そうに駆け寄ってくる。

「神風、まだ敵が来てます。アンタさんなら大丈夫でしょ。」

ウチは神風のバックアップに回ります。氷川、渡さんと冬樹を。」

風子は指示を出すとすぐに戦場へと戻る。俺と冬樹が襲われたことにより風紀委員の中にも動揺が走っている。上の人間が統率を執るのはこの状況下で必須とも言えるだろう。

「……う……ノ、ノエル……」

冬樹がうわ言のように呟いたのは間違いない。妹の冬樹ノエルの名だ。

「……………ごめ……な……?」

言っている途中で意識が回復したのだろう。辺りを見回し現状を確認する。

「私は……魔物の攻撃を……?」

「おう、起きたか」

そう声をかけると俺の左腕を見つめる

「その腕……」

「これに関して俺の技量不足だから……。それより俺たちがやられた……って訳じゃないけど怪我したことで風紀委員に動揺が走ってる。委員長が指揮取りに行ったからすぐに収束すると思うけどなんにせよ俺たちに責任があることは変わらない。ここから先は言わなくてもいいよね?」

「はい……失態は……取り戻さなくては……!」

「ん。じゃあ行くかうか。」

落葉を手に取り腰を上げる。

「渡さんそんな怪我でなにをする気ですか!？」

氷川がまさかと思いつめようとするが止まる気はない。

「俺たちが元氣だつてこと周りにアピールしないといけないし。それに…ようやく落葉の修理終わったばかりだったのに。これ直すのどんだけ時間かかると思ってるんだよ!」

「はい?」

冬樹と氷川が同時に呟く。

落葉には少しだけだがヒビが入っていた。強引にガードに用いたせいだろう。しかし、この程度ならむだ工房での修理が可能だ。時間がかかるといふ問題を除けば、だが。

ということでもクソ魔物たちは皆殺しだ。

落葉を鞘に納めポーチからあるものを取り出し宙に放る。それを再び抜刀した落葉で斬る。

刀身に青い電気が纏う。

雷光ヤスリ。俺の持っている特殊なエンチャントアイテム。製造難度が高く効果時間も1分未満と短いがその間雷の魔法の力をヤスリを用いたものに与えるという効果

を持つ。

つまり、だ。ヤスリ系のアイテムを使っている間普段は再結合するような魔物でも魔法によつて裂かれれば再結合させることもなく斬り殺せる。

序盤使わなかったのは作る手間の割りに効果時間も短く数が少ないからだ。

「さて、行くうか」

近くの魔物の胸を穿ちそのまま返す刀で縦に裂き消滅させる。

横からきた攻撃を狩人独特のステップでできる回避し腕を落とす。さらに小刀側を頭部に突き入れ、一度抜いてから斬り払いで首を落とす。

左から来た魔物は冬樹から放たれた氷の魔法が次々と刺さり即座に消滅した。

風子の元混乱していた風紀委員も勢いを取り戻し魔物の駆逐へと当たる。

名残惜しいが雷光ヤスリの効果も切れたし左腕を悪化させるわけにもいかない。後方に戻るか。

ほどなくして戦闘は終わる。氷川が中規模魔法を放った時点で残りもそこまで多くはなかったのだから当たり前と言えれば当たり前だろう。

—————

「それで終わりですかね？」

目の前の魔物が消え周囲には今はもう魔物がない。そろそろ終わったかと思った

が…

「いや。最後に大きいが残ってるみたいですね。」

風子がそう言うのと俺たちが陣取っている公園へと一際大きな魔物と取り巻きが現れる。あれはクエストでの討伐対象よりもデカいな。しかし、タイコンデロガではないよ。うだし問題はないか。

「さて…相手の残りも少なくなってきました。」

ちよいとトラブルはありましたが、大事なく終われそーです。」

「委員長、今は…」

「いいわ。そういうのは…いらない…」

風子の言葉に神風がフオローを入れようとするが他でもない冬樹自身がそれを止める。

「ほらほら、くれーですよ。勝ちが近いってのに。」

冬樹、さっきのが失態なら、それを引き起こしたのはウチです。

よけーなことをいーましたね。よかれと思っただんですが浅はかでした。

ウチもその失態を取り返さなきゃなりません。

トドメは2人でやりますよ。委員長命令です。

この1回だけ、チームプレイをやりましょ。

気に入らなかつたら次はなくていいです。わかりましたね？」

「……………はい……………」

風子の共闘という提案に珍しく、というより初めてであることは明確だろうが冬樹が頷く。

「では、転校生さん、ウチらの魔力を回復してください。

あのデカいのをウチらでやります。バックアップよろしく。

他の皆さんは、まだ残ってる雑魚を確実にやっちゃってください。」

「じゃあやりますよ。最後ですしバッチリ決めてください」

風子と冬樹の方へと手を向ける。

魔力讓渡開始……………完了。

魔力補充が完了するやいなや全力で魔法を行使する風子とイヴ。魔物の巨体は氷柱に覆われ極光が胸を貫く。胸をえぐられた魔物の身体は覆われた氷ごと割れて砕け散り霧へと戻った。

「…ふしよーしや10名。いずれも軽傷。左腕が折れるって軽傷なんですねえ。」

「治療系の魔法ならすぐに治りますし軽傷？なんですかね？」

わからん。アドレナリン切れたせいか痛みがぶり返ってきて辛い。頭を打った冬樹

と委員長のセットで他の委員たちの治療が終わるの待つ。

「大丈夫？ わたしが待機しててよかったわ：」

声をかけてきたのは保健委員長である椎名ゆかりさんだ。長い髪を後ろで編んでおり眼鏡と巨乳が特徴だ。

「あなたたちが最後だけど：渡くんが一番酷いわね。」

「ちよつと無理しすぎただけですよ。ま、重傷者出るよりは腕一本のほうが良いでしょう？」

「そういう問題でもないんだけどね」

苦笑いで返されたけど俺は気にしない。

治療もすぐに終わった。折れた腕も一週間もすれば完治するそうだ。

「さーっ、応急手当てがすんだたひきあげますよ！

こんなところでゆつくりしてちや風邪ひきますからね！

帰りはバスをよーいさせたんで、さっさと帰りましょ！

…さて、これでパーティに出られますね。せっかくなんで楽しみましょ。」

「…私は、帰ったら図書館で勉強します。」

「討伐で疲れたまま勉強しても効率悪いですよ？」

「それでも勉強は進むので。」

頑なだな。簡単には変わらないか…

「…んー。まだまだですかねえ。」

あ、渡さん。後でちよつと様子を見に行つてやつてください。

アンタさんだったら、他の人より対応はやさしーでしょ、たぶん。」

「たぶんなんですね。まあ良いんですけど。」

「…いや、すいませんね。風紀委員じゃねーのに来てもらつて。」

これを期にぜひ風紀委員に…とまでは言いませんがね。

感謝しますよ。ずいぶん楽に戦えましたし。

戻つたらゆつくり休んでください。お手伝いいただいた分は報いますんで。

ハッピークリスマス、渡さん。」

「委員長ですよ。残り物しかないでしょうけどパーティー楽しんでください。ハッピークリスマス」

テストメント・グリモワール

クリスマススのクエストから数日経ち年明けが近づいたことから俺も帰省に向けて準備をしていたが生徒会からの召集がかかり生徒会室へと来ている。

生徒会室には見慣れない少女がいる。たぶんまた新しく来た転校生なのだろう。ウェーブがかった紫髪のリボンがフードに覆われている。小柄な少女だがなんとなく占い師のような印象を与える。

彼女はグリモア学園の生徒の長たる生徒会長と話しているようだ。

「……………この学園の地下、ですか。」

「転校早々、こちらの都合で悪い。だがお前の魔法が必要だ。」

「ゆえ子の魔法は、近い未来を具体的に予知するには不向きです。」

レネイ女史やアングル・ツォフのような預言者とは違います。

「ご期待には添えられないかもしれませんが。」

予知系の魔法の使い手なのか…。

珍しい、というよりはかなり稀少な魔法で世界的に見ても彼女を含めて3人か？

「もともとお前は覚醒してそんなに日が経っていない。」

承知の上だ。アタシには年内にやっておきたいことがあった。

お前をダシに使ったようなものだ。」

そういえば風の噂で生徒会が闘技場地下の調査を、すると聞いたな。執行部への交渉のカードに彼女を使ったということだろうか？

「…むにやむにや…生徒会長さん。あなたの先は辛く険しいです。

ですがその先にある光を見失わないよう。これをどうぞ。」

それにしてもゆえ子という少女はすごく眠そうに見える。予知魔法を使用したようだが相当魔力消費がきついのだろう。

そんな彼女は懐から黄色の石を取り出し会長へと差し出す。

「ゴールデンカルサイト…栄光と繁栄の力を持つ石です。」

「ふむ…せっかくだがそれは受け取らないでおこう。」

アタシの目標は国造りだ。それを成し遂げるための力をつけねばならん。

自分の限界までやってみて、それでもだめだったら使ってみるとするよ。」

「そうですか。お強いのですね。」

流石会長というべきか。努力の鬼才ともいえるべき彼女だが本当に国造りを成し遂げそうだから不思議だ。

「さて、地下にいくわけだが、もちろんお前に護衛をつける。」

渡、と呼ばれて出番が来たかと前に出るのだが俺が護衛側っておかしくね？

「お前には西原の護衛を頼む。もちろんお前だけではない。」

何人か選んで行け。アタシたち生徒会も行く。

見つけるのは【最奥部】だ。この学園の、地下迷宮の一番奥。

そこに何かがあるらしい：詳しいことはわからないが：

第7次侵攻が終わった後に探すよう、代々の会長に受け継がれてきたんだ。

：1つ注意しておく。学園の地下に少なくとも今、魔物は確認されていない。

だが霧はどこにでもある：アタシは地下に閉じ込められて、著しく消耗した。

日をまたいでの探索は厳禁だ。それだけ、守ってくれ。頼むぞ。」

「そういうことなら。了解です。」

護衛は他にも寄越してくれるみたいだし安心だな。

まだ左腕も快復していないし落葉も修理中だ。武器は：右腕だけで使えるパイルハンマーで良いとして問題はこの腕だと銃器と併用できないことだな。そんなことを考えつつ準備にへと移行する。

—————

今回の闘技場地下の探索。参加メンバーは多く、把握しているだけでも散歩部（仲月さらしシロー）瑠璃川秋穂（冬樹ノエル）とその保護者メンバー（瑠璃川春乃 朝比奈

龍季)に図書館組(霧塚萌木 与那嶺里菜)。そして精鋭部隊の守谷月詠と来栖焔に護衛してもらっている俺とゆえ子のグループだ。各グループは各々探索しながら奥へ奥へと進んでいった。

「…凄い。コロシアムの地下がこんな風になってたなんて。」

確かにすごい、と春乃は感じる。コロシアムの地下、その圧巻の広さに驚いている妹。その顔がマジで天使すぎて鼻血が出そう。

「秋穂、危ない。お姉ちゃんに任せて。」

かわいいけどそれは横に置いといてもこの奥から嫌な感じがする。だから秋穂たちを自分より後ろに下げる。

「ワンッ！ ワンワン！」

さらの飼犬のシローも野生の勘になにか引つ掛かるのか牽制するように吠えている。

「シロー、どうしましたか？ こわいですか？」

「だいじょうぶですよ。たつきちゃんもはるのさんも来てくれましたし。」

「ノエルちゃんもいるからね！ バッチリサポートするよ！」

「…クソ。来なきやよかつたぜ。瑠璃川とかメンドクセーヤツがいたもんだ…」

おいさら！ お前、わざわざ参加する必要なかっただろーが。」
よくさらと一緒にいる…名前は覚えていないが黒い長髪のヤンキーのような雰囲気を持つ女がさらに質問を吐いているが知ったことではない。

だから横で漫才やってるのは放っておいて冬樹に質問をする。

「…冬樹。コロシアムの地下、なにか情報はある？」

「うーん。途中までの地図は渡されたけど、それが無い所の探索だから…

あんまり役に立たないかも。でも崩落の心配はないって。」

まずはひとつ不安の要素が消えたと見ていいだろう。しかし、聞きたいことはそこではない

「魔物は？」

「魔物？ ううん、特に…それに、出てたらとつくに大騒ぎじゃない？」

学園の敷地内は魔物は滅多に出ないし…」

「……………魔物が、いない？」

なら、こんな嫌な感じはしないわ…」

独りごちる

「…お姉ちゃん、どうしたの？」

秋穂に声をかけられ振り向く。心配そうにこちらを上目遣いで覗き見る秋穂はいつ

もより天使度が高い。

「ううん！ なんでもないよ秋穂！ なにがあってもお姉ちゃんが守ってあげる！」

「ひやつ！ ち、近い、近いよお姉ちゃん！」

「出なけりやそれでいいけどね。なんであろうと、妹には手出しさせないわ。」

そう。出なければ出ないでいい。出たら出たで対処法を考えるだけだ。

—————

さて、今回のクエストを共にするメンバーが顔を合わせた訳だが

「……………アンタが予知の魔法使い？」

「西原ゆえ子です…むにやむにや…」

常に眠そうだなこの子

「…最近の転校生って…いや、なんでもないわ…」

「なんで俺の顔を見る…」

月詠が俺の方を見ていた。解せぬ…

「明斗！ アンタとツクたち精鋭部隊がこの子の護衛よ！」

万が一にも傷つけないよう、ツクが指揮をとるからね！」

「ん。了解…」

「うぜー…」

来栖の方はやはり集団での行動は嫌いなのか月詠の言葉に辛辣な口調で返す。

「うるせえ。そのキーキーわめくの、やめろ。」

「…な、な、なによ！ アンタなんかねえ！ 今は偉そうにふんぞり返って…」

「黙れ、燃やすぞ。」

言い返そうとする月詠の言葉を遮り奥の方へと炎の魔法を放つ。その先にはポロポロに焼き崩れ、霧へと変化する異形があつた。

「ぐっ……………」

「な、なに、今の？」

「…むにやむにや。この先は安全ではなかったんですか？」

黒いもやが見えます。きっと魔物でしょう。」

予知の魔法の効果だろうか？魔物と断言して述べるゆえ子と

「…そ、そんな。だって学園の地下なのよ？ 魔物がいたら…！」

信じられないとばかりに目を見開く月詠。それもそうだろう学園の地下に魔物がいるという情報はなかった。

「んなのわかつてたことだろ。アタシたちも生徒会も行くんだ。」

なんも出ねえワケがあるか。

さっさと進むぞ。魔物が出てきたら、全部アタシが燃やしてやるよ。」

それだけ言うと焔は先頭に立ち進んでいく。

「さて、奥に進んで出るのは蛇か鬼か。まあ魔物はあるだろうけど…。」

「ちよつとツクが指揮を取るって言ってるでしょー!」

「それにして…な」

「そうね…なんというか。」

「端的に言つて今回の魔物キモすぎる。」

触手のような身体に目玉のような頭部を備えた異形。それが今回の魔物だ。

焔が暴れてくれていいるおかげで楽は出来ているがたまに抜けてくるものは流石に自分達の手で排除しなければならぬ。

というより焔の魔法は火力、範囲共に優秀だが本人が共闘するような性格ではないので下手すれば魔物共々焼き払われてしまう。仕方ないので近い魔物は自分達で倒すようにしている。

「…了解…まったくもう、萌木ったら! ただの古い家じゃない!」

「どした?」

「里菜から連絡よ。ここにある古い家と同じものを調査してて足止めくらってる、って」

「ふーん。」

目の前のそこそこ状態の良い木製の家…というより見張り台か？住むという用途として使うには風化しているとはいえ内装が簡易すぎる。すぐに外に出られるように窓やドアは大きくしてあり戦闘準備を速やかに行えるようになっていた。

柱に向かって蹴りを入れる。傷は…つかないか。

「魔法か。家の一つ一つに？いや、違うな。」

「あんたものんきに調べてないで魔物倒すの手伝いなさいよつ。」

「腕折れてるからパスで」

月詠の言葉にそれらしい理由をつけて返す。

「あんたさつきから片腕で戦ってたでしょーが！てゆうかなんで魔物が出るのよ！学

園でしょーこ！？」

「…」

焰は戦闘しながらも何かに苛立っているのか。考え込んでいる。

「…焰、アンタなにか知ってそうね。」

「テメーには関係ねえよ。」

「あなたねえ…」

「止めていた人がいたんですね。」

本日n回目の月詠と焰の口喧嘩が始まろうとしたときにゆえ子が呟く。

「会長さんから聞きました。精鋭部隊の一部の優秀者だけがここに入れると。

ゆえはよく知りませんが、たまたま魔物退治にきてたのですね、きつと。」

「…そんな、ツク、聞いてないわよ！」

「…クソツッ！ あのヤローが許可されてアタシはダメだったのかよ…！」

精鋭部隊でも上から数えた方が早いであろう二人も知らないということは来ていたのはエレンさんやメアリーさん辺りか。

後ろから足音が聞こえ振り返る。

「みなさーん！」

走ってきたのは中等部の制服を着た女の子…の格好をしている、所謂「男の娘」である。

彼女…ではなく彼は我妻 浅梨。第7次進行の前日に転校してきた生徒であり、「始祖十家」である我妻の一員である。

「あ、アンタ…！ なんでここに！ 討伐パーティーには入ってなかったでしょ！」

今回のクエストメンバーに彼の名前はなかったはずだ。それともどこからか要請を受けて？

「ええと、そうなんですけど…寮に帰ろうとしたらここを通らないと…」

は？

「なんでよ！ …はっ！ アンタ、いつも通る洞窟ってこのことだったの!?」

方向音痴とは訊いていたがここまでとは…

「そうですよ？ 皆さんも通りますよね？」

「どうやったら通るのよ！ いつもは封印されてて入れないじゃない！」

「そうなんですか？」

「警備ガバガバだなおい」

大丈夫なのか？

今度風子さんに相談した方がいいかもしれないな。

「……………むにやむにや。」

魔物は悪魔の使者。扉を抜けて現世に姿を現し、人に害をなす。

魔物の脅威から人々を守るには最終儀式を行わなければならないのです。」

「……………ああ？」

「…きゅ、急になにを言いだすのよ、この子…」

ゆえ子が眠気な目を空けながらよくわからないことを言い始めた。来栖や月詠も困惑している。最終儀式とはなんのことだ？

「我妻、浅梨さんですね。」

「はい？　そうですね。自己紹介しましたっけ。」

浅梨の名はまだ出ていない。ならば予知の魔法で彼が浅梨だと知ったのだろう。ゆえ子は懐から何かを取り出すと浅梨にそれを手渡しする。

「こちらを。」

「わあ、かわいいお人形ですね！」

「身代わり人形と言います。持ち主に降りかかる災厄をかわりに受けてくれます。」

「災厄？　なんだそれは？」

「はい。いつかわかりませんが、最終儀式が行われるとき……」

あなたの身に危険が迫るのです。その時のために、持つててください。」

俺の質問に曖昧な答えを返すゆえ子。

「はあ……」

浅梨は疑問はあるだろうが貰い物を無下には出来ないのだろう。人形を鞆の中へとしまう。

「……アンタね、預言者だか知らないけど、あんまり不吉なことばっか言わないの！」
「すみません。謝ります。ゆえの予知はあいまいで、ぼやけています。」

でも見えたなら、それを止めるのがゆえの義務です。

では次は……こちらの道ですね。」

わからないことをわからないままにしておくのは不味いのだろうが現時点では判断材料が少なすぎる。

考えても仕方ないのならば目の前の問題を片付けるしかないだろう。クエストを進めるためにも俺たちはゆえ子の案内の元、地下を進む。

奥へと進む俺たちの前に魔物が立ち塞がる。先ほどまでは数も質も良いとは言えなかったそれらだがここに来て同じものとは思えないほど強くなってきた。それは来栖と月詠にも余裕がなくなってきたことからも確かなことだ。

「…クソツ。魔物が強くなってきやがった。霧が集まってるんだ…」
「この奥から、霧が？ どこかに通じてるのかしら…」

額の汗を拭いながら思考を巡らせる来栖と月詠。

その横ではゆえ子の様子が先ほどまでとは違っていた。

「ふう…ふう…」

「ん？ …あ、アンタ、もうへばったの？」

「すいません…ゆえはずつと寝ていたので…体力がないのです…」

「寝てた？ お寝坊さんなんですね。」

「器用にボケるな。そういう意味じゃないから」

「ふう…あまり自分から言うことではないですが、ご迷惑をかけてますね。」

ゆえは生まれつき虚弱だったのです。ニュージールランドに住めるほど。」

「…ニュージールランドにいたの?」

ニュージールランドか…確か…

「魔物が現れてから300年、何故か一度も魔物が出現したことはない国、だったか?」
勉強で詰めた知識から思い出す。魔物が現れた記録がないという特異性からすぐに
思い出せた。

「はい、ゆえが生まれてすぐ、家族のニュージールランド居住許可ができました。」

ゆえは…日本では生きられないと判断されたのです。」

「…で、でも魔法使いに覚醒したんなら、普通の人よりは体力が…」

「だからニュージールランドを退去したんだろうが。言わせんな。」

「あ…そ、そうよね。ごめんなさい。」

「ご迷惑をおかけします。まだゆえは長時間の運動に慣れていません。」

しかし、ゆえ子の状態はそれだけではなさそうだが…

「渡。魔力だ。西原が満タンになるまで入れろ。」

来栖からの指示を受け即座に魔力譲渡を開始する。

「……………?」

ゆえ子は俺を不思議そうに眺めている。

「西原。テメー、魔力がどんどん漏れてるぞ。予知の魔法垂れ流した。体力がねえのもそうなんだろうが、魔力もほとんど残ってねえだろうが。」

「魔力がどんどん入るな。枯渇寸前、つてところかな」

魔力譲渡にかかっている時間から指摘してみる。

「そのようですね。ゆえの予知は…自分で制御できないので…」

「魔力が充実してりや、疲れが取れるのも早い。」

「アタシはさっさと進みてえんだ。動けねえんなら渡が背負いな。」

クソつたれが。テメーがいねえとこの迷路は抜けられねえ。

なにをしても連れてくからな。」

「ちなみに今、片腕折れてるからお米様抱っこしか出来ないぞ」

「遠慮しておきます」

背負えないので代案を出したがやんわり断られた。

「ん、そうだ。浅梨はクエストメンバーじゃないしさっさと帰れよ」

「あっはい」

「…つたく、よくこんな穴が開いててどうもねえもんだぜ。」

散歩部と共に地下を探索していた朝比奈 龍季は魔物を倒しながらも地下の頑丈さ

に首を傾げていた。

「すごいですねえ。おちちやったりししないんですねえ。」

横では仲月 サラが大きな穴を飼い犬のシローと共に覗き込んでいる。

「落ちたらたまったもんじゃねえよ。あんまり大規模な魔法使えねえな……」

生徒会長が行ったクエストでも岩盤が崩れ閉じ込められたと聞いた。二の舞は勘弁だ……

「うおっ!?!」

そんなことを考えていると大きな爆発音が聞こえる。やった犯人はわかっている。

「ふう……怪我はない? 秋穂。」

「お、おねえちゃん……そんなに全力でしなくても……」

「オラッ! 瑠璃川! テメー、どこもかしこも爆破してんじゃねえぞ!」

「は?」

「ここが崩れたらどーすんだよ! この前の討伐でもあつたんだろが!」

先ほどから魔物を爆破しまくっている瑠璃川 春乃に向かって怒りの声を上げる。

しかし、当の本人といえは……

「……………秋穂、行くよ。」

本当に妹にしか興味がないのかこちらの声を無視して先に進もうとしている。

「つ！ こ、このヤロウ……！」

「いい？ アタシとアンタは馴れ合うような仲じゃない。命令するな。でもうるさいから1つだけ言っておくわ。」

この村は人類の最前線だった。規模から見ると、常時100人……緊急時には300人くらいが住めるようになってる。

その魔法使いたちが魔物と戦うときに、アタシより威力を抑えてたと思う？」

「……ああ？ つまりなにが言いてえんだよ。」

「頑丈なのよ、ここは。全体が魔力でコーティングされてるんでしょね。」

なるほど。ここ全体が戦場として耐えうるよう魔力により耐久力を上げているのならば超高威力の魔法でもなければ崩落の危険はないだろう。

「……マジか。テメー、どこで知った。」

「カンよ。」

「はあ!? 舐めてんじゃねえぞオラ！」

納得出来る理由を出したかと思えばそのソースはカンだという。怒りでもう一度突っ掛かろうとするが後ろからノエルに止められる。

「あ、朝比奈さん、どうどう……お姉さんのカン、すごく当たるから。」

それに、さっきの爆発でもビクともしてない……多分、本当だと思う。」

「…チツ。自然じゃありえねえつてか。なにかあつたら遅いんだぞ。」

「なにかあつたら、そのときはお互い、やることをやればいいわ。」

「それだけのことでしょ。」

「…あ、あの、ごめんなさい。お姉ちゃんが…」

見ていられなくなつたのか妹である秋穂が頭を下げてくる。それを見て頭に血が上がりすぎていたことを自覚し落ち着く。

「オメーが謝ることじゃねえよ…あいつが謝ることもねえ。」

「さあ、行くぜ。しやらくせえけどな、この中で一番強いのはアイツだ。」

それだけ伝えると春乃の後を追うように洞窟の奥へと進むのだった。

—————

「ゼーっ、ゼーっ…つ、疲れた…どんだけ広いの、この地下…」

「…もうどれだけ下つたんだ？ さすがにこんな広さ…」

「ここまで施設があるなんて異常だ。深すぎるぞ。」

月詠と来栖もそろそろ体力切れだろうか。調査開始からずいぶん時間が経つたしかなりの距離下つている。それにも関わらず未だ奥は見えない。

「…むにやむにや…ですが、そんなに遠くではないです…」

「変な景色が見えるのです。きっとそれが一番奥なのです…」

「でもちよつと休みましょう。」

「そうだな。みんなの魔力も回復させた方がいい頃合いだな。」

魔力譲渡を開始する。戦闘担当の来栖と月詠を優先する。

「変な景色つて、なに？」

全員への魔力譲渡が終わった頃合いで月詠がゆえ子に質問をする。

「…空です。」

それに対しゆえ子は端的に答える。

「空？」

「はい…空が見えます。それに…削り取られた山、地平線…」

「どういうこと？ 地下に降りて行ってるのに、なんで空なのよ。」

「ここは地下だ。斜面は下へ下へと続いてた。つまりこの洞窟が地表の別の場所に

繋がっていることはあり得ない。ならばゆえ子の言う「空」とは何を指すものだ？」

「むにやむにや…すいません、これ以上は…ぼやけてはつきりしません。」

「チツ…今はそんなのはいい。それよりなにもなかったらただの無駄足だ。」

「なにかはあります。それが目的のものかはわかりませんが…」

「アタシはアンタを信じてねえ。ついてからだ。今は余計なことと言うな。」

ただ分かれ道さえ指してればいい。」

「だな。判断材料がないならここで時間を無駄にするわけにもいかないし。そろそろ行くか。」

少し休憩したおかげかゆえ子も再び自分で歩けるようだ。

ゆえ子が指し示す方向へと俺たちは進んでいた。

—————

「…おい、行き止まりだ。」

「も、もーだめ…はあ、はあ…歩けない…え？ い、行き止まり？」

休憩後さらに奥へと進んでいった俺たちだがどうやら最奥部に到達したらしい。

それにしても行き止まり、か。ならば、魔物はどこから現れた？霧が停滞しているわ

けでもないし。

「なにかあるぞ。」

来栖が見る方向には確かに何かがある。

「あつ！ ふ、ふしんなもの…近づいちゃ…らめ…」

息も絶え絶えで月詠が注意を促すが興味の方が勝っている。俺たちはそれに近づく。

「…行き止まり…変ですな…」

「変って、な…なによ…はあ…最奥部、よかったじゃない…」

「ですが…この先には空が…空が、見えるのです…」

ゆえ子は休憩の時から言っている空が未だ見えるといふ。しかし、ここは地下だ。また、壁を探ってみたが何処かに抜けるようでもないみたいだ。

「…適当言ってるわけじゃないみたいだけど…なさそうよ、空なんて。」

「はい…ゆえも行ってみるのです。なにかわかるかも。」

「…うーん…動けない…」

月詠は体力が完全に切れたか。周囲には魔物も居ないし放っておいても大丈夫だろう。最奥部にある何かに俺たちは近づく。

「これは…本…魔導書か？なんでこんな深い所に…んっ。」

「……ぐっ！　ぐぐぐ……！　なんだこりや、開かねえ……！」

「貸して。んっ！」

「ん？なんだこれ？」

「別に糊付けされてるとかじゃねえな…」

来栖と二人で推定…魔導書と思われるものを開こうと試みるがまったく開かない。物理的な理由で開かない。訳ではなさそうだ。ならば、考えられることは…

「魔法がかかっているようです。変な色になっています。」

「魔法？　本が開かなくなる魔法なんてどこのアホが作ったんだってんだ。」

そう。魔法だ。魔導書には危険なものも多いが魔導書な残す時点で中身を見られる

ことは承知の上で見られた時の対策をするものが大半だ。作った魔法が危険だと分かっているにも顕示欲には敵わないのだろう。

仕方ないクエストメンバーの中には萌木もいたはずだ。場所情報と魔導書がある旨を載せデバイスに送りつける。

「理由はなんとも。魔導書には危険な魔法がかけられているものもあるのです。」

「読むだけでドーにかなつちまうつてのによ。」

「あるいは開いただけで。許可された人以外が読まないようにしたり…

単純に、読んだ人を害するための悪意であつたり。」

「…っ。どつちにしろ開かねーんだ…だけど、これしかねえつてことは…

これが生徒会の探していたものなのか確認しねえと終わらねーぞ。

…クソツ。この表題…なんだ？ テスタ…」

「TESTAMENTです。ええと…日本語ではなんていうんですか…」

「テストメント…聖書、もしくは遺書という意味です。」

「ああ？ なんだ追いついてきたのか。」

「餅は餅屋だ。さつき萌木のデバイスに位置情報と魔導書があることを載せて送ったんだよ。」

「萌木、急に走り出すから困ったさー」

これで与那嶺と萌木は合流か。散歩部にも情報流しとくか。

「…聖書つて宗教かよ。」

「いえ、この表題…やっぱり、表紙をナイフで彫ったものですね。

これが聖書なら、旧約や新約を示す単語が無ければ不自然です。

どちらかと言えば、遺書と訳すのが正しいかと…」

「…誰が書いたのかわかるか？」

「貸してください…いえ、そもそもこの本自体が無銘です…」

TESTAMENTの傷をつけた人も、名前は残していません。」

「…魔法の力で開けねえなら…結局、意味わかんねえんじやねえか。」

来栖と萌木がテストAMENTについて話しているが結局は開かないため難航中、といったところだろう。

「あ、守谷さん。」

「秋穂…アンタたちもついたのでね…ふう…やっと体力が回復してきたかも…」

「ここが1番奥ですか？」

「まだあるでしょ。この先に。そんな気がする。」

「どうやら散歩部+ α も合流のようだ。」

春乃さんもゆえ子と同じく奥に何かあるように感じるようだ。

しかし、それは本当にこの洞窟の奥か？ならば魔物もこの奥から？いや、それより怪しいのは…

「アンタまで変なこという…そんなわけないでしょ。」

この先の土壁が見えない？　ここで行き止まりよ。」

「……………」

月詠の指摘を受け春乃は奥を見たまま止まっている。

「お姉さんのカンが外れたのって珍しいね。あ、まだ外れてないか。」

もしかしたら壁の向こうになにかあるかも知れないもんね。」

「うん…でも変な感じ。お姉ちゃん、いつもはカンが外れても…」

どうでもいいって風なのに。こんななにするなんて初めて。」

ノエルや秋穂ちゃんが春乃さんの方を見ながら色々言っている。確かに妹である秋穂ちゃんに依存しそれ以外だと興味をあまり持たない春乃さんだが洞窟の奥が気になっっているようだ。

「あ、壁叩いてる。確かに、いつもは確かめたりしないのよね。」

蹴りだしたよ…それでもビックともしないから…魔法…」

ノエルが春乃さんの実況をしていたが魔法使いだしたところで顔が青ざめていた。

「きゃーっ！　お姉ちゃん、やめてー！」

「春乃さんストップ。ストップ！」

秋穂ちゃんや俺が止めに入りなんとか魔法は止めれた。

「おい会長さんよ！ この本が目的のものかわからねえってどういう意味だ！

ああ？ 持ち出せねえんだよ！ 本だけ通さねえ見えない壁があんだ！

自分で見にこい！ いいな！

クソツ！ ワケわかんねえ、なんだこの本！

あのあと色々試してみたようだが一向に開かないうえに本を通さない見えない壁まであったため、一度会長に連絡した来栖。

「…魔物の数が少なくなりましたね。」

ゆえ子はここに来てから魔物がいなくなったことに気づく。

「…ああ、ここに来るまでは出まくってたのにな。それがどうした。」

「いえ…不思議に思っただけです。」

学園の地下に魔法使いの村。その奥に魔導書。魔物の数…

全てを繋ぎに説明できる理由がありそうなのです…

「んなのが簡単にわかれば苦労はねえよ…クソ、なんだってんだ。」

虎千代に呼ばれたと思えば闘技場の地下でのことを話され派遣される流れになったアイラ。

飛行の魔法で一気に下り、ついでに打ち漏らしの魔物を仕留めて奥へとたどり着いた。

報告の通り、魔導書と思われるものがあり。色々と試してみた。

「ふうむ…お、少年か。お主も気になつてるのか？」

明斗はといえば魔導書になにか秘密があると思っっているのだろう。こちらの作業を逐一観察していた。

「アイラさん、そろそろ戻らないと…お姉ちゃんが…」

「わかるとるよ。しかし虎千代のヤツめ、どつから情報を仕入れてきた。」

グリモア学園の理事長である犬川のじじいとは付き合ひの長いアイラであるが地下にこのような魔導書があるとは聞いたことがない。ならばあの生徒会長はどこから情報を手にいれたのだろう。アイラは考えを巡らせる。

「……………」

私立グリモワール魔法学園…グリモワール…

「フフフ…お主、ホンキで全部カンかそれ？ その通りじゃ。」

この魔導書があるからこそ、ここは「グリモワール」魔法学園なんじゃろ。」

春乃の呟きを聞き笑いが込み上げる。本当かどうかは分からないがカンのみで自分と同じ考えにたどり着いたか。

「え？ え？ どういうことですか？」

「中を見ると断定はできんがな。コイツは多分、魔導書に間違いない。

なぜならコイツにかかるとるのは時間停止…妾にかかるとのと同じ魔法じゃ。」

端的に魔導書の開かないため理由を教えてやる。

「時間停止？ そんな魔法、聞いたことない。」

「そりやそうじゃ。妾とアイザックが一緒に作った魔法じゃもの。」

「…アイザック？ 魔法使いのアイザック…ニユートン？」

有名人であるが歴史の教科書で見えないはずの人物を当ててのける春乃に本当にカンなのかと問い詰めたがそれに意味がないと分かっているので我慢する。

「お主、ちよつと気味悪いくらい鋭い…ま、今のところはそれでよいでな。

おそらくグリモアは、この魔導書を守るか…あるいは封印するか…

そのために作られたんじやろ。」

「なんでわかるんですか？ 偶然かも知れないですし…」

いや、それはない。なぜなら…

「時間停止はともかく、持ちだせないようにする魔法は時代が浅い。

学園ができてからも、定期的に魔法をかけとつたんじやろな。

やとつたのは精鋭部隊の一部……フッフ、つまりこれは執行部管轄か。

新参のエレンたちも多分知らんな。しかし妾からも隠すとは……犬川のジジイめ。」

「……東雲。時間停止の魔法、今も使える？」

「ん？ ……ククク、妾の話を本気にするとは珍しいヤツ。

どうした？ 誰かかけた相手でもおるんか？」

「……秋穂を……」

秋穂を天使のまま保存したい……！」

先ほどまでの様子と一転しある意味、通常運転と化した春乃。

「……お姉ちゃん……」

よだれを垂らしながら妄想に浸っている様は妹すらをもドン引きさせていた。

「……ふーん？ ま、残念じゃと言っておこう。

あれはアイザックの魔法じゃ。妾には使えん。つまり……」

この魔導書にもヤツがかけたということになる。

妾に隠しごととは、さすがアイザックじゃ。一筋縄ではいかんのう。

「それにしても、に、にしはらっ……」

予知魔法の使い手。名前は見たけど読み方あつてたっけ？

「さいばらです。」

ちがった。

「そうじゃ。お主が言うと思ったことも気になるでな。」

この先に空が見える…地平線も見える…とゆーとったそうじやないか。

春乃よ。お主もここが最奥だと信じとらんじやる?」

「帰る。」

アイラからの質問に対しそれん無視しての帰還にアイラは固まった。

「えっ?」

「魔物が出たら危ないから、帰るわ。どうせクエストは終わりなんでしよう。」

「あ、お姉ちゃん…東雲さん、すいませんすいません!」

踵を返した姉にこちらにすばやく謝りながら姉の後を追う秋穂。

「なんとドライなヤツめ…本気で妹以外に興味ないのか…」

ま、よいわ。今はこの【遺書】の存在意義じゃわ。」

「ど、どういうことよ! 意味わかんないわよ!」

ヒステリック一歩手前の月詠に疑問点の説明をしてやる

「中が読めん遺書とはこれいかに。この傷をつけた輩は…」

妾たちに謎かけをしとるようじやの。中身が気になるではないか。

時間停止の魔法を使ってまで見られたくない遺書とはなんぞや?」

「…アンタ、知ってるんでしょ。アンタの知り合いの魔法なんですよ、これ?」

「そうじゃとも。ヤツは優秀な科学者じゃったが、晩年に魔物が出現してからは…

魔導科学を専門にした。妾もいっしょに魔法の研究をしたものじゃ。

…じゃが、ヤツの魔法をここで見るとは思わなかった。」

そもそも時間停止の魔法は莫大な魔力を必要とする…

妾に匹敵する魔力を持つ輩がホイホイ見つかるわけがないんじゃない?」

この時間停止、アイザックは「誰と」やった?

自分の魔力総量に匹敵するものは「師祖十家」にもそういない。魔法使い最強と名高

い「ゴズミック・シユーター」あたりなら可能だろうが。

そしてそれを超える魔力量といえは「渡 明斗」。この少年になるだろう。しかし、彼

等がこれに関与する確率は0に等しい。確実に彼等が生まれるよりも前にはこの魔導

書は存在している。それに「時間停止」の魔法を唯一扱えるアイザックが生きていたの

は魔物が出てきて間もない頃だ。

「のう西原。まだ空や大地は見えるか…」

「むにゃ…はい、見えるのです。ぼんやりと霧に包まれたようですけど。」

「じゃがこの先はない。リーダーや魔法で探索してみたが、ずっと地中じゃ。」

お主が嘘を言ってるのではなく、ポンコツでもないのなら理由はなんじや？」
西原に謎かけをしてやる。ほとんど答えのようなものだが：

「……ここに、まったく違う場所への入り口があるのです。」

「そう。物理学的にどうだろうが説明がつくのはそれじや。」

空間同士をつなぐ魔法はもう少しで実用化できるし、不思議でもなんでもない。」

「…アンタ、が言いたいのもって…まさか、魔物が…」

「じやよ？ 風景が見える【予知の魔法使い】、アイザックが封じた魔導書…

ちなみに妾もそうなんじやが…時間停止の魔法は1年に1度、効力が弱まる。

この本にかけられた魔法が弱まる時期…それが今として…

時間停止で抑えられていたこの本が【開いて】霧と魔物が現れた。」

「…テメエ、マジで言ってるやがんのか！」

来栖 焔が突っ掛かってくるが涼しい顔で返してやる。

「モチ、大マジじや。これらの要素を繋ぐものは1つ。」

この【テストメント】は、どっか知らんが地球でない場所と繋がっておる。

というか開いたら繋がる。いわゆる【魔物の故郷】への入り口…

そういう話はどうじや？」

「だ、誰が信じるのよ！ ただの侵略説じやない！」

「しかし政府上層部でもまことしやかに『ゲート』とゆう単語が飛び交う。

上はすでに知つとるかもしれないのう。」

「『ゲート』が何かは実際のところアイラは分からない。しかし、そこから魔物が現れているらしい。という情報は掴んでいる。

ならばこの魔導書が開かないのはその『ゲート』を封印するためではないか。

「…クソツッ！ 聞いたアタシがバカだったぜ！ 帰る！」

「…状況証拠ばつかりじゃない。」

「霧に関しての研究はいつもそうじゃ。今の説以外にも可能性はあろう。

…次にこれが弱まった時、もし道が開くのなら…飛び込んでみてもいいのう。

そう思わんか、少年。もしかしたら魔物を一網打尽にできるやもしれんぞ。」

そう少年に話しかけるが少年は「ゲート」や「空間を繋ぐ魔法」、【魔導書】などと呟いている。彼にもなにか秘密があるのだろう。

しかし、アイラはそれを無理に暴こうとはしない。必要ならば向こうから接触してくるだろう。

—————

クエストが終わり寮の自室に戻るなり【狩人の魔導書】を取り出し、目を瞑りながら頭に逆さに吊るされた男のマークを浮かべる。

次に目を開けた先は「狩人の夢」であった。

工房へと足を運ぶと運が良かったのか、それとも狙ってだろうか狩人がいた。

「貴方に話があつて来た。」

「ふっ。良いだろう。ただ、少し待ちたまえ。落ち着いて話そうじゃないか。人形、お茶を」

そういうと狩人は俺を椅子へ座るように促し、人形にお茶を淹れさせた。

お茶が自分と俺の手に行き渡つたのを確認すると

「さて、話とはなにかな？」

そう話をするように促した。

俺は今回のクエストの経緯を話した。すべてを話した上で告げる

「ここはどこだ？【空間を繋ぐ魔法】で転移した地球にある場所なのか？」

「【夢】だよ。紛れもなくここは「狩人の夢」さ。君の夢を苗床に私が創つた。狩人に必須の【夢】。それがここだ。そう、ここは…ね。」

と言つてもここは確かに存在はしているんだ。私も人形もね。夢でもなく、現でもない。それがここだ。」

「分かりにくいな」

「君という狩人の夢を媒介に私という神格が造り出した小さな箱庭。それがここさ。」

「つまり俺が住んでいる地球とは時間的な繋がりも空間的な繋がりもない、と?」

「強いていうなら君が繋がりだよ。」

「なるほど。なら貴方はゆえ子が言っていた洞窟の奥の【空】については知っているのか?」

俺の質問に対し狩人は

「知っているよ。」

「ッ! なら…」

「しかし、君に教えてやる義理もない。それは君が自分の目で確かめることだ。」

なに、嫌でもそのうち知れるさ。」

「話してはくれないのですね。分かりました。そろそろ向こうに戻ります。」

手元にある紅茶を飲み干し椅子から立ち上がる。

「そうだ。狩り道具の整備はすべて終わっているよ。」

思い出したかのように狩人がそう告げる。

「わざわざ直してくれたのか。ありがとう。では、これで」

狩人に礼を告げ再び目を瞑りながら頭に逆さに吊られた男のマークを思い浮かべ

【夢】から覚めるのだった。